

## はたらく魔王さま! 8

恵美がエンテ・イスラの宮庭へ報告すると告げ出した。心配する千穂、明を仲はす四郎。一方魔王は、マダロナルドの新装束のため、免許取得を目指していた。

しかし、戻るはずの予定日を過ぎても、恵美は東京に帰ってこなかった。動揺しつつも平常心を保とうとする魔王は、危機を取る方法を標す鈴乃を後目に、試験を受けるため東京・府中の運転免許試験場へと向かう。途中、魔王はバスで謎の二人組と出会い……?

その頃、千穂の通う高校でも問題が勃発していた。勇者不在の中、果たして首都の平和は守られるのか!? 緊迫のシリーズ第8弾!



わ-6-8



はたらく魔王さま! 8

和ヶ原聡司



電撃文庫



電撃文庫



9784048915809

ISBN78-4-04-891580-9

C0193 ¥590E



発行●ASCIIメディアワークス

定価 本体 590 円

※消費税が別に加算されます



1920193005905



おまじょとし  
和ヶ原穂司

〔アニメ化を喜ぶ作者と絶大な数の視聴者〕

- 和「読者の皆様」に支えられて和ヶ原はここに立って  
おります」
- 和「その巻は一体の巻だ」
- 和「楽しくなる巻【たまたみ巻】に代えて  
新【スーパ〜】和ヶ原に登場」
- 和「うすぐ自分が書いたあとがき読み出して決意に  
仕舞い込ませい」

【電撃文庫作品】

はたらく魔王さま！  
はたらく魔王さま12  
はたらく魔王さま13  
はたらく魔王さま14  
はたらく魔王さま15  
はたらく魔王さま16  
はたらく魔王さま17  
はたらく魔王さま18

イラスト：029

コンビニでも魔王様達が動き出しますね！  
プライドのバトルが手に正解待機。

はたらく魔王さま! 8

和マ原監司

 電撃文庫

はたらく魔王さま! 8

和マ原監司

電撃文庫 1510



DENGKI BUNGO

# はたらく魔界さま

和ヶ原聡司

8

イラスト ■ Oniku  
Satoshi Waganara  
Illustration ■ Oniku





**CONTENTS!**

**序章**

**P010**

**勇者、しばしの暇乞いをする**

**P015**

**魔王、出会う**

**P063**

**魔王、出遅れる**

**P173**

**続章**

**勇者、泣く**

**P320**



team  
Docodemo

team  
聖天と聖手伝

team  
エゴタリ

BEEF 100%



**Emi Yusa  
& Chiho Sasaki**



Satoshi Wagahara  
Illustration Oniku

和ヶ原聡司

8

イラスト 029



## 序章

こんな日が来るなんて思いもしなかった。

今も悩んでいることは悩んでいる。

自分の立場を鑑みれば、これはもう立派な職場放棄である。背任である。

いや、それを言うならもう、最初の、あのときからもう、自分はずっと果たすべき勤めを放棄して、ただ漫然と日々を過ごしていたのだ。

挙げようと思えば、そうせざるを得なかった理由はいくらでもある。

だが、その都度自分が能動的に、物事を決めてきたかといえば、絶対に否だ。自分は流されていた。

ただ、目の前の出来事を片付けることに終始して、目的から目を背け、気づけばそうすることばかりになり、そして今や最初の目的は、自分の中で重要ではなくなりつつある。はつきり言おう。もはや、

「魔王を本当に殺してしまっているのか……私にはもう分からない」

「……そうですかー」

電話の向こうの若い友の声には、非難の色は微塵も無かった。

むしろ、どこかホッとしたような、自分を氣遣うような色さえあった。

「なんだか、こうなる氣はしていたんですよねー」

「こうなるって？」

「んー、前に会ったときですけどー」

友は苦笑交じりに言う。

「さっと次に会うときも、エミリアは魔王を倒してはいないんだろなりって」

「返す言葉も無いわ」

「いいんですよ。エミリアがそう思うならさっとそう思うだけのことがあったんでしょう

しー。それに」

友は、珍しくはつきりと言葉を切って、そして言った。

「エミリアには、選ぶ権利があるから」

「どういうこと？」

意味が分からずに問い返すと、

「オルバに裏切られたとき、エミリアは私達に復讐することでもできたはずなんですー」

「ええ？ そんな、私があなただちにそんなこと……」

「私やアルバートってことじゃないですよ。教会や、エンテ・イスラ全体にですよ。世界は、

エミリアの恩を仇で返したんですから、エミリアが復讐しようと思つたら、それを止める権利は誰にもありませんし、止められる人も實際いませんし」

「なんだ、そんなこと？」

本当に魔土を救ふことだけを考へていた少女勇者だった時代なら、仲間裏切りや世界が自分が死んだことに納得してしまったことに絶望したかもしれない。

でも、今は違う。

「だってこれだけインターネットが普及してみんなが携帯持つてる世界でも、正しい情報を取捨選択するのは難しいのよ？ 封建社会から抜け出てないエンテ・イスラで、それくらいの誤解があつたからっていちいち気にしてられないわ」

「いんだーねっしょ？」

「ううん、こつちの話。とにかく、私はもうちょっと単純で鈍感だから、そんな馬鹿なこと考へたりしないわ」

「よく分かりませんがどう安心しました。でも、そうしなくなつたらいつでも言つてくださいわ？」

「そそのかしたいの？ 止めたいの、どっちなの？」

苦笑して聞いかけると、あっさりした答えが返ってきた。

「エミリアがどっちの道を選んでも、私はエミリアの味方ですから、一緒に世界を滅ぼすの

もやぶさかじやありませんのでー」

「人類最強の法術士が物騒なこと言わないで、教会に目をつけられても知らないわよう。」

「もうメザシにしてお魚屋さんに歸せるくらいつけられてるんでーどうってことないですよー」どこまで本気が分らない友の言葉を軽くいしながら、足元を見る。

そこには、ばんばんに膨れた大きなリュックサックが一つ。

「とにかく、今度の週末、よろしくね」

「任せましたー」

エンテ・イストラ最強の法術士にして旅の仲間、エメラダ・エトウーグアは快活な口ぶりで答えた。

**「つづいて、つづいて」**



夕食の席は、普段と変わらぬ穏やかな時が流れていた。

湯気を上げる炊き立ての米と、大根の味噌汁、電子レンジで用いる特殊なクッキングシートのおかげで、最近はおき魚も食卓に並ぶようになった。

もう一品の冷奴の上には刻んだミョウガ。卓の中央には大皿に茄子のしき焼きが置かれる。テレビに映るニュース画面は、トップから地方で行われた伝統行事の話題で、この日に限っては世の中の平穏を乱すような事件事故が無かったことを伝えている。

聞け放たれた窓は夜も近くなってわずかながら風を通し、町のかすかな生活の気配を室内に伝える。

今この夕食時、世の中はとても平和なんだと、誰もが実感するそんな東京の片隅のアパートの一室。

東京都渋谷区世塚にある木造アパート、ヴィラ・ローズ世塚二〇一号室に入居する魔王城のそんな平穏を、たった一言が破った。

「私しばらく、実家に帰らせてもらうわ」

平和な家庭の夕食時に似つかわしくない、平和の皮を被った爆弾のような発言に、誰もがその場で固まった。

「あ？」

「なんだと？」

「なんだって？」

「ど、どういことですか？」

「じ、実家？」

「おとうふすきー」

その場にいた六者六種の反応に、その爆弾を放った女性、異世界エンテ・イスラの勇者エミリア・ユステイーナこと遠佐恵美は目を瞬かせる。

「な、何よその反応」

書籍を片手に、珍しくパソコンデスクに座っているこの魔王城の主、魔王サタンこと真栗貞夫がひきつった顔で答えた。

「皆お前のその発言の真意を掴み兼ねてんだよ」

「はあ？」

怪訝な顔で聞き返す恵美に、投げ放たれた押し入れの二段目から、普段はパソコンデスクにいまするの男が補足した。

「エミリア、お前今のセリフもう一回言い直してみなよ。佐々木千穂なんか早くも頭の中で、真奥とお前とアラス・ラムスを中心にしたとろとろの家腐トラマを頭の中で展開して、一人で参戦きたしそりになっ……」

「漆原さんっ!!」

「うわっ！ あぶな……」

世界で二番目に押し入れに収納される姿が似合うこの部屋のお荷物、随天使ルシフェルこと漆原千穂が皮肉な笑顔を浮かべて言う。

名指しされた女子高生、佐々木千穂は真っ赤な顔をして、漆原を押し入れの中に突き飛ばして襖を閉めてしまった。

「おいこら佐々木千穂何すんだよ!!」

押し入れの中から襖を叩くぐもった漆原の抗議の声。

「いきなり変なこと言う漆原さんが悪いんです」

千穂は自重しない漆原を止めるべく、外から真っ赤な顔をして襖を押さえる。

「ちーねーちゃ、かおまつかー」

そしてそんなことを足元から指摘する無邪気で詐作りな声。

今まで千穂と一緒に遊んでいた、真奥と恵美を両親だと信じている赤子、アラス・ラムスは床に広げたあいうえおシートを踏みつけてしまっている。

「あ、アラス・ラムスちゃん、は、はらー、もうすぐごはんだからおかたづけしようねー」  
今更ごまかしても仕方ないのだが、

「あいー おたかかずけ、する!」

ビニール製のあいうえおシートは、どんな無茶な畳み方をしても破れたりしない高価な短育

玩具だ。

「で、でも遊佐さん、本当、どういふことなんですか？」

真美が身銭を切つて購入した知育玩具を、アラス・ラムスが子供らしくぐちゃぐちゃに畳むのを見ながら、千穂は改めて尋ねる。

「どういふもこういふもそのまゝの意味で……近いうちに実家に帰ろうと思つたけど……」

「しかしエミリア、実家、とは……」

キッチンでシンクで調理に使つた道具を洗つていた和服姿の女性は困惑顔で尋ねる。

「うん、西大陸の私の故郷。スローンっていうセント・アイレの外れの農村よ。今押し入れに閉じ込められてる奴の軍に滅ぼされた、ね」

真美は鋭い視線を押し入れに送る。

「だから私の留守の間、ベルにこいつらのことお願いしたいんだけど……」

クレスティア・ペル。エンテ・イスラの高等聖職者であり、日本では縁月鈴乃と名乗る彼女は、食器用洗剤の泡を落として手を拭つてから、困惑顔のまま続けた。

「もう少し具体的に話してくれ、意図が掴めん」

「そ、そうですよ遊佐さん、帰るって言つても、簡単じゃないんでしょ？」

「そうね、ちよつと端的すぎたわ、ごめんなさい。実は……」

女性二人の詰問にいくらなんでも言葉が足りないと感じた真美は苦笑しながら姿勢を正そう

として、手懸と鈴乃の背後に立つ男に気づく。

「貴様がどこへ行くとも私は一向に気にしないが……私が丹精込めて作った味噌汁が貴様の都合で冷めるのは我慢ならん」

威圧的な声は、味噌汁の大鍋を抱えていた。

悪魔大元帥アルシエルこと芦屋四郎は、パソコンデスクの主に向かつて声をかける。

「魔王様、食事の用意が整いました。勉強を中断して、席についてください」

「へいへい、ちやうど恵美のせいで集中力も切れちゃったしな」

「何よ、人のせいにしないでくれる？」

「おとーふ！ あるしよーる！ おとーふ！」

大鍋を握った芦屋の足元にいつの間にか歩み寄っていたアラス・ラムス。

「こらアラス・ラムス、鍋を持った人に近づくと危ないぞ、さあ、ままのところでいい子にするのだ」

芦屋の足から鈴乃の手によってやんわり引きはがされるアラス・ラムス。不満げな顔をしつつも恵美のところに歩み寄る。

「ままー！ おとーふ！」

「はいはい、いただきますしてからね。アルシエル、私の冷奴にはミョウが載せないで頂戴。アラス・ラムスにも食べさせるから」

目頃、アラス・ラムスの食事は、基本的に恵美と真美、いずれかのものを取り分けてやる形になっているのだが、芦屋は恵美の分の冷奴とアラス・ラムスを見比べてから献しい顔で首を横に振った。

「却下だ。アラス・ラムスが好き嫌いをする子に育ったらどうする」

勇者と悪魔大元師の会話としてはどこがおかしいか分からないほど何もかもがおかしいが、

「で、でも芦屋さん、赤ちゃんにミヨウガはキツイと思いますけど……」

ただ一人の純粋日本人である千穂は、その問題点を的確に射抜く。

「香りの強い野菜は慣れが肝心です。この滋味が分かれば日々の食事もより美味しく……」

千穂の理詰めには弱い芦屋が珍しく反撃するが、

「でも分かるなあ。僕、正直ミヨウガって苦手」

押し入れからのそのそ出てきた漆原に話の腰を折られて憤然とする。

「ルシフェル、貴様それでも堕天使か」

「この歳までミヨウガなんか食べることなかったもん仕方ないじゃん。堕天使がミヨウガ好きなんて神話は聞いたことないけど」

確かにエンテ・イスラにも魔界にも、ミヨウガを載せた豆腐に相当する料理は存在しなかった。

だから、というわけではないのだろうが、このときに限っては珍しく漆原に賛同者が現れる。

「実は俺もちょっと苦手で……」

そんな情けないことを食卓につきながら言うのは、かつて魔界を統一し、人間の世界エンテ・イスラに覇を唱えんとした偉大な魔王サタンその人であった。

今日このとき人類は、世界征服を目指す強大な敵の弱点を知った。

魔王は、冷奴に載ってるミョウガがちょっと苦手。

「真奥さん……」

「魔王様……」

「魔王、貴様という奴は……」

千穂と吉屋と鈴乃の、呆れとも情惻ともつかぬ複雑な視線を浴びて、真奥はたじろぐ。

「で、でも食べられるから！ 俺、飯残したことがないし！」

「じゃあアラス・ラムスのお豆腐のミョウガは、ばばに食べてもらいましょうね」

勇者エミリアは、そんな魔王の隙を見逃さなかった。

千穂と吉屋と鈴乃の前でうろたえる真奥の目の豆腐に、自分の豆腐に乗っていたミョウガを

まるまる箸で移してしまふ。

「あっ！ 恵美お前！」

山盛りになった自分の豆腐のミョウガを見て悲鳴を上げる真奥だが、恵美は素知らぬ顔だ。「文句ならアルシエルに言って。いくら好き嫌いがダメって言ったって、アラス・ラムスくら

いの年の子にミョウガなんて食べさせても嫌がるに決まってるでしょ。何せ世界征服の野望を抱く魔王でさあ苦手なんだもの」

「う……」

反論できない真奥。そんな様子を見て、悔しそうな声屋。

「むむむ、ベル、なんとか言ってやれ」

「アルシエル、いくらなんでもアラス・ラムスにミョウガは酷だ。それよりエミリア、私の部屋に滅塩醬油があるから取ってこよう。普通の醬油よりはアラス・ラムスにいいだろう」

ばたばたと隣の自室、二〇二号室へと向かう鈴乃。その背を見ながら漆原は、何も言わずに鈴子のしき焼きに箸を伸ばす。

「こうやってみんなから甘やかされるアラス・ラムスの将来が心配だー」

「漆原さんー アラス・ラムスちゃんもいるんだから、ちゃんといたたまますしててくださいー」

「育児ってのは難しいなあ。こうなっちまうのは確かになあ」

「真奥、真奥、なんで僕とアラス・ラムスを見比べながらそんなこと言うの」

「自分の胸に聞いてみたらどうですか。アラス・ラムスちゃんの方がずっと聞き分けもお行儀も良いですよ」

千穂は容赦ない。

「待たせたな。醬油、あったぞ」

そこに鈴乃が滅塩醬油を持って戻ってきて、最初の話題を見失った芦屋は諦め気味で降参した。

「……仕方ない、いい加減味噌汁が冷めてしまう。食事にしよう」

「あ、芦屋、俺米大盛りで」

「いけない！ お母さんから唐揚げ持たされてたんだ。芦屋さん、レンジ借りますね？」

慌てた様子の千穂が、持ってきた籠の中から大きなタッパを取り出す。

「いつもすいません佐々木さん、使い方は……」

「大丈夫です。危ない危ない忘れるところだった……」

魔王の城で、悪魔大元帥と聖戦者が並んでキッチンに立ち、女子高生がおかずを差し入れ、行儀の悪い堕天使を見張りながら勇者と魔王が育児について考える、そんなあまりにもシュールでおかしくそれでいて平和なヴィラ・ローザ監獄二〇一号室の日常は、結局のところ、生半可なことでは揺るぎはしないのであった。

それが良いのか悪いのかは、今は誰にも分からないが。

## 源

いがみ合いながらもなんたかんだで平和に過ごしてきた魔王と勇者の日本での生活に、明確

に影が差したのは夏が終わる間際のことだった。

真奥が惠美に敗北した後、エンテ・イスラを征服すべく新たな魔王軍を興したバーバリツテ・イアを首魁とするマレブランケ頭領格達。

かつて惠美の仲間として真奥を追い詰め、今は惠美の敵として真奥もろとも亡き者にしようとする陰謀するエンテ・イスラ大法神教最高権力者の一人、オルバ・メイヤー。

彼の情報を基に、マレブランケ頭領格の一人ファーフアレロは、真奥と吾郎を新生魔王軍の長として迎へ入れるべく日本を訪れる。

惠美も鈴乃も、真奥の魔王軍復帰を危惧したが、二人の予想に反し、真奥と吾郎はファーフアレロの申し出には乗らなかった。

となればファーフアレロが日本に危害を及ぼす前に、鏡子に襲来したチリアットのよう

に魔界に送還するなり惠美が抹殺なりすれば良いはずだった。

しかしファーフアレロが伴っていた一人の少年の存在が、事態を複雑にしてしまう。

エンテ・イスラの聖典に語られる生命の樹セフィロト。そこに生る世界組成の宝珠セフィラ・ダブラーから生まれた少年、イルオーン。

イルオーンは、惠美の聖剣と融合しているセフィラ・イエソドから生まれた赤子アラス・ラムスと同質の存在であり、その秘めたる能力はときに勇者や魔王、大天使すら凌駕する。

彼がなぜマレブランケの頭領格に使役されていたかは定かではない。

ファーフアレルロ一人ならともかく、セフィラから生まれた子供に対し、狂國な対応を取れば、マレブランケだけでなく天界を刺激し、余計な敵を呼び寄せることになりかねない。

しかもなお悪いことに、狂國に刺激できないその二人に、千穂が真奥や恵美にとって重要な人物であることを知られてしまう。

このままでは、真奥や声屋を義務できないと知ったマレブランケ一党が千穂を人質にする可能性すらある。

恵美と鈴乃は、千穂自身の強い希望もあり、身に危険が迫った場合に恵美や真奥にSOSを出せるようにと千穂にテレパシー応用の効く法術、概念送受を教えた。

簡単なエサにつられてあっさり真奥達に協力的になったサリエルの力もあって、順調に術を習得する千穂。

さらに真奥は、単純に千穂の安全を場当たり的に確保するだけでは事態は解決しないと判断。わざわざファーフアレルロの目の前で恵美と鈴乃の力を借りて『魔王サタン』の姿を取り戻して見せる。

それによって千穂、恵美、鈴乃の三人が世界征服に重要な役割を担っていることを示し、新たな悪魔大元帥に指名して見せることで、ファーフアレルロとイルオーンに、平和的な帰還を促すことに成功した。

だが、これでマレブランケ一党に公式に『悪魔大元帥』として認識されてしまう恵美と鈴乃

の怒りは尋常ではなかった。

また、確かにフアーファレルロやマレブランケ一党がすぐさま千穂の身柄を危険に晒す事態は避けられたものの、時間が過ぎ、エンテ・イスラ側の状況が変われば、「魔王サタン公認の悪魔大元帥・佐々木千穂」の名の持つ意味が重くなる可能性もあり、結局のところ真奥や恵美を取り巻く事態に最終的な決着を見たわけではなかった。

真奥の魔王軍復讐を頼るマレブランケ一党、新たなセフィラの子、天界の秘密。

過酷な異世界の不穏な風を感じつつも、日本に生きる魔王達は、明日の食事のために今日の仕事に精を出す。

そんな、夏が終わったにも関わらず世界が熱を帯びはじめる、九月のことだった。

## ※

日が暮れるのがほんの少しだけ早くなっても、七時過ぎてなお空はうっすらと明るく、京王線有楽町駅への道はまだまだ暑気を残していた。

おなががいっぱいになってすっかりおねむのアラス・ラムスを抱っこする恵美と、鈴乃。その後ろを千穂と真奥が歩く。

恵美とアラス・ラムスが魔王城に来る日は、極力千穂も夕食会に参加するようにしていた。

千穂は全員を前に堂々と断言したものだ。

「だって私がいけないと真奥さんと遊佐さんすぐ喧嘩するんですもん」

ファーフアレル口との一件以来、前にもまして千穂は真奥達の間係を良好なものにすべく精力的になっており、真奥も恵美もその勢いに少なからず押され気味である。

千穂本人には知られていないものの、三人は千穂の真奥達に対する悪いのたけを隠れずも聞いてしまっており、そのあまりに真っ直ぐな心になかなか対抗できないのだ。

それを置いても千穂が魔王城に来れば夕食の席は豪華になるし、アラス・ラムスも喜ぶしと基本的に良いことばかりなので、その代わり帰りは真奥と鈴乃が責任を持って千穂を家まで送り届けるというルールがいつの間にか出来上がっていた。

「それでエミリア、実家に帰るとはどういうことだ」

帰りの道すがら、鈴乃は尋ねる。

結局夕食の席ではうやむやになってしまった話を持ち出すと、

「そうそう！ そうです遊佐さん！ どういうことですか！」

真奥とアルバイト先のことで話を弾ませていた千穂が後ろからいきなり飛び込んでくる。

「お……」

決して広くない住宅街の裏道を女性が三列横隊で歩きはじめていいて、真奥は話の輪に入ろうにも入ることができず、出遅れたまま三人の後ろを十二すことについていくしかなくなってし

まった。

恵美は千穂と鈴乃の好奇と不審の目に、小さくため息をつく。

「いい加減、待ってるのに飽きたのよ」

「どういうことだ？」

「……日本で魔王と再会してからこっち、とにかく身に覚えのないトラブルばかり降りかかってきて、その程度なんとか切り抜けてきたけど、そもそも私の目的って何？」

「蓮佐さんの、目的？」

千穂が本気で首を傾げるのを見て、恵美はがっくりきてしまう。

「千穂ちゃん、一応私、人類の希望を背負った勇者なの。私が日本に来た本来の目的は」

「かれー……………むゆ」

「ふふっ……………すまん」

すっかり寝込んでしまったアラス・ラムスの作爲的とも言える寝言に、背後の真奥が思わず吹き出すが、振り返った恵美の鋭い眼光に気づいて珍しく素直に謝る。

「……エンテ・イスラを征服しようとした魔王を倒すこと……のはずなの」

恵美はそう言いながら、自分の眼光で萎縮してしまっている真奥を指差す。

「まあそれは分かるが、そんなことより、それとエミリアの勇者とどう繋がるんだ」

鈴乃は先を促すが、魔王を倒すのが目的の勇者に、魔王をそんなことよりと断じて放ってお

かせるのもどうなのだろうか。

「そうね」

真奥が特に反応しないので、惠美も興味を失って正面に向き直ると、自分の腕の中で安心しきつて眠り込んでいる赤子に目を落として言う。

「でもアラス・ラムスのこともあって私が魔土を斬りめぐってゐるうちに、あれよあれよという間に天使だ悪魔だなんだって押し寄せてきて、勝手に私達の周りを引っ掻き回してくれてるわけじゃない？」

「まあ、そうだな」

「というより私達三人以外、そもそも人間がいなかったような……」

千穂の自然な疑問はこの場ではスルーされた。

「とにかくここ最近、日本に来るまで無関係だった外野に好き勝手されすぎて嫌になっちゃって、せめてこれからどんな外野にちよっかい出されてもいいように、一度エンテ・イスラに戻った方がいいんじゃないかと思つたのよ」

「戻って、悪い人達みんなやつつちもやうつてことですか？」

惠美の説明の仕方も端折りすぎだが、千穂の考えもあまりに直線的である。

「なんて言つたらいいのかなあ……ベルが来てすぐぐらいのころから、何かと色んな人に要領が狙われてたじゃない？」

「そういえば、サリエル様も最初はやたらとエミリアの聖剣に因執していたな」

「でもそれは、結局アラス・ラムスちゃんと関係してたからなんですよわね？」

大天使サリエル、ガブリエルは、表面上聖剣の奪取を目的として挙げていた。

アラス・ラムスの登場で「進化聖剣・片翼」はセフィラの欠片が核となる武器だということとが明らかになり、天界勢力は「進化聖剣・片翼」やアラス・ラムスの核となるセフィラ・イエソドの欠片を集めることを目的としていることが分かったのだが……。

「天界だけならまだ良かったけど、鉄子では悪魔の子リアットがイエソドの欠片を狙ってたわ。それどころか今東大陸にいるマレブランケの軍団がイエソドの欠片を持ってるみたいだし、この間のイルオーンだってセフィラから生まれた子なのに悪魔が連れてた……」

「一番簡単なのは、実は天界が悪魔と繋がっていた、という話だが……」

鈴乃の言う通りそれが一番単純な解だが、

「な、なんだよいきなり」

前を歩く三人に突然一斉に振り向かれ、手持ち無沙汰にいたらたと歩いてた真奥はたじろいで目を見開く。

「それならここにいてこいつはどうして？ ってことになるでしょ？」

「そうだな。そもそも魔王は自分が持っていたイエソドの欠片がアラス・ラムスになったことすら知らなかったわけだし、どう考えても魔王亡き後興ったマレブランケ軍に天界が味方する

理由が見当たらない」

「何を話してのるか知らんが、勝手に亡き者にすんな！ 俺は今日も元気だ！」

真奥の魔王生存報告は、完全に無視された。

「で、思ったの。イルオーン……セフィラ・ゲブラーについては手がかりが少なすぎてどうにもならない。でもイエソドについては、結核身近に手がかりがあるのよ。考えてもみて、どうしてサリエルやガブリエルはイエソドの「欠片」を集めることになったの？」

「え？」

聞いかけられていることの意味が分からず千穂は首を傾げる。

「……一応言っとくけど、そろそろ駅だぞー」

後ろから真奥の声がするが、三人は意に介さない。

「そもそもどうしてイエソドだけ「欠片」なの？ 簡単よ。今般らが欠片を集めているってことは、『砕いてあちこちにバラまいた人』がいるのよ」

「迷惑な話だな」

真奥は誰にも聞こえないと分かかって恵美の言葉に相槌を打つと、道端に捨てられていた空き缶を拾って、すぐそばの自販機脇の空き缶入れに放り込もうとして、中がいっぱいで仕方なく空き缶入れの上にそろりと立てて戻ってくる。

「ああ……そういうことか」

「え？」

鈴乃が一足先に納得したように頷く。

千穂は分らない様子だったが、恵美がアラス・ラムスを支えるのと反対側の手で千穂の手を取って、一つの指を指す。

「……あー」

そこには紫色の小さな宝石が嵌った指輪。

「『砕いた』かどうかは知らないけど、『バラまいた』一人であることは間違いないわ。現にこうして一つ、目の前に例があるわけだし」

千穂の指にあるのは、恵美の聖剣の柄やアラス・ラムスの額にあるのと同じ、イエソドの欠片のあしらわれた指輪である。

千穂がこの指輪を手に入れるきっかけになった騒動の中で、千穂は指輪以外に、ある記憶を一瞬に受け取っていた。

それは、千穂には知りえない遠い世界の記憶。もしかしたら、遠い過去の記憶。傷ついた小さな悪魔と、麦畑に佇む一人の男性。

「遊佐さんの……お母さん？」

「そういうことね」

恵美はうんざりした表情で頷くと、千穂の手を離した。

「つまり、私が生まれる前とか、何も知らない子供だったころのエンテ・イスラでの私のお母さんの足跡を辿れば、何かあるんじゃないかと思つたの。手がかりがあればめつけもん、てくらの感じの当て推量なんだけど」

返す返すも悔やまれるのは、旅の仲間であるエメラダとアルバートが漆原とオルバに狙われる恵美を助けに日本に来たとき、わずかの間でもエンテ・イスラに帰っていれば良かったということだ。

恵美の母ライラは、ほんの一時、エメラダの許に身を寄せていたらしい。

だがあのときの恵美には、日本に信頼できる仲間はおらず、真奥もまた、軽々に目を離していい存在ではなかったのだ。

悪事を働かないまでも、狂瀾にエンテ・イスラに戻っている間に引つ越してもされれば、また彼らの行方を一から探さねばならなくなる。

一年近く、たった一人で日本社会を生きてきた恵美にとって、せっかく辿り着いた魔王を再び見失うなど、あつてはならないことだった。

エメラダとアルバートに真奥達の見張りを頼むという選択肢もあり得なかった。

何故なら元々田舎の農家の娘でしかない恵美と違い、エメラダもアルバートも、人間社会が平和ならば、それぞれ責任のある立場である。

有体に言つて、恵美とはそもそも身分が違う。

魔王軍がいなくなり、それでいて教会や諸王国の旧態然とした権力構造が復活しそうになったエンテ・イスラで、二人のような有為の人材を異界の地に留め置くなどできようはずもない。それに、エンテ・イスラの魔王軍壊滅時点での惠美の本気の実力は、総合的な戦闘能力という意味でエメラダ、アルバート、オルバの三人が束になつてようやく敵うかどうかというところまで成長していた。

漆原・ルシフェルを首都高での戦いで殺さなかった時点で、日本で悪魔二人を向こうに回して學騎で勝てる可能性があるのは、勇者エミリア以外あり得なかったのである。

真奥達にとっての千穂の存在の重要性がもっと早くに高まっていれば。

鈴乃がやってくるのがほんの少しでも早ければ。

故郷の村に帰ることを考えた惠美の中では、そんな益体のない思いも湧いたことはある。

だが千穂と真奥達の信頼関係はこの半年の間に築かれたものだし、鈴乃の来訪も、そもそも漆原とオルバの懸念なくしてはあり得なかった。

惠美を取り巻く全てが、ごくわずかな食い違いによって惠美の望んでいた通りにならない。

無論それは言っても詮ないことである。

それに、

「ん……にやむ……んよ……あ、まよ、かえるの？」

いつの間にか養蜂場の改札まで通り着いていた四人。

構内放送や電車の通過音がうるさかったか、顔を蒙<sup>おほ</sup>めながら目覚めたアラス・ラムスが、周囲の様子を見ながら寢<sup>ね</sup>ぼけ眼<sup>め</sup>で見上げてくる。

「お、起きたかアラス・ラムス。また遊びに来いよ」

目ざとくそれに気づいた真奥<sup>まおく</sup>がアラス・ラムスのソミジの手を握りに来る。

「またねアラス・ラムスちゃん」

「家に帰るまでいい子にしているのだぞ」

千穂<sup>ちほ</sup>と鈴乃<sup>すずの</sup>も恵美<sup>けみ</sup>の肩越しにアラス・ラムスに柔和な笑顔<sup>えがこ</sup>を見せる。

「望んでいた通り」になっていたとしたら、こんな暖かい時間はさっと体験できなかったらう。

これはこれで、最近、悪くないと思いはじめてはいるのだ。

「今日<sup>けふ</sup>はあんまりかまってやれなくてごめんな」。この次はいっぱい遊ばうな」

「やくそくー」

少しずつ覚醒<sup>さくせい</sup>してきたアラス・ラムスは、真奥に向けて思い切り手を突きつける。

まだ、小指<sup>こさき</sup>だけ出す、という甚<sup>し</sup>当<sup>とう</sup>は難しいようだ。

「おう、約束だ」

「……今日<sup>けふ</sup>は一体何してたわけ？ 珍しくパソコンなんか使って」

真奥<sup>まおく</sup>にしては本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>に珍<sup>めづ</sup>しく、アラス・ラムスより優先するものがあるらしいことに恵美<sup>けみ</sup>も驚

いていた。

いつもは何を放り出してもアラス・ラムスとの時間を作ることだけは忘れない真奥だけに意外だったのだが、その答えはもつと意外なところから来た。

「真奥さん、近いうちに免許取らなきゃいけないんです」

千穂だった。

「免許？」

それは鈴乃も初耳だったようで、驚いた様子を見せた。

「免許って……車の？」

日本の日常会話で「免許」と言えば、普通は運転免許のことを指すだろう。

まさか今から真奥が武術の免許皆伝など目指すはずもない。

真奥も日本の法律上は成人男子なわけであらうが、運転免許を取得できる年齢ではあるはずだが、

恵美も鈴乃も、気にしているのはそんなことではない。

「よくアルシエルが許してくれた（わね）（な）」

「そこか。よりによってそこか。お前らにとってあいつは俺のなんなんだ」

口を揃えてこう言われてしまったのは、真奥としても仏頂面（ぶつどうめん）をせざるを得ない。

「だって、免許取るのってお金かかるんじゃないの？ 教習所行ったりするんでしょ？ お金

あるわけ？ そもそも道交法守るつもりあるの？ 魔土のくせに？」

「時折駅前やスーパーで近くの自動車学校がポケットタイツシユを配っているが、安くても十数万円かかるはずだぞ？ アルシエルがそんな出費を許すとも思えんし、貴様にそんな貯金をする甲斐性があるとも思えん」

「免許取るって言っただけでなんでそこまで議論中傷されにやならんのが、魔王が運転免許取って何が悪い」

「魔王が何かするのに国家の許しを得ようとしてる時点で喧嘩ものの以外の何物でもないわ」  
 悪魔の言葉に鈴乃も大體に頷いて同意する。

「お前らなあ……」

真央はがつくりと肩を落とす。

「それに、誰も車の免許だなんて言ってねえだろ」

「じゃあなんだというんだ」

「特別な資格？ あなたが真面目になるのって基本的にマダロナルド関係以外無さそうだから、食品衛生管理者とか、調理師とか？ どっちにしてもお金はかかりそうだけど……」

「食品衛生管理者は将来的に欲しいとは思ってる」

「思ってるんだ」

「正社員になったら必要になってくるかもしれないからな。でも、そういうんじゃない」

真央は一つ吸払いをみると、仕切り直して胸を張る。

「聞いて驚け。俺が取ろうとしているのは……原付免許だっ!!」

頭上を、箱塚駅を通過する特急電車の走る音がして、

「……じゃ、ベル、千穂ちゃん、私帰るわ」

「ああ、気をつけて帰れ」

胸を張る真真を無視して恵美は颯爽と立ち去ろうとする。

「道佐さん鈴乃さん! 真真さん泣いちゃいますから少しは反応してあげてください!」

「えー……」

千穂の頼みとはいえ、あからさまに嫌そうな顔になる恵美。

「だってさんさん勿体つけて何かと思つたら……原付をバカにするわけじゃないけど、魔王が

胸張って取る資格かって言われると、千穂ちゃんどうなの?」

「えっ……? あ、そ、その」

思いがけず切り返されてうろたえる千穂。

「お、お前らなあ! ただ取るんじゃないぞ! 必要な手数料七七五〇円のうち、五七〇〇円

までは会社が出してくれるんだぞ! 取らない手はないだろ! 二〇五〇円実費だって言っ

ても、芦屋だって文句言わなかったぞ!」

「……」

恵美も鈴乃も、この魔王がどこまで本気で言っているのかと、ここ数か月何度も抱いた疑問

が胸中に去来し、経験から百パーセント本気で言っていることを理解し、得も言われぬ空しさ  
と虚脱感が全身を支配するのを感じる。

「……どうせなら金額出してもらえばいいのに」

「免許証交付料の二〇五〇円だけは社内規定でダメなんだよー 会社が出してくれるのは講習  
にかかる訓練費用だけなんだっ！」

「待て、そもそも会社というのは要するにマドロナルドのことだろう？ なぜ貴様が運転免許  
を取るのにマドロナルドが金を出すんだ？」

「よくぞ聞いてくれた！ 実は我がマドロナルドはたが……」

「今度お店でデリバリー始めるんです。それで二十歳以上の従業員は原付免許が必要になって、  
持っていない人は原付免許に限り会社が資格取得手当でお金出してくれるんです」

真奥に話させていたらいつまでたっても先に進まないと判断した千鶴が、真奥を遮って要点  
をかいつまんで伝えた。

「……」

不完全燃焼気味の真奥だが、鈴乃と恵美はそれぞれ異なった反応を見せた。

「デリバリーとはあれか、出陣のことか」

何かと横文字で物事を表現したがる日本の労働市場を一刀両断に付したのは鈴乃である。

「出陣……まあ、そういうことです。自転車で配達するわけにいかないんで、バイクを使う必

要があつて免許を……私は高校生なんで資格取得手当をもらえないんですけどね」

千穂は口を失らせながらもそう説明する。

「マドロナルドがデリバリーっていうのが驚きだけど、それ以上に、二階のカフェがオープンしたのってつい最近よね？ まだ半月ちよつとなのにもう新しい業態が増えるの？」

それなりに日本社会に親しんでいる惠美は、〇しらしい感想を漏らす。

「まあそれについては、本崎さんもさすがに参つてたけどな」

真裏と千穂のアルバイト先であるマドロナルド轄々谷駅前店の総務店長である本崎真弓は、売り上げの鬼の異名を取るほど仕事一辺倒の女性である。

日商前年比百パーセント越えが常態と公言してはばかりず、実際にそれだけの実績を上げる本崎だが、つい先日新装開店したばかりの新業態、マッダカフェが地域に根付くよりも早く新業態追加が決まつてしまったことには頭を抱えていた。

「都内で大きな行政道路沿いで住宅街にもオフィス街にも近くて、おまけに新しいマッダカフェメニューもデリバリーできる店つてことで急に決まつたらしくてな、業態の展開の早さよりも、人が全然足りないことの方が頭痛のタネだ」

マドロナルドのデリバリー業態自体は、実は決して目新しいものではない。

ビズのデリバリーなどと同じように一定の地域に限り、一度の注文で税込み一五〇〇円以上オーダーすることを条件に電話注文を受け、デリバリーを請け負う。

都心の幹線道路沿いの店舗を中心に以前から少しずつ増えてきているのだが、今回は偶然<sup>たまたま</sup>谷駅前店に白羽の矢が立ったのだ。

問題は肝心の店舗の受け入れ態勢がまるで整っていない点だ。

まず真実が免許取得の勉強をしていることから分かるように、運転免許を持っている従業員が限られているということ。

そして免許以前の問題として、デリバリー業務を導入するには、種々谷駅前店のクルーの人数が絶対的に足りない。

何せ二階のカフェ専門カウンターが増えたことで、店に常駐しなければならない人員が増えている。

その上、デリバリーに運用するバイクは当然複数台必要になる。

電話注文を受けるにしても、そのための人員を新たに雇い入れるか、そうでなければ現有戦力全体に研修を施<sup>おこな</sup>うなりせねばならず、そのためにまた時間と人員が必要になってくる。

配達人員を増やすにも、配達先は必ずしも大きな通り沿いではないので、極力地元の地理に明るい人間が望ましい。

いずれにしても従業員の頭数の確保は急務であり、それが本時の想定するタオリティまで育つ期間を考えると、本格運用が始まる十一月初旬までの二か月という時間は決して余裕があるスケジュールではない。

「常態的に店內業務に入れる人間があと三人……いや、二人いれば！」

とは最近の木崎の口癖である。

最低あと二人、常勤のアルバイトがいれば、その間にデリバリーもできる人間を育てて人を回すことができるというのだが、世間的にはもう秋であり、大学生の夏休みも終わりに近い今頃は、人が減ることはあっても増やすことはなかなか難しい。

「恵美、お前転職しねえ？」

もちろん本気ではないだろうが、真奥の勧誘に恵美は冷たく応じる。

「ちなみに私の今の時給、一七〇〇円なんだけど」

「……すまん、この話は無かったことに」

「せ、せん、ななひや……」

高校生という立場上、研修時給からそう大きく額面が動いていない千穂がその時給に唖然とするが、

「高い時給に見合う分、苦勞も多いわよ？ 自分で言うのもなんだけど、歴戦の勇者の私<sup>が</sup>がそう言うんだから、相当よ」

「……そ、そうですね。テレアポですもんね」

恵美の仕事は、携帯電話会社のお客様電話相談室の受信専門テレアポである。

テレアポと一口に言っても受信と送信の別に始まり業務形態でその仕事内容は様々で、一顧

に苦勞の多い職場とも言えないのだが、惠美の場合は結構色々あるらしい。

今度は鈴乃に振ろうとする真央だが、

「ちなみに私は無理だぞ。本崎店長の期待に応えられるほど、客と横文字の応酬をする自信が無い」

鈴乃は機先を制してそんなことを言う。

横文字とかいう問題じゃない、とは思うが、日常会話の物言いが非常に厭めしい鈴乃が、

「いらっしやいませー！ ご注文がお待ちでしたらこちらへどうぞー！」

と営業スマイルしている姿は、真央も、そして千穂も惠美も想像できなかった。

「何か、三人共失礼なことを考えていないか」

真央達の複雑な表情を敏感に読み取った鈴乃は声を低くするが、三人は強張った笑顔で首を

「齊に横に振った」

「ま、まあとにかく、千穂ちゃんには申し訳ないけど、頑張つてとしか言いようがないわね。

それで話を元に戻すと……」

「そういえばなんの話してたんだったか」

惠美の言葉で全員がはっと我に返る。

気がつくとも、改札前でもう二十分近く話し込んでいることになる。

「私が実家に帰るって話よ」

勇者と魔王が駅前でたむろして世間話をして、話が長引いて話題があつちこち飛んでいるなど、それこそ笑い話である。

「もう会社にお休み申請しちやったし、あとはエメに手引きをお願いするだけなの。週明けには出かけるつもり」

「ええっ？」

千穂は息を呑み、鈴乃も抗議するが、

「急すぎるだろう!? 私に後を頼むとは言うが、こちらにも準備というものが……」

ふと、隣に立つ真奥を見上げて、抗議のために挙げた両手を力なく下ろした。

「必要無いな。特に」

「でしょ？」

「なんだか知らんがバカにされたということだけは理解できたぞ」

どこか虚しさを溜めた表情で頷き合う真奥と鈴乃に、真奥は立場上、厳重に抗議をせねばならぬまい。

「……バカになんかしてないわよ。勤勉で、真面目で、規則正しい生活を送ってるあなたをみんな褒め称えてるわ」

「……そうだと魔王。日の出と共に目覚め、質素倹約を是とし、労働に汗を流し、法を犯さぬために勉学に励む貴様を誰もバカになどするものか」

「寝めるなら目を見ろ！」

「ばばすこい！ いいこ！」

「……………ありがとなあ……………アラス・ラムス」

赤子には、誰も敵わない。

「で、でも遊佐さん、選明けからってことは、その……………」

千穂がおずおずといった様子で尋ねると、恵美は何かに思い当たったように頷いてから苦笑した。

「大丈夫よ、向こうにも都合があるし、私も会社があるから週末にはこっちに戻ってる予定よ。十二日のこと、忘れてないから」

「……………あ、ありがとうございます」

「十二日……………ああ、あれか」

真美と鈴乃も、思い当たることがあって頷いた。

「言っておくけどベルはともかく、あなたは余計なこと考えなくていいからね」

恵美は真美を割と本気で睨みつけるが、真美は裏知らぬ顔。

「なんだつまんねえ。大元締、徹草とか作ってやろうかと思ってたのに」

千穂と恵美の言う九月の十二日は日曜日である。

この日、千穂の強い希望で、恵美と千穂の合同誕生パーティーなるものが企画されていた。

エンテ・イスラの暦と地球の暦は異なる。だが恵美の誕生日は初秋だというので、当初千穂の誕生日である十日にしようという案があったが、残念なことにその日は金曜日で平日。

しかも千穂が参加を希望する真奥がぼっち深夜までシフトに入っているので、合議の末、二日後の日曜日にパーティを行うことになったのだ。

人の輪が広まれば、なかなか当日ジャスト、というのは難しいのだ。

「その場で粉々に切り刻んで良いのであれば受け取ってあげなくもないわ。大体今度の星爆りだって、あなたが運路に言ったことが変に向こうに影響してないかどうか確かめる意味もあるんですからね」

恵美はそう言って、真奥に渋い顔を見せる。

何せ魔王サタンと悪魔大元帥が生きていて、おまけにそのサタンが勇者エミリアと訂教審議員タレスティア・ベル、そして異世界の少女を新たな悪魔大元帥に指名したという情報を持ち帰られてしまっているのである。

千穂を守るためにやむを得ないこととはいえ、恵美にとっても鈴乃にとっても、それが事実と知ればエンテ・イスラ全土から後ろ指を指される事態になっても文句は言えない。

「大丈夫だって、多分」

「全っ然信用できないっ！」

どこまでも楽観的な真奥に呆れながら、恵美はふと腕時計を見る。

「いけない、本当に増えないと。アラス・ラムスが寝る時間」

「こんなに早く寝かしてんのか？」

「千穂ちゃん、の修行的のとき以来、もうお風呂に入りたいてって聞かないの。それも熱いの。爆っ  
てからお湯張ってアラス・ラムスが満足するまでお風呂入ってたらあっという間に十時よ」

「アラス・ラムスは江戸っ子の素質があるな」

なぜか鈴乃が嬉しそうに言い、

「セフィラから江戸っ子が生まれてたまるか」

真実が苦々しく突っ込み、

「じゃああのイルオーン君はきつと道彦子ですね」

千穂がどうしてもいい話を無暗に引き延ばす。

「……じゃあ、本当にそろそろ増えるわね。また十二日に」

「あ、あの道佐さん」

シヨルダーバッグから定期入れを取り出そうとする恵美を千穂が呼び止める。

「お見送り行ってもいいですか？　なんだか心配で……エメラダさんがいらっしやるなら久しぶりにご挨拶もしたいですし……」

「ごめんね。エメとの約束が過明け月曜のお昼なの。千穂ちゃん、学校でしょ？」

「あう……」

時折忘れそうになるが、千穂自身は異文化コミュニケーションが過剰なだけの、江戸っ子ではないが東京っ子で現代っ子な純国産女子高生だ。

夏休みが終わってしまっただけ、千穂は学生の本分を果たさねばならないのだ。

落ち込んでしまった千穂を慰めるように恵美が肩を撫でると、アラス・ラムスも必死に手を伸ばして千穂のおでこをでしてしと撫でる。

「心配しないで。これでも人類最強の勇者よ。魔王軍を壊滅させて、大天使を追い払った実績を信じて頂戴。アラス・ラムスが一緒なんだから危ないところに行ったり戦ったりする予定は無いし、実家の片付けしに行くようなものだから、すぐ帰ってくるわ」

「そうだお前！ アラス・ラムスにもしものことがあったらマズいから、余計なこと考えねえでエメラダとかに顔だけ見せて飯食ったら帰ってこい！」

恵美とアラス・ラムスが不可分の状態であることを今更思ひ出したらしい真央が、急に顔を上げて詰め寄ってくる。

恵美は思い切り顔を撃つて、その勢いを跳ね返した。

「大元の原因があなたにあるのに、そんなこと言われる筋合いないわ！ あなたこそ私がいないからって僕に羽根伸ばそうとしないでよ！ 色々な意味で！ ベルにきちんと見張っててもらいますからね？」

「はっ！ 羽根なんざ伸ばさなくても、俺は原付免許で更に広大な世界を手に入れるんだ。も

う誰にも止められないぞ！ 帰ってきてもうはえ面かくなよ！」

「印紙を買うの忘れて運転免許センターで止められればいいんだわ！」

「印紙はセンターでも売ってるんだよ！ 世間知らずめ！」

「ああ！ いいからもうエミリアは帰れ！ 魔王も千穂殿の帰りが遅くなるだろう！ いい加減にしないと、勇者と魔王の激闘は運転免許センターの印紙売場についての舌戦だったと後世に聖典として残すぞ！」

ひたすらくだらない方向に言い争いがシフトしてゆく真奥と恵美の間に、鈴乃が強引に割り込んで情けない言い合いをやめさせる。

先ほど時計を確認してからさらに十五分が経過しており、女子高生を連れまわす意味でも赤ん坊が起きている意味でも色々よろしくなくなってきた。

「千穂殿、安心しろ。偉そうに言うことではないが私は暇人だ。エメラダ殿と一度面通ししておきたいし、見送りは私が立ち会おう。魔王も、それでいいな？」

そうこうしているうちに、駅の構内に次の電車を告げるアナウンスが流れる。

「それじゃ千穂ちゃん、来週ね。ベルにはまた後でメールするわ」

顔を上げた恵美はそうあわただしく言うと、今度はこそ改札を通過して駅構内へと入ってゆく。

「ばいばい！ ばば、ちーねーちゃ、すずねーちゃ、ばいばい！」

アラス・ラムスが恵美の肩越しに身を乗り出して、力いっぱい手を振るのを見送った真奥と



千穂と鈴乃の三人は、なんだか毒気を抜かれたようになる。

「や、でも印紙は本当にセンチターに売ってるんだぞ？」

「知るか……。さあ、とにかく千穂殿をお送りするぞ。千穂殿、時間は大丈夫か？」

「あ、は、はい。全然大丈夫ですけど……でも……」

「ん？」

千穂は頭上で、恵美とアラス・ラムスが乗ったと思しき電車が発車する音を見上げながら、ふと眩くらいた。

「蓮佐さん、最近ちょっと明るくなりましたよね」

「……なんで俺に視線を移しながら言うんだ？」

真奥は千穂の視線が電車の音から自分に移ったのを敏感に察知して思わず鼻白むが、

「分かりません？」

「分かんらん」

「……さあさあ、話すなら歩きながらだ」

鈴乃はため息をつきながら二人の背を押す。

「でも、絶対蓮佐さん明るくなりましたよ。元気いっぱいって言うか……」

「あいつは元々馴ながしいだろうに」

「もう真奥さん！　そういうんじゃないくて、もっと、なんて言ったらいいのかなあ」

「本人も言っていたが……」

鈴乃は管線駅を振り返りながら言う。

「やはり、かかる事態に対して受け身ではなく、自分から向かっていくだけで気持ちが変わるんだらう」

「まあ、最近うじうじ迷ってたときみてよな感じでないってのは分かるが……」

それでもここ数日の恵美は、日本で初めて出会った頃の、ある種空気を読まない前向きさが戻ってきていたようにも思う。

「でも、絶対それだけじゃないですよ」

「ん？」

「どういうことだ？　ちーちゃん」

「もう……二人共本当に分からないんですか？　真奥さんと鈴乃さんが、ある意味一番関係してるのに」

千穂は心底意外そうに真奥と鈴乃の顔を交互に見る。

だが真奥と鈴乃こそ意外そうに顔を見合わせるしかない。

何せ真奥と鈴乃は、同じアパートに住んでいるということ以外に共通点は無い。

まして恵美に関わるとなると、日本に住んでいること以外共通点は無さそうだが……。

「私自身はまだそこまでじゃないから、悔しいんで教えてあげないです！」

「な、なんなんだ？」

「さあ………」

ある意味千穂にケチをつけられた格好になった二人は、眉根を寄せつつも何やら楽しげな千穂の背をたたく隙めるしかない。

「千穂殿、随分だ。どういうことなんだ？」

千穂の家が見えてくる頃になって、鈴乃は言葉通り両手を上げて千穂に言う。

千穂は顔だけ振り返ると、ちよつとだけ口を失らせて白状した。

「遊佐さん本人が、そこまで白覚してるかどうかは分かりませんがどね」

と前置きして、千穂は体ごと二人に向き直る。

「魔王を退治してきた勇者」が、早帰りしちゃうんですよ？ 鈴乃さんと真奥さんを、心から信用してるってことじゃないですか」

「――」

真奥と鈴乃は揃って息を呑む。

「真奥さん達は遊佐さんが目を離したからって絶対に日本で悪いことはしないし、万が一のことがあっても鈴乃さんならなんとかしてくれるって、遊佐さん信じてるから実家に帰るなんて言い出したんだと思いますよ？ まあ……信用の方向性は違うかもですけど……」

呆氣にとられる二人。

「それじゃあ、ここで、送ってくださいって、ありがとうございましたー 鈴乃さん、蓮佐さんのお見送り、よろしくお願ひしますね！」

千穂は少し微笑ほほえみんで手を振りながら身を翻ひるがえすと、家の中へと入って行ってしまった。

真奥と鈴乃はしばしその場に立ち居ゐくしながら、一度だけ目を合わせると大変きまり悪そうに肩を練ねめてそっぽを向く。

「魔王として、誠に遺憾いひがたである」

「……そういうことにしておいてやろう……爆るぞ。なんだかんだと無駄話むだわをして遅くなった。アルシエルがやかしい」

その後、夜の住宅街を無言で帰宅した真奥と鈴乃は、アパートの共用廊下で無言で別れた。

「お帰りなさいませ魔王様！ いやあ、しばらくエミリアがいなくなるかと思うとせいせいしますねー。ここは一つばーつとあの焼肉屋でも行きましようか！」

帰ったら帰ったでやたらハイテンションの音屋おんやが珍しく外食をしようなどと言いつた始末。勇者の不在の最中に悪魔大元帥あくまのだいげんすいがバースとやりたいたいが焼肉しか思いつかないあたり、色々、もうすでに取り返しのつかないところまで来てしまっているのだろう。

「魔王様？」

「あ、真奥、帰りにコンビニでプリン買ってきてってきつきメールしたんだけど見た？」

「……いや、気づかなかったな」

ポケットから携帯を出す、確かに十数分前にメールが着信していた。

「えー！ 珍しく声屋がOKしてくれたのに！」

口を尖らせて抗議する漆原。

「つたくよお」

「魔王様？」

「真奥？ どうしたの？」

玄關で立ち尽くす主を見て、声屋と漆原は首を傾げるが、やがて顔を上げた真奥は珍しく、怒りの形相を湛えている。

「勇者のいぬ間に焼肉だプリンだと、そんなんだからお前ら恵美なんかに信用されんだぞこらああ!!! 少しは悪魔大元帥としての自覚と誇りを持てええええ!!」

隣室から、真奥の怒号と混乱する声屋と漆原の叫びが飛び出してきて、鈴乃はしばし耳を塞いで仏頂面で真奥の錯乱が引き起こした嵐をやり過ごす。

「魔王だって偉そうに何かを言える立場でもないだろうに……」

廊下の焼肉とプリンを糾弾するには隣の魔王は少々日本の俗世に毒されすぎている。

そしてそんなあまりに人間臭いやりとりをうんざりしながら聞きつつ、鈴乃はふと、数日前

の恵美との問答を思い出した。

「天使は人間だった。ならば……」

隣で勇者と女子高生に信用されて驚れ気味の、これから道路交通法に準じて運転免許を取得しようとしている魔王とは、悪魔とは一体何者なのだろうか。

真奥然り高屋然り、悪魔達は天使以上に外見がまさしく人間離れしている。

聖法氣により翼を生み出す天使とは違い、角や尾や翼など人間に無い器官や、常軌を逸した巨体を持っていたり、かつて鏡子に現れた悪魔大司書カミーオのように、人型をしているだけの鳥、なんて奴もいる。

だが魔王サタン、悪魔大元帥アルシエル、そしてマレブランケ頭領格ファーフアレロは、完全に人間と変わらぬ姿かたちを鈴乃達の目の前に見せている。

「その姿の持つ意味を……探すことはできないだろうか」

ふとそこまで考えて携帯電話を手を取った鈴乃は、首を横に振って手を離した。

恵美を信じないわけではないが、やはり今のエンテ・イスラの情勢は彼女一人で何かを探索するには不透明すぎる。

手を広げすぎればそれだけ隙も生まれやすくなり、何かどう影響して日本や千穂に累が及ぶかも分からない。

恵美自身が、母の痕跡を探す、と言っているのだ。

ならば今回はそれに専念させるべきだろう。

事は、世界全体を巻き込みざるを得ない試みだ。焦ったところで仕方がない。取り急ぎ問題なのは……。

「あああやかましいー！ 近所迷惑だー！ いい加減落ち着けっ！」

聞くに堪えない隣家の騒動を鎮めなければならぬことだろう。

荒れ気味の真奥とおろおろする芦屋と漆原を、怒号と説教でなだめる鈴乃。おかしい。確かに恵美に後事を託され魔王城を見張ることは承知したが、

「くだらん勤務をしていないで、勉強を終わらさつと寝ろ！ 明日も仕事なんだろうが！」  
子供の喧嘩を仲裁する母親のような真似は、勘定に含まれていないはずだ。恵美が帰ってくるまでの数日間が今から思いやられる。

三人を静かにさせて自分の部屋に戻った鈴乃は後ろ手に玄関のドアを閉めると、深く大きなため息をついた。

「だが……それでもこれも、平和の形の一つであることは間違いないんだ……」  
間違っているけど、悪くない。

それが今の自分達を取り巻く状況を、もっとも端的に表す一言だろう。

満明けの月曜日。

千穂は友人からの誘いを断って、昼食もそこそこに、警校生徒も教員もほとんど寄りつかない旧校舎の通称間かずの間の近くで、息をひそめるように自分の手の中にあるものを凝視していた。

それは小さな紫色の石、イエソドの欠片があしらわれた簡素な指輪。

品行方正な高校生である千穂は、ここまで露骨なアタセサリを校内で堂用することはできないのだ。

具体的に説明されたことはないが、「ゲート」が特別な技術で、超長距離を移動する手段であることは分かる。

恵美はもちろん、鈴乃もエメラダもアルバートも、漆原も芦屋も真奥も皆、そのゲートとやらから現れたのだろう。

そして千穂には、恵美とアラス・ラムスがゲートを通るときイエソドの欠片に反応があるのではないかという予感があった。

人の気配を警戒しながらじつと眺めていると、

「……あつ」

突如矢片が淡い光を帯び、カメラのフラッシュのように一瞬だけ強く輝き、そしてまたただの空石に戻った。

法術修行をしたのだからその瞬間何か強い力を感じるかと思つたが、これと言つて自分の体に特別な事象は起こらなかった。

ただ、傍らに置いていた携帯電話がメールを受信する。

「エミリアは、無事エメラダ殿と共に旅立った」

見送りに行った路乃からの、簡潔な報告メールだった。

恵美が、大切な友人が、今、日本どこかこの地球上のどこにもいない。

その事実はグートによる転移を見ていない千穂にとって、とても不思議な感覚だった。

なぜか突然、運使恵美・エミリア・ユステイナという人間の存在が、漠然としたものになつてしまったような、胸が締めつけられるような感覚だった。

でも、恵美も危ないことはしないと云っているし、エメラダだって一緒なのだという。

自分に心配されなくても、恵美なら危ない目に遭つてもさつと簡単にはねのけるだろう。

千穂は、携帯電話を握りしめると折るように目を閉じ、恵美の携帯電話の番号を思い浮かべる。

淡く、千穂の手と指輪、そして携帯電話が輝いた。

「遊佐さんの帰るエンテ・イスラが、少しでも平和でありますように」  
ゲートを、時空を、世界を超えてこの声は届くのだろうか。未熟な法術士である千穂に、それを知る術はなかった。  
そして。

二週間が過ぎ、九月十二日を過ぎても、惠美は戻らなかった。

魔王の羽衣



京王線調布駅は、各駅停車から特急までの全営業列車が停車する京王電鉄の基幹駅である。新宿からの下り列車は、大別して高尾・八王子方面と神奈川の相模原市にある橋本方面に分けられるがその分岐点となるのが調布駅だ。

駅前に大きなバスターミナルがあり、行き来する路線バスは、京王とＪＲや小田急の駅を繋ぐ地域の足として稼働している。

まだまだ半袖で十分な気候ながら、午後からは大気の状態が不安定になり、降水確率が六十パーセントと予報されている平日の朝。

真奥は調布駅の北口に降り立っていた。

「えっと……確か乗り場はもうちょい向こうか」

つい先日もここに降り立った記憶を頼りにバス乗り場を探すと、

既に列ができているターミナル内の乗り場を見つけ、真奥は列の最後尾に並んだ。

バス停の柱には「京王バス、ＪＲ武蔵小金井駅行・試験場正門経由」と表示されていた。

バスが来るまで少しでも復習をするために、トートバッグの中に入っている試験対策本を取り出そうとして、

「まー！」

「！！」

背後から聞こえてきた声に、思わず振り向いた。

そこには、駅前地図を眺める母親の気を引こうと、小さな体を精いっぱい伸ばして手を引っ張る幼い女の子がいた。

「……」

真奥の目は、全く見知らぬその母子にしばらく釘付けだった。

やがて母親は目的の場所を見つけ出したのか、何度も指差し確認をしながら、

「はいはい、ごめんね、大丈夫？ 暑くない？」

などと言いながら幼い我が子を抱き上げ、すぐに真奥の視界から見えなくなってしまった。

日中も多くの人通りがある調布駅前の雑踏に消えた母子の幻影を負いながら、真奥はため息をついてトートバッグの中の手を離した。

靴の中にある、原付免許取得必勝問題集は、今更見るまでもなく隅々まで暗記していた。

「二回目、かあ」

真奥は肩を凝めて一人ごちる。

真奥の目的地は、府中運転免許試験場だった。

東京都内に住居がある者は、府中、鮫洲、江東のいずれかの運転免許試験場で運転免許取得のための試験を受けることになる。

そして真奥が府中運転免許試験場を訪れるのは、今月これが二回目だった。

「……恵美の叔……」

真奥が悲憤をつくも、それを聞きつけたかのようにちやうどバスがやってきた。

真奥が並んだ行列は、通勤客の他は真奥と同じ目的地に向かう人々ばかりらしく、整然とバスに乗り込み、離然と車内に散らばる。

真奥は運良く乗車口に近い一人席に座ることができた。

今度こそ失敗は許されないので、真奥は教本を取り出して復習を始める。

そう。真奥は一度、原付免許取得試験に失敗してしまったのだ。

試験のためにバイトのシフトを空けて、三〇〇円で住民票を発行し、七〇〇円のスピード写真でマダロナルドにアルバイト応募して以来となる顔写真を撮り、片道電車賃一七〇円、バス運賃二二〇円を使いやってきたというのに、ペーパーテストでまさかの不合格を食らってしまったのだ。

試験結果を表示する電光掲示板に自分の番号が表示されなかったときは、それこそ最初に西大陸でルシフェルの軍が勇者一行に敗れた報せを受けたときと同じような気持ち、いや、それ以上にショックだったかもしれない。

自分の回答は完璧だったはずだ。法律の条文すら暗（く）んじることのできる程までに勉強してきたはずなのに、不合格とはどういうことだろう。

真奥は空転する頭で必死に考えて、

「あ」

と、過去の人生で最も開拓けな声上げた。

才能と努力と魔性で裏打ちされた真奥の記憶力は、冷厳な事実を回想させた。

「答えを書く欄、一個ズレてた……？」

学科試験は正誤選択の単純なもので、設問の横にマークシート方式で回答を記入していく形だった。

正誤の二択だから、単純に解答欄がズレたからといって全ての設問が不正解になるとは限らないのだが、学科試験に於いて、合格点は五〇点満点中四十五点。

ズレた先で正解になっている箇所があったとしても、それで正答率九割に届くはずがない。

こうして真奥は、初めての運転免許取得試験で痛恨の不合格をいただいでしまった。

マダロナルドが出してくれる資格取得手当は、免許証と共に申請すれば給料と一緒に支払われるが、当然というかなんというか、それは一回分しか支払われない。

本来会社が持つてくれるはずだった訓練費名目の五七〇〇円を、つまらないミスで実費で支払わなければならなくなったと告げたときの真奥の悲しさな顔は、彼が人間の反転攻勢に屈して東大陸の支配を手放すことを断腸の思いで決めたときを思い起こさせた。

「……全部真奥のバカが悪いんだ」

アイドリンドグストップのバスが、その瞬間怒りを上げる。

「はい発車いたします……」

バス運転手の穏やかな声と共に、ゆっくりバスが走り出す瞬間、真奥は小さく呟いた。  
 「どこまでも……俺達の邪魔しかしねえんだからよ……」

集中できない。

この半月は、その一言で表現できる。

真奥ばかりではなく、声屋も千穂も鈴乃も、皆そうだ。漆原はよく分らない。

恵美がエンテ・イストラへと帰還したのは、二週間前の月曜日だった。

その日は真奥は仕事で千穂は学校。

声屋と漆原は別段見送りに行く理由も無いので鈴乃が見送りに行ったと言うが、昼過ぎごろに問題なく戻立った、というメールが来ていた。

行き先が地球のどこでもない上に、恵美側には真奥や声屋や漆原に近況報告をする理由も義務も無い。

千穂や鈴乃がなんらかのやりとりをしているだろうと思ひ込んで特に確認もしなかった真奥、恵美に言われるまでもなく翌週に予定した運転免許試験に備えて勉強に精を出し、特に周囲に注意を払ってこなかった。

平和だったのだ。

ライバル店センタッキーフライドチキンの店長、嶺江三月こと大天使サリエルも、最近何かと動転だ。

真奥達の勤めるマダロナルド轄々谷駅商店の店長木崎に芯から惚れ込んでいることもあり、つい最近千穂の法術修行に絡んで木崎との距離が一步縮まった（とサリエルが一人で勝手に思い込んでいる）ため、真奥や千穂にもやたらと愛想が良い。

おまけにいつも口うるさい恵美が周りにいないと思えば、真奥も伸び伸びと仕事と勉強に精が出せたのだ。

開放感と出費に厳しいお屋敷を浸食し、毎日夕食にアラカルトが一品付け足されるサービスぶり、それに乗じてまたぞろ通販に手を出そうとする漆原に文句をつけなかったほどだ。千穂は恵美の様子を心配していたが、何せ相手が世界最強の人間、勇者エミリアである。何事も無かったように帰ってくるのが目に見えているので何か考えるだけ損だと思っていた真奥は、その心配に取り合わなかった。

変化は、その週の土曜日に起きた。

# ※

「魔王、エミリアは帰ってきたか？」

真奥が出動するより前の時間、鈴乃が訪ねてきたと同時にそんなことを言い出したのだ。

「あ？ いきなりなんだ？」

「いや、エミリアは帰ってきたかと……」

鈴乃は同じことを繰り返して、そのまま黙ってしまう。

「知らんが、帰ってきてねえのか？」

真奥にしてみればそんなことを尋ねられても困る。

恵美には実家から帰ったからといって真奥に連絡する理由はない。

それこそ鈴乃や千穂が知らないなら、真奥達が知っているはずがないのだ。

そう説明してやると、

「あ、ああそうか。それもそうだな。すまない。邪魔をした」

少し困ったような顔をして、鈴乃は引き下がった。

「……？」

真奥と高屋が困惑したように顔を見合わせ、漆原がパソコンデスクに突っ伏して寝息を立てている中、廊下に出た鈴乃は、しばらくそこで何かをしているようだったが、やがて意を決したような口調で、

「……千穂殿か、朝早くにすまない」

千穂に電話する声が聞こえてきた。

途切れ途切れに聞こえてくる電話の会話を背に、真奥はふと冷蔵庫に張りつけてあるシフト表兼カレンダーを見る。

今日は九月十一日の土曜日。

真奥の記憶に間違いが無ければ恵美は昨日には帰ってきているはずで、明日の十二日の箇所には千穂の可愛らしい字で、

「道佐さんお誕生日おめでとう！」

と書かれていた。

いつの間にか外から鈴乃の声は聞こえなくなっていたが、それに気づいたのとはば同時に、真奥の携帯電話が部屋の間で鳴り出す。

それは、千穂からの電話だった。

その声は、今にも泣き出しそうだった。

翌日も、恵美からの連絡は何も無かった。

昨日は恵美のことを心配する千穂をなだめた真奥も、さすがにおかしいと思いはじめていた。恵美の性格からして、真奥をないがしろにすることはあっても、千穂に心配をかけるようなことをするとは思えないからだ。

それに、今日は千穂との約束の十二日だ。

真奥の参加にいい顔はしなかったものの、千穂と誕生日を祝い合うことに悪い気はしていな

かった惠美が、千穂との約束を詫びの一言も無しに破るはずがない。

今日も昼間から惠美の安否を魔王城に確認してきた鈴乃に、

「エメラダあたりに、連絡つけられぬのか」

真央は尋ねるが、鈴乃は部屋には上がらずに玄関に立ったまま声を響めて言った。

「そのエメラダ殿にも連絡がつかないから、私も焦っているんだ」

惠美を見送ったその日、ダートが開かれた惠美のマンションの屋上で、鈴乃は惠美の旅の仲間である、エンテ・イスラ最後の法術士、エメラダ・エトウ・ヴァと携帯電話の番号とアドレスを交換し合っていた。

本来なら直接交流するはずのない、セント・アイレ宮廷法術士と大法神教会の司教審議官が、異世界の日本で携帯電話の番号を交換することになったのには不思議な笑いがどちらからともなく起こったものだ。

その後、惠美がエンテ・イスラに無事渡ったという連絡が携帯電話を介した概念送受で鈴乃の許に来ていたので、余計に今、惠美にもエメラダにも連絡がつかないのが分らない。

エンテ・イスラの情勢は、人間と悪魔が二つに分かれて争っていたころよりずっと複雑に様々な勢力が入り乱れている。

それが惠美のもたらした平和の結果なのだとすれば皮肉としか言いようがないが、とにかく、人間の世界が、五つある大陸のうち東大陸と、それ以外の大陸に分かれて戦争状態に突

入している。

その東大陸には、魔王軍の復活を目論むマレブランクの一党がもぐり込んでいて、それを手引きしているのは、勇者の仲間としてかつて悪魔達と戦っていたはずのオルバ・メイヤーなのである。

それだけでも十分複雑なのに、そのマレブランクが天使達が血眼になって探している世界組成の宝珠セフィラの化身を使役していて、天使の暗躍している影が見え隠れしているのだ。

その事実を知る者は決して多くはないが、これからどんな思惑が働くにしろ、エンテ・イスラの人間同士が単純に戦争を決着させれば解決する問題でなくなっているのは確実である。

「私自身、あまり複雑にエンテ・イスラに連絡をしていると、概念迷受の念波を教会に察知されてしまう恐れがある。だから迂闊なことを送れないんだ」

鈴乃が負っている大法神教会の密命は、表面上解かれていないし何も解決はしていない。

日本での生活で、鈴乃は教会正義をあるべき形に訂正するために独断行動を始め、結果的に現在の教会執行部の命に背いている形になっている。

かつて鈴乃が負った密命は、勇者エミリア死亡の虚報をまき散らし、魔王生存すら放置したオルバの背叛行為を隠すこと。

それが不可能な場合、惠美も真実も滅ぼして「オルバの嘘を真実にする」ことだった。

惠美のエンテ・イスラでの魔王討伐の跡が足かけ二年であることを考えれば、異世界出張中

の鈴乃が三か月間で任務を達成できるとは教会執行部も思つてはいまい。

それでも怪しまれないからと言つて、教会執行部の意に反する行動をしていると知られていいことはない。

ただでさえ東大陸に果食う悪魔に、「クレスティア・ペル、新悪魔大元帥に就任」などというトンデモ情報を持ち帰られてしまつているのである。

オルバは教会から離れて活動しているようだし、教会がすぐに悪魔が持つ情報を手手することはあり得ないだろうが、それでも今の鈴乃の立場は、恵美よりずっと微妙になっているのだ。「最悪、かつての私のような連中が、日本に送り込まれてくる可能性すらある。教会に都合の悪い事実を全て抹消するためには、日本に害を為すことをためらわないような連中が」

「まー、エミリアが生きてること自体、教会には都合が悪いって、こっち来る前のオルバもさーんざん言つてたしねー」

遠原は少し首を思い出して言う。

「ペル、話を聞いていると、貴様は日本に来た当初から、その問題を棚上げにしたまま今まで来たというように聞こえるが？」

燕屋の声色は、少し厳しい。

「そうだな。サリエル様のことについては悉す言葉も無いが……はつきり言うが、そうなつてしまったことについては貴様らにも大いに責任がある」

だが鈴乃は、驚びれる様子もなく戸屋を見送した。

「何っ？」

「……というより、貴様らのせいだ」

「聞き捨てならねえな」

鈴乃の傲慢な物言いに真奥も少し気色ばむが、鈴乃は軽く肩を揺れただけだ。

「そもそも私の理想は、勇者エミリアが異世界に逃げた魔王を討伐して殲滅し、エンテ・イスラに真の平和をもたらし、エミリアの名誉を貶めた教会正義が真に人々の信仰の拠り所となるよう訂正することだからな。その勇者エミリアが」

つまらなそうに鼻を鳴らして、鈴乃は真奥を見下ろす。

「魔王が悪さをしないと信用して一向に討伐してくれないどころか実家に帰ってしまふんだ。それでは何時まで経っても私の状況は動かんさ」

「……っ」

真奥は決まり思そうに舌打ちをし、戸屋は肩を揺めて啜る。

が、反論できない。

「私が今ここで貴様らを叩き潰していいと言うなら、話は多少変わるが？」

鈴乃は悔しげに歯噛みする真奥を半眼で睨む。

「まあ、今は戯言を言っている場合ではない。問題はエミリアだが……現状、こちらからでは

どうにも手の打ちようがない。それにエミリアが帰ってこれられない、ということとは、エミリア自身より、エメラダ殿の方に何かがあったと考えた方がいいかもしれん」

「エメラダに？」

「ああ。エミリア自身はゲート術を使えないし、エメラダ殿自身もそうらしい。全ては彼らの持っていた『天使の羽ペン』によるところが大きい」

その道具の名を聞いた瞬間、なぜか真奥が顔を曇めたのだが、それに気づいた者はいなかった。『羽ペン』はエメラダ殿が管理していたというから、もしかしたらエメラダ殿の身に何か起こって、エミリアがそれをなんとかしようとしている……のではないかと思っている」

やや口ごもったのは、鈴乃自身それが単なる当て推量であると分かっているからだ。

「じゃあ、なんで恵美はそのことをお前やちーちゃんに言っていないんだ」

そしてその当て推量は、真奥の当然の疑問によって否定されてしまう。

「恵美は今までも概念承受でエメラダと交信してたんだよな。それなら向こうからこっちに連絡することなんてワケねえのに……なぜ連絡してこない？」

「……それが分かればこんなに焦ったりしない」

鈴乃の声に、苛立ちが混じる。

「だが、エミリア自身に何かトラブルが起こったとして、一体どんなことが起こったというんだ？ エミリアにはすまないが、私にはエミリアがどんなトラブルに巻き込まれれば窮地に

降るのか想像がつかん。勇者だぞ？ 魔王軍や大天使すら軽々と退けるようなエミリアが、音信不通になるトラブルなど、世界が崩壊するくらいしか想像がつかん」

確かに、東美はそもそも地球人類やエンチ・イスラ人でも比肩し得る者のない頑健な肉体の持ち主だ。

それは多分に聖法気や天使の血に拠るところが大きいが、いずれにせよ道端で交通事故に遭つたくらいでは傷一つ負いはしないだろう。

それこそ教会騎士団程度の敵なら、例え相手が複数だろうが闘討ちしてこようが、両手両足を縛られ腕脛を噛まされたって、法術だけで指一本動かさずに打ち倒せるだろう。

「なあ、一つ聞くが、人間にとってグート術ってそんなに難しいのか？」

「何？」

真実の突然の質問に、鈴乃は眉を上げる。

「いや、俺も芦屋も漆原も、今はこんなたが、グート術は自分の身一つで使えたからよ。オレバだって使えたらしいし、お前や東美が使えないってのがどうにも分らないんだが」

「自分が優秀だ、とでも言いたげだな」

鈴乃は面白くなるそうに言ってから、瞑目する。

「厳密に言えば、私も使えないわけではない。エミリアだって、正式な訓練を積み使えるようになるだろう。だが、ともかくグート術は莫大な量の聖法気を消費して、なおかつ複雑な術

式を必要とする。私自身、術式を会得<sup>くわとく</sup>していても、相応の増幅器が無ければダートを開くことはできても、中を通ったり行き先を指定することはできません」

「なるほど、聖法<sup>せいぽう</sup>気の量か……」

「だから、増幅器も無しに身一つでダート術を使えるオルバ様は、エミリアとは違う意味で化け物じみているんだ。大法輪<sup>だいふくわん</sup>教会現執行部の六人の大神官<sup>だいじんくわん</sup>の中でも、オルバ様に比肩<sup>ひけん</sup>し得るのは比較的小若いセルバンテス様くらいだろう。それすら、ご自身が術式を研究なされているかと言え、私には分かん。普通に生活する分には必要無い術だからな」

「そりやそうか……」

「外交・宣教師にはダート術を修めている者が私を含め何人かいるが、増幅器無しで使える者にはオルバ様以外に心当たりがない。その増幅器も、本山のサント・イグノレッツドや西大陸に複数ある司教座に設置された『天の階<sup>あまのきざし</sup>』という巨大な建築だ。使うにはまずそこまで移動するという手間をかける必要がある」

「へえ」

「もちろんオルバ様とて、ダート術を使える、といっても、ご自分の力だけでダートを完全固定し行先を完璧に指定できるかどうかは疑問だ。がな。本当にオルバ様がエミリアを抹殺<sup>もくころ</sup>しようと思っていたなら、こんなに豊かな国のある人間の世界になど飛ばさないだろうし」

確かにそれは理屈である。

「それに、ゲートを開くことと、そのゲートを安定させて通過するのはまた別の話だ」  
鈴乃は続ける。

「単純にゲートを開くだけなら、私もなんとか補助なしで行けるかもしれない。だがそこまでは。中を通る人間の安全は保障できんし、開けたゲートを自分で通るなら、『開通状態を安定させたまま』通らなければならない。体感時間でどれほどかかるかも分からないのに、途中で力を失えばゲートが安定性を失い、どこに放り出されるかも分からん」

「おお……」

真奥と言屋は思わず顔を見合わせて頷く。

二人はまさに、その制御を失った結果、この日本に流れ着いたのだから、鈴乃の説には納得せざるを得なかった。

「それならさ、真奥が魔王に戻って使えば、たとえばエンテ・イストラに行けるんじゃない？」  
唐突にそんなことを言い出したのは漆原だった。

「だって、聖法氣をオーバーロードさせれば魔力に変換されることは一度実験して成功したんだろ？ 真奥が魔力を取り戻せば、ゲートだって使いたい放題じゃない？」

「ふむ、ルシフェルにしては建設的な意見だな」

言屋が感心したように言うが、鈴乃は沈い顔のままだ。

「多分、無理だな」

「ああ、俺もそう思う」

真奥も一緒になって否定する。

「この前は、恵美も一緒だった。鈴乃一人分の聖法氣を全力で洗ぎ込まれても、多分俺の氣分が悪くなるだけで、魔力は戻ってこない」

「悔しいが、魔王の言う通りだ。私一人の聖法氣では、エミリアの半分に達するかどうかだ。」

そもそも受容量が根本から違うんだ。下手に私一人分を注ぎ込んで魔王の悪魔たる部分が聖法氣中毒など起こして倒れたら、貴様ら来月から路頭に迷うことになると思うが」

「う」

「ダメかあ……いい案だと思っただけだなあ」

声屋は淡い顔で息を呑み、漆原は唸って座椅子にもたれかかる。

「……つてちよつと待て。何かいつの間にか恵美がやばいことになってるのが決まって、俺が助けに行かなきゃいけないみたいなの流れになってないか？」

真奥は手を振って場を仕切り直そうとする。

「お前ら忘れてるんだろうけど、俺は悪魔で魔王で恵美の敵だぞ？ エンテ・イスラの人間が戦争しようが何しようが俺達にはなんの関係もないし、戦争で潰し合うってんならそれこそこっちは好都合だ。それに、エンテ・イスラに帰ったのも、向こうで何かトラブルに巻き込まれたとしても、それは恵美の自己責任だろう。あとは恵美とお前らの問題だ。俺達には関係な

い。まあ、ちーちゃんは気の毒だがな」

真奥は冷蔵庫に張りつけられているシフト表を見て、そこに嬉々として合同誕生パーティーの予定を書き込んでいた千穂の背中を思い出す。

「それに恵美には魔王軍が束になったって敵わなかったわけだし、それこそエンターイスラに帰れば体内の聖法気蓄積量だって上がる。こっちにいるときより何倍も強くなるんだ。身の心配するだけ、無意味だろう」

真奥は普段に無い妙な卑口でそう言い放つと、鈴乃を見る。

「お前がなんの手の打ちようもないってんなら、それは俺達だって一緒だ。そして俺達は、お前と違って恵美の安全について配慮する必要は無い。あいつは、自分の意志で帰ったんだ」

「魔王……だが……」

「話は終わりだ。恵美が来なきゃ今日のパーティーだって中止だろ。俺、明日免許の試験あるから勉強するわ。おい、漆原どけ」

真奥はパソコンデスクから漆原を退去させると、漆原も珍しく空気を読んで何も言わずにパソコンを真奥に明け渡す。

運転免許試験の模擬テストができるサイトにアクセスしながら話は終わり、という空気を醸し出す真奥の背中を、真屋と漆原と鈴乃は複雑な表情で見る。

「魔王」

「……なんだよ、まだなんかあんのか」

「千鶴殿が助けを求めても、同じことを言うのか」

「……っ」

真奥は一瞬詰まるが、それでも意地で言い返した。

「物言いは柔らかくするが、結論は変わらない。第一、実際に何もできることなんかねえんだ。それに相手は恵美だぞ。何度も言うが心配したって始まらない」

振り返りもせずにそう言った真奥。

音屋も審判も、それについて何も言うことはできない。

だが、

「真奥さん……」

小さな小さな声が、魔土の丸い背中と心臓を跳ね上げた。

息を止めたまま真奥はゆっくりと振り返る。

そこには、

「さ、佐々木さん……」

「うっわ、えげつな」

音屋のうめき声と、鈴乃を弄辱するような口調の漆原の視線の先に、悄然とした顔の千鶴が立っていた。

鈴乃の傍らから現れた千穂は、不安に揺れる瞳で、振り返った真奥を真っ直ぐ見ていた。鈴乃が部屋に上がってこなかったのは、つまりこういうことだったのだろうか。

初めから、千穂にすべてを聞かせるつもりでいたのだ。

「……………」

「私、真奥さんは自分が言ったこと、遠くへ人じゃないって知っています」

「……………」

てっきり、冷たい物言いを責められるのかと思いきや、千穂は予想外の言葉を吐いた。

「真奥さんは魔王で、遊佐さんは勇者……元々敵同士。それくらいのは私も分かっていますし、真奥さんが『勇者エミリア』なんかどうなったっていい、って思ってたのも、きっと本当なんだと思います」

千穂は胸の前で手を握り合わせて、少しつければ泣き出しそうなほど震える声で、それでも言い募る。

「『魔王サタン』と『勇者エミリア』が敵同士として出会ったことは、今更どうにもならないと思います。敵として出会うしかなかったんだと思います……でも、真奥さん……この前、言ってくれたじゃないですか……私に、素敵なプレゼント、くれたじゃないですか」

千穂の顔からは、もはや抑えきれない思いが、溢れはじめていた。

「遊佐さんは嫌がってたかも、しれ、ませんけど……でも、言って、くれたじゃないですか

……私も鈴乃さんも……遊佐さんも、真奥さんの、『大元帥』なんだって……そばにいて、いって、新しい世界を、見せてくれるって……」

「……佐々木さん」

「え、何それ、僕聞いてないだつー」

必死で真奥に訴えかける千穂の声に西屋は真剣に聞き入り、その場で空気を読まずに発言しようとした漆原の顔をバレーで叩く。

鼻をしたたか打たれ悶絶する漆原を見て、千穂は続ける。

「一度、裏切った、漆原さんだって、今でも大元帥なんですよね……ぐすっ……真奥さん、自分で、遊佐さんを、指名したじゃないですか……自分の意志で、敵だった遊佐さんを……」

「……」

「心配して、それが無意味だったなら、それでいいんです。その方が、いいんです……でも、あんなに強い遊佐さんが、帰ってこないって、心配で……私」

「千穂殿……」

腰が曲がって崩れ落ちそうになる千穂を、横から鈴乃が支える。

真奥は、振り返った姿勢のまま、微動だにできない。

「それに……遊佐さんと一緒に、アラス・ラムスちゃんがいるんですよ？ それなのに、真奥さんが、心配してないはずなんです……だから、今の真奥さん、嘘つきです……はあ」

崩壊する前に、なんとか感情の板を越えられたらしい千穂は、大きく震えるため息をつく、その場でべこりとお辞儀をする。

「鈴乃さんに、話を聞いてくれるようお願いしたので、私です。だますようなこととして、すいませんでした」

「……ああ」

「……それじゃ……」

もう一度小さくお辞儀をして、鈴乃の脇を抜けて帰ろうとする千穂の背に、真奥は黙気のない声で呼びかける。

「ちーちゃん」

「……はい」

千穂は、足を止めるだけで振り返らない。

真奥自身、なぜ千穂を呼び止めたか、自分の行動が一瞬分からなくなる。

そしてたつぷり沈黙してから、ようやく言えたのが、

「……下手に、概念送受とかで重美に連絡取ろうとすんなよ。本当に重美がマズいトラブルに巻き込まれてたら、そのせいでちーちゃんも危なくなるかもしれないねえからな」

そんなつまらないことだった。

振り返らない千穂の表情をうかがい知ることはできないが、千穂は小さく、

「分かりました」

と言うと、ヴィラ・ローザ笹塚を後にした。

其用階段を降りる音が終わり、窓から見える表の通りをとぼとぼと帰る千穂の背が曲がり角に消えるのを見届けてから、真奥は陰しい顔で鈴乃を振り返る。

「……てめえ……」

思い切り、嵌められた。

だから鈴乃を睨みつけてやらねば気が済まないが、その眼力がとことん痛いことを真奥も鈴乃も分かっていた。

「貴様が本当に、なんとも思っていないのかを確かめるには、これくらいしないと」

鈴乃は悪びれる様子もなく、苦笑する。

「私だって、不本意ながら新生魔主軍の大元帥の一人に指名されているんだ。『同盟』の庇護を『主』に考えてもらうくらいのことはしてもかまわんだろう」

「……後でその辺の事情、ちゃんと教えるよな」

不満たらたらの顔で、漆原が押し入れの中に引っ込むのを見届けてから、鈴乃は続ける。

「それでも最初から『主』頼りというのは『大元帥』として情けないから、今は言質を取るだけで済ませておく」

「都合のいい時だけ大元帥の立場を利用するなら、お望み通り剝奪してやるぞ。第一、俺は言

質を取られるようなことは何も……」

「千穂殿の言うことに、開拔けな顔をしたまま一切反論しなかった。それで貴様がエミリアとアラス・ラムスの安否を気にしていることが分かった。これ以上、どんな質問が必要だ？」

「……」

「ではな。私は私でできることがないかどうか考えてみる。千穂殿の言う通り、心配が無駄になるなら、それに越したことはないのだから」

鈴乃は静かに魔王城を出ていった。

「……くそ……」

真奥は、拳をパソコンデスクに叩きつける。

「……魔王様、恐れながら……」

「あんだよ。お前まで忠告を心配しろって説教か」

背に言葉を投げかける声屋に、不貞腐れて返事する真奥。

「いえ、私は正直に申し上げて、エミリアやベルが悪魔大元帥などという事態には反対の意を表したいのですが、今はそれよりも、要緊すべき事態があるかと存じます」

「あ？」

背後で声屋が正座して、真奥と同じ高さで声をかけてきているのが分かる。

「魔王様は先ほど、敢えてその可能性を避けておいででしたが、恐らくベルも佐々木さんも、

その可能性をどこかで考えているのだと思います。だからこそ、エミリアがトラブルに巻き込まれていると考えてしまふのかと」

「……」

真奥の目の前のパソコンディスプレイには、運転免許試験の学科問題が表示されている。

そこには道路を通行する車から見た、歩道や交差点の絵が描かれており、問題のテーマは「危険予測」となっていた。

この絵から推測される危険を、正誤問題で回答してゆくのだ。

「確かに正攻法でエミリアを害そうとするなら、結果として我ら魔王軍は敵いませんでした。ですが、エンテ・イスラが人間同士の戦争状態にあるなら……エミリアの刃と力を鈍らせる『危険』は、何も正面から突きつけられる剣とは限りますまい」

「……」

「エミリアは、エンテ・イスラの人間社会に裏切られてなお、己が人類の救世主、勇者であることに誇りを持っています。常に人の正道を貫こうとするエミリアに対して、同じ人間がその力を拘えようと思つたら、最も有効な手段はなんでしょう」

「……知るかよ。人間の考えることなんて……」

「人間が考えることを自ら学ぶためにこの地に留まる魔王様でも、お分かりにならないと」

書屋の口調は、あくまで穏やかだ。

だが、千穂と同じく、真奥のことを誰よりも分かっているからこそ、真奥の矛盾を的確に、客観なく突いてくる。

主目的確な誠言を上申できる臣下は、稀い存在である。

「今のエンテ・イスラには、エメラダ・エトラウヴァとアルバート・エンデを除き、エミリアの味方はいないと言つて良いでしょう。教会を始めとした権力者はもちろん、パーバリツティア率いるマレブランケらや天界すらエミリアの敵です。彼奴らが主戦場たるエンテ・イスラにエミリアが現れたことをなんらかの手段で知ったとしたら、指を咥えて見ているでしょうか」

エメラダは、もちろん自分の行動も含め可能な限り情報を統制しただろう。だが一方で、エメラダもアルバートも、多くの勢力に監視されていただろうことは想像に難くない。

何せ、教会の教禁を自分の意志で脱出し、勇者エミリアは死んだという教会の公式発表に表だって反抗しているのだ。

鈴乃が教会の思惑通りに動いていない以上、エメラダとアルバートに対する監視が時間経過で解けるはずもない。

もしエメラダの動きが何者かによって察知されていて、そこに付け込みうとした勢力が、鈴乃の予想したようにエメラダを腹に嵌めたりすればどうなるか……。

「一番簡単なのは、人質を取る……か？」

「御意。それがエメラダ・エトワーヴァであるとは限りませんが、エミリアが力を振るうことを抑えられれば誰でもなんでも構わないのです。エミリアが大切だと思える存在であれば、それを盾に取ることでもエミリアの鬼神の如き力を抑えられる……人間とは、そういう存在ではありませんか？」

「そうだな。そもそも俺が統一するまで『人質を取る』なんて上等な戦略は魔界には無かったし、悪魔を人質に取ろうなんて酔狂な人間もいなかったしな。だが……悪美相手にエンテ・イスラの人間がそういうことする理由はなんだ？ 仮にも世界を救った勇者たろうに――」

エンテ・イスラの人間にとって、勇者エミリアと敵対する理由も意味も無いように思える。純粋な武力差もさることながら、救世主相手に石打つような真似をして得をする者がいるとも思えないが……。

「今更申し上げても詮ないことですが、ファーファレル口めを返したときに、エミリアやベルまで大元帥に指名してしまったことは、失策であったと存じます」

すると芦屋は、突然話をそんなく所に戻した。

首を傾げる真奥に、芦屋は諭すように言葉を紡ぐ。

「その話を聞いたとき、初めはエミリアとベルを扇動から魔するのための有様かと思っただけですが……やはりそうではなかったのですね」

真奥は芦屋が微妙にお説教モードに入っている気配を感じて、顔を引きつらせる。

「あれは、その場の勢いってのも多少はあったけど、ちーちゃん(ちーちゃん)の安全を担保しつつ、悪魔達中をこれ以上日本に染させないって意味では仕方なかったというか……恵美が生きてること知ったら、それこそバーバリッティアとかこっちに攻めてきそうな勢いだったし……」

蒼屋は頷いた。

真美は、臣民たる悪魔が無益な戦いで死んでいくのを良しとしない。

マレブランケの頭領格が、実力を完全に取り戻してはいないはずの恵美にすら、真っ向勝負で敵わないのは鏡子でのチリアットの一件で証明されている。

魔界から離反したバーバリッティア一党がどういう思惑で動いているにしろ、これ以上日本に具体的な害を及ぼすようになれば恵美も鈴乃も黙ってはいまい。

そうなる原因を排除するには、かつての悪魔の敵が、敵ではなくなった、ということをも魔土自ら見せるしかなかった。

そしてその考え方は、確かに悪魔の王として正しい。正しいのだが、

「三人の新たな大元帥の指名によって、魔王様は日本と佐々木さんの安全と、エミリアとベルのエンテ・イストラでの安全を引き換えにしたことを自覚していらっしゃいますか？」

真美は、一瞬呆けたように口を開け、

「えっと、ん？ 鈴乃がこうで、恵美が今こうだから……その話をフアーファレル口がエフサハーンに持って帰ると……東大陸はバーバリッティアが支配してっから……」

空中で考えを整理するように、指をあちこちに動かし、そして、

「……………あつ」

そして頭を抱えた。

「そっかあああ、人間が怒るのか！ 恵美と鈴乃のこと裏切り者だと思っちゃうのか！」

「本当に、お分かりになっていなかったのですね……」

高屋は嘆息する。

「悪魔が持ち帰る情報ですし、そもそもエミリアは死んだことになっていますし、ベルの任務も密命に属するようですから、すぐに人間達がその情報を信じ込むことはないでしょうが、疑念を抱いた者が動き出す可能性は十分にあります」

鈴乃が先ほど言っていたように、新たな刺客か、そうでなければ大規模な人間の部隊か。悪魔の脅威を排除したと思ったら、真実は無自覚に恵美と鈴乃を危険に晒していたのだ。

「で、でもならなんであいつら……」

鈴乃など先ほどは冗談半分にしろ自ら「大元陣」などと口にしてみせたし、恵美も最初の日を除けば、千穂の安全のために仕方ないと納得していたように見えた。

「それこそ、納得していたのでしょう。佐々木さんの安全のために、自らが脅かされるかもしれない危険を受けるつもりでいたのではないですか？ エミリアが今回増穂という選択を取ったのも、元はと言えば「もう受け身は嫌だ」という動機だというではありませんか」

「……それは」

「それを分かっていてエミリアもベルも何も言わなかった。佐々木さんに氣を遣って、というのもちろんなあるでしょうが……奴らなりに、今のこの状況を、守りたいと思っているのではないかと……。決して相容れぬ我々が、なんだかんだと言いながら同じ夕餉を囲む今の生活を」

「お前は、どうなんだ」

「さて、私は今となつては、魔王様が最終的に世界征服の野望を達成してくだされば、悪役にはそれほどこだわっておりません。もちろん一個人として、仇敵と手を結ぶような真似はしたくないとは思っています」

白々しく真奥の反撃をかわした西屋。

真奥は不機嫌な顔で不自腐れ、言葉はどこか余裕のある笑みでそれを見るが、すぐに真剣な表情に戻って続けた。

「そして魔王様、私は思うのですが……明確にエミリアの身柄を欲しているのは、どの勢力でしょう」

「あ？」

「エミリア自身は強靱な肉体と精神を持っています。生半可な人間が何かを強制したところで、その武力を服従させることなどできはしません。少しでも下手を打てば、返り討ちに遭うのは目に見えています」

「何が言いたいんだ」

「エミリアに、武力以外の価値を見出していたのは……どの勢力でしたか」

「……おい、まさか」

真美の脳裏に、恵美の聖剣やアラス・ラムス、イエソドの欠片を狙って現れた、大勢の天使達の顔が去来し息を呑む。

その想像が当たっていて、もし恵美がトラブルに巻き込まれているなら、アラス・ラムスにすら累が及ぶことになる。

「でも、それ全部想像だろ？」

突然腰が音を立てて開いて、中から漆原が出てきた。

その手には、押し入れの中に漆原が勝手に設置したミニカラーボックスの引き出しが抱えられていた。

「エンテ・イスラと日本のカレンダーがびったりリンクしてるかどうかなんて分からないし、日本と違って乗合馬車なんかは時刻表通りに駅に来るような世界でもないだろ？ エメラダ・エトウ・ヴァともスケジュール併せなきゃなんないんだから、時間の都合がつけづらくて遅れるだけかもしれないじゃん」

漆原は引き出しを畳の上に置くと、その中をがさごさと漁る。

「僕らが言うことでもないけど、魔王軍にやられた後の復興中の国なんて、そこまで色々なシ

システムが充実してるはずないし、単純にエミリアが日本の生活にどっぷり浸かりすぎて、理解してるだけだと思っけどなあ」

「……それも楽観的すぎると思うが」

「たととしても、まだ今日が終わってないのにメソメソしてる佐々木千穂は、悲観的すぎ。大体人質がどうこうとか言っけど、僕が指揮してた西方攻略軍で、昔エメラダ・エトウーヴァだけじゃなくて、セント・アイレの重鎮を結構な数人質にしてたんだぜ？ でも、エミリアはそれ全部助けた挙句に僕の軍を滅ぼしてくれたんだもん。ちよっと考えにくいよ。誰かを人質に取られて動けなくなってるってのはさ」

さすが、二度惠美と干戈を交えて敗北した漆原だけに、その言葉には説得力があるように思えた。

確かに惠美なら、並みの人間の小細工など、単純なパワーで吹き飛ばしてしまいうる気がする。

「まあ、もうちよっと待ってみれば？ アラス・ラムスが心配なのは分からなくてもないけど、それこそエミリアが生きてる限りアラス・ラムスは大丈夫だろ？ 少なくとも今、エミリアを一方的に殺せるような存在は、地球にもエンテ・イスラにもいないと思っけよ」

漆原はそう言うのと、進んでいた引き出しを持ち上げて何も取り出さずにまた押し入れに戻し、新しい引き出しを持って出てくる。

「とりあえず、ベルが何かするの待ってみようよ。大体エミリアだって、困ったって別に真奥になんとかしてほしいとか思うタマじゃないでしょ？」

むしろ、余計なことをするなと怒りそうな気がしないでもない。

「……倉屋、漆原」

「は」

「んー」

真奥は、苦笑してから大きく息を吐いた。

「すまねえな。少し、落ち着いた」

そうして、またパソコンに向き直る。

「今は、目の前のことに集中する。あいつが帰ってきたときに、遅刻を盛大にバカにしながら免許見せつけてやる」

「……」

「好きにすればー？ ……あれー、どこやったっけなあ……前に来たとき置いていったの……捨てちゃいないはずだけど」

真奥はたた無言で主の背に一例し、漆原はまた新たに引き出しを引っ張り出して、どうやら何かを探している風だ。

そうして結局、その日も真奥は戻らなかったが、魔王城の時は、表向き、いつも通り通って

いったのだった。

※

そして結局、真奥は一度目の試験に失敗して、二度目にチャレンジする羽目に陥った。

一回目の試験に集中できなかった原因は、責任転嫁をするわけではないが、千穂と青屋の言葉だった。

確かに恵美を大元帥（だいげんすい）にすると言ったのは真奥自身だし、そのあと、恵美に向かって彼女の人生に新しい意義を見出してやると宣言したのも自分だ。

そして、青屋の想像は決して考えすぎではなく、恵美の身柄を欲しがる天界などが事態を察知すれば、当然取ってしかるべき戦略だった。

だがかつて恵美を輔えて空剣（そくけん）を奪おうとしたサリエルは、真奥の上司に惹きつけられて完全に日本の住人になってしまっており、その後、自分の仲間と通じている気配もない。

しかも大天使サリエルと同格であるガブリエルすら、恵美はあっさり退けているのである。大天使格が複数現れたらその限りでないかもしれないが、そんなことになれば日本でなくても大事件である。

彼らの聖法気（せいぽうき）をエンテ・イスラの人間達が察知できないとはなかなか考えづらく、そうする

とますます恵美が日本に戻らない理由が分からない。

そんなことをつらつら考えていて解答欄を一個ずつずらしてしまったわけだが、結局本来恵美が帰ってくるはずの日から、今日で既に二週間が経っていた。

鈴乃はあれから色々方策を練っているらしく、概念迷宮を探知されにくい高等格式にするための増幅器を日本で調達したり、ソナーを打ったり、もう一人の恵美の仲間であるアルバートの行方を探ったりと、日本にいながらにしてできるだけだけのことをしていっているらしい。

そのせいで鈴乃の部屋は増幅器となる怪しげな道具や法術紋様で埋め尽くされ、ちよっと見には怪しい新興宗教に嵌ってしまったかのようだった。

しかし今日に至るも芳しい成果は上がっていないようだ。

分かったことといえば、少なくとも恵美もエメラダも、日本には戻っていないこと。

日本とエンテ・イストラを繋ぐゲートが開いたのは、エメラダが迎えに来て、恵美が向こうに行つたあの日が最後であることくらいだ。

千穂はバイト中もめっきり口数が少なくなつてしまい、事情を知らない木崎には、真奥が千穂に対してデリカシーのないちょっかいをかけたのではないかと疑われたりもした。

しかし、運転免許の学科試験に失敗し、真奥自身、恵美がいない生活というものに落ち着かないものを感じていて、それが自覚なしに表に出るのが、木崎から、

「何か困ったことがあるなら相談に乗るぞ？」

などと持ちかけられてしまう始末だ。

困ったことなんか、何も無いはずなのだ。

何せ、宿敵である勇者がいないのである。西屋が羽根を伸ばして焼肉に行こうなどと言いつくほど、清々しい環境のはずなのに。

「……ちげよって。アラス・ラムスが心配なだけだったの」

失敗した前回の試験の結果を思い出しながら、真奥は自分に言い訳する。

本当にうまい嘘をつく者は、肝心なところだけ嘘をつき、あとは怪しまれぬよう極力真実を言う。

人に対して嘘をつくのは罪だが、時として、自分に対してつく嘘はそれ以上に欺瞞に満ちて、精神を減衰させ、後退させる。

アラス・ラムスが心配なのは本当だ。

だが、それだけでないことは、真奥自身分かっているのだ。

それを理屈でごまかそうとする、ごまかさなければならぬ自分に、腹が立つ。

『……はい天文台前より……ですっ』

バスの運転手の独特の節回しで車内放送が流れ、バスが停車する。

調布駅北口とは試験場正門のちょうど中間地点あたり。

三鷹市の国立天文台前のバス停で、

「ヒヤー！ 間に合ったー」

頓狂な声が、後ろ乗りのバスの入り口付近で上がった。

見ると、キヤスケット帽を目深に被り、カーキ色のサロペットパンツを穿いた小柄な女性と、スーツ姿の男性が連れ立ってバスに乗り込んでくるところだった。

「オトーさん！ はよハヨー」

「ああ、よつと……」

どうやら親子らしい。

真実（まこと）は、ふと窓の外を見る。

前回は気づかなかったが、「天文台前」というバス停名はそのままでの意味だったようで、緑に囲まれた小高い丘の上に門があり、さながら大学のような佇まいを見せている。

「へえ、こんなのあったのか」

人間の活動の光が星々を空から掻き消す東京に天文台があるのは意外な事実だった。

天文台のある三鷹市は都心のベッドタウンとして古くから栄えた大きな町だ。

少なくとも夜中に肉眼で空を眺めても、それほど星の明かりは期待できそうにないが……。

日頃あまり目にするのではない珍しい施設についてそんな感想を頭に浮かべ、それ以上はなんの思いにも至らず、試験場までの時間を改めて復習に当てようとした瞬間だった。

「……はい発車いたしますっ……」

バスが、大きな揺れと共に発車した。

元々坂道にあるバス停である。坂道発車がちょっと乱暴だったのだらうか、とにかくその揺れで、真央は読んでいた教本を取り落としてしまった。

「あっ」

「おっ？」

隙間なく立っている乗客の中から声上がる。

「す、すいません」

教本は、その乗客の足の上に落ちてしまっていた。

謝りながら真央が顔を上げると、

「いいよいいよ、気にしないーイ」

それは、先ほど乗ってきた親子の、キャスケット帽を被った娘の方だった。

不可抗力とはいえ、公共交通機関の中で女性の足元に手を伸ばすことを一瞬ためらってしま

う真央。

するとその女性は、視線する車内で周囲の人間に当たらないように、器用に体を曲げて足元

に落ちた本を手にとって真央に差し出す。

「はい、ドーン」

「あ、どうも」

目深に被った帽子のせいで、座っている真真からも顔色はうかがいしれないが、少なくとも怒っている気配は無い。

事実、笑顔で、教本をこちらに差し出してくれているのに、

「……」

「あ、あの……」

何故、女性には教本を受け取った真真の手を凝視しているのだろうか。

既に真真が教本を手を取っているにも関わらず、本を掴む手を離してくれず、引っ張り合う形になっている。

「あのー……」

「……すんすん」

聞こえて、いないのだろうか。

いや、この距離で聞こえていないはずがない。

だが身乗り出した女性は一向に手を離してはくれず、やがて、

「……………すんすん」

「ちょ、ちよつと」

そのまま教本ごと、真真の手を自分の顔の方に引き寄せようとするではないか。

手渡された自分の本を放すこともできず、かと言って何故自分は引っ張られているのかも分

からず、やがて、

「お、おい？」

本を引っ張り合っていた手を、反対側の手で纏まれてしまった。

見知らぬ女性に手を引かれただけで喜ぶような精神性を真奥は持ち合わせていないし、第一ここは公共交通機関の中である。

一男性として社会生命を自己防衛せねばならぬという本能から、真奥はさすがに手を引こうとするが、

「すぐ済むカラ」

「はあ？」

と、女性は手を離してくれない。

そして何やら、

「すんすん……」

真奥の手の匂いを嗅いでいる？

「お、おいっ！」

さすがに真奥は気味が悪くなって強く手を引く。

教本は戻らなかったが手は戻ってきて、真奥は怪訝な顔で女性を見上げると、女性は女性で不満そうに口を尖らせていた。

「なんだか知らないけど、本」

突然奇行に走った女性に本当ならこれ以上話しかけたくないのだが、本を取られたままではどうしようもない。

別に内容は完璧に覚えていゝし価値のあるものでもないが、私財を投げ打って買ったものをおいそれと人にやるわけにはいかない。

と、そのときだった。

「……ツバサ」

新しい声が、女性の隣から聞こえてきた。

「ハイー オートーさん！」

それは、女性と一緒に乗ってきた、スーツ姿の男だった。

そうだ、そういえば親子で乗ってきていたのだ、この二人は。

女性の隣の、父親と思しき男の顔を見るとなかなか整っていたが、一見して日本人ではないと分かる。

そういえばさっきから、女性の短い言葉の端々に、微かな訛りが感じられる。

外国人なのだろうか。

父親らしい男性は、ツバサ、と呼んだ女性から真実の本を取り上げると、改めて真実に差し出してきた。

「大家失礼をしましタ」

「い、いえ……」

父親のほうは普通そうだが、そうであつてもできればあまり関わり合いになりたくない。

真奥は教本を開くと、わざとらしくてもなんでもいいから、とにかく親子から視線を外そうとした。

だが、

「ツバサ、お前もこちらの男性に謝りなさい」

と、父親の方が、いらぬ良識を発揮しはじめた。

「ハイ、オトーさん！」

その瞬間、ツバサ、と呼ばれた娘は背筋をピンと伸ばして、真奥に向かってほとんど顔を近づけるようにして頭を下げる。

「失礼しター」

失礼されたのは分かつてるが、元はと言えば真奥が彼女の足元に本を落としたのが原因だ。

「ああ、うん、いいよ」

そう言うしかないではないか。

真奥がそう返すと父親の方は一つ側（わき）いて真奥から視線を外したが、

「……」

姿勢を止した娘の方は、真奥を観察でもしているように顔をこちらに向けている。

……陸心地が悪い。

真奥はそんなことを心の中で思う。試験場まで、あとどれくらいあったのだろうか。

真奥は窓から見えた三十キロ速度制限の標識を恨めし気に見るが、

「オニーさん、オニーさん！」

試験場到着どころか、次のバス停にも着かないうちにツバサという名らしい娘が話しかけてきた。

どうしてそうなる？

真奥は困惑が表情に浮かぶのを止めることができなかった。

「オニーさんもメンキョ取りに行くの？」

「あ、ああ……そ、そうですけど」

一瞬ぞんざいな返答をしそうになって、すぐ隣にいるのが彼女の父親であることを思い出し、とりあえずあたりさわりなく敬語で応対する。

オニーさん「も」、ということとは、この親子の行先は、もしかしたら自分と同じなのではないだろうか。

真奥は一瞬眩暈がしそうになる。

「何だめ？」

「え？」

尋ねられている意味が分からず、首を傾げる。

「私とオトーさん、今日十回メ！ メモリアル！」

「じゅ……」

真奥は、返す言葉に詰まる。

さっきの質問は、免許の試験に挑むのが何回目か、という質問のようだったが、その回数にはさすがに驚く。

既に運転免許を持っている木崎やマダロナルドの他のクルーが言うには、学科は意外と曲者で落ちることも十分あり得るという話だったが、今日が十回目、というのはちよつといくらなんでも落ちすぎではないだろうか。

確かにメモリアルには違いないかもしれないが、あまり記録にも記憶にも残す価値の無いメモリアルではないだろうか。

「あ、あの、もっと声小さく……」

そのメモリアル試験を受ける父親は、すぐ隣にいるのである。

行きずりの相手だが、いくらなんでもこんな不名誉な話を試験場に到着するまでの歓談のテーマにするのは真奥も忍びない。

「シカタナイシカタナイ、おとーさん、まだきちんとカンジ読めないし」

原付免許が普通自動車免許かそれ以外の何かの取得を目指しているのか知らないが、そんな状態で何故免許の試験なんか受けようと思った。

あと、仕方ないの使い方がどう考えてもおかしい。

公の場で娘に誹謗中傷されている父親はといえば、

「……」

「……」

恐る恐る視線を向けた真央を、横目で見ていて、一瞬目が合った。

そして合った瞬間、まっとう目をそらして外の景色をみやる。

いや、見ているふりをする。

「……」

聞いているなら何か言ってくれよ……。

切実にそう思う。

「で、オニーさん、何曜日？」

「に、二回目……」

「わお！ スゴイね。オトーさんの二十パーセントしかナイ！」

間違っちゃいないが、その一言だけ抜き出すと、真央の何かが父親氏に比べて全く足りないようにしか聞こえない。

「き、君は、君も今日の試験受けるのか？」

どうにかツバサに、オトーさんを講談中傷するのをやめさせなければ。

黙らせたり無視することは早々に諦めた真央は話題を違う方に持っていこうとするが、

「んーん、オトーさんのカイゾエ。ん？ ツキソイ？ 私、オトーさんにツキソツテきた」

完全に敵蛇である。どういうことだ。娘が、父親の付き添いで試験場まで来るのか？

普通逆じゃないのか？ 逆だとしても珍しいだろう。

「じゃ、じゃあ君は試験は……」

「イチオー受けようかと思ってる」

なら最初からそう言っていたきたい。

免許試験場は試験を受けるのに予約は不要で、ふらりとやってきて時間までに所定の手続きをすれば試験を受けることができる。

真央はこの二人が、自分と同じ試験を受けるのではないことを心の片隅で折った。

「でもペンキョーしてないから、オトーさんにつきあうだけでヤメトコつかナー」

真央は段々と疲れてきた。

日本語はある程度習得しているようだが、運転免許試験に都合九回も落ちているようなら、喋ることはできても読み書きはまだ習熟度が足りていないのだろう。

ここまで適当な態度で受験して合格するほど、日本の運転免許試験は甘くない。

「ま、頑張れ……」

そう言うしかないではないか。

「ガンバルヨ……」

ツバサは腕と氣勢を高々と上げる。

それで会話が終わってくれれば良かったのだが、一瞬の沈黙と、一回の左折の後、

「ねぇねぇ、オニーさん！」

「……何」

また話しかけてきた。

真奥はもうバスの中で復習をすることは諦めたが、とはいえこの気まずい会話をあと何分続ければ良いのかと絶望的な気持ちになってくる。

「オニーさん、名前何？」

「……ええっと……」

真奥はわざと一拍開ける。

フレンドリーなのは結構だが、面倒な人間と知り合いになるつもりはなかったし、名乗ろうかどうかどうしようかと本気で悩んでいると、

「ワタシ、ア……じゃない、サトウツバサ」

じゃない、ってなんだ。自分の名前言い間違えんな。

まさか相手が自分の名前を言い間違えるとは思わず、また視力してしまう。

「あー、俺はその、真奥です」

「マオウ？」

キャスケット帽を脱いだ頭が、くりっと傾く。

そして次の瞬間、

「アタマの王様？」

真奥の胃の底が、冷えた。

「な、ん……」

真奥は言葉に詰まった。

今まで、初対面でそんなことを言ってくる人間は、一人もいなかった。

後からフリガナ的な意味でからかわれることはあったが、そもそも「真奥」と日本語の「魔

王」では、イントネーションをわざと変えている。

だが次の瞬間、反応に窮した真奥の反応を否定と取ったのか、サトウツバサは不思議そうに

言った。

「だって、マオウって言ったら、ゲームとかのラスボス……」

「そーじゃなくて」

真奥は詰めていた息を一時にして吐き出す。

要するに、イントネーションの違いがそもそも伝わっていなかったということが分かったからだ。

サトウツバサ、という響きはどう聞いても日本人の名前だが、生まれてからずっと海外で育っていれば、日本語をうまく操れないということは十分あり得るだろう。

「そっかー、魔王じゃないのかー」

何が残念なのか知らないが、少し落胆したようにうなだれるツバサ。

だが、すぐに何かに気づいたように顔を上げる。

相変わらず目深に被っているキャスケット帽のおかげで瞳の表情をうかがい知ることとはできないが、口はにんまり笑っている。

「でもね！ オトーさんは、サトウヒロシってゆーのー」

「は？」

何が、でもね、なのは分からないが、真奥は思わず隣の父親を振り返る。

すると、父親の方も本から顔を上げると目だけで真奥を見て、

「サトウヒロシです」

そう、小さく会釈した。

「えー……」

だが真奥としては、礼儀を失していると分かっても、半笑いの表情のまま不審の表情を浮か

へざるを得ない。

確かに目の前の男性は、金髪碧眼（きんぱひくがん）というような分かりやすい外国人ではないものの、お前のようなサトウヒロシがいるか、と全力で突っ込みたくなるような顔立ちと外見だ。

いやいや、先人親は良くない。どう見ても純欧州（じゅしゅう）産な顔立ちの男性だが、先祖に日本人や日本人がいるのかもしれないし、日本好きの両親の下に生まれたのかもしれないし、増化して日本人名を取得した可能性もある。

「……」

真奥とサトウヒロシはしばし見合ってから、やがて先ほどと同じようにヒロシの方から視線をそらした。

なんなんだ、と声に出して言えない真奥だが、それは間違いない正直な気持ちだった。

「次は、試験場正門前、試験場正門前、警視庁運転免許本部、府中運転免許試験場にお越しの方は、こちらでお降りください……」

車内に機械音声が鳴り響き、真奥はようやく緊張を解きはぐす。

このわけの分からない父子から、ようやく解き放たれる。

道路の安全バーに取りつけられたここでおりますブザーに手を伸ばそうとして、

「おわっ！」

真奥は突然手を引っ張られ、プザーにあとわずか指先が届かなかった。

ツバサが、真奥の手を取って引っ張ったのだ。

そしてツバサはまた、

「……すんすん」

「だから何やってんだっ！」

ほとんど口づけしかねない距離で、真奥の手の甲の匂いを嗅いでいるではないか。

「ツバサ」

さすがの父親も顔を曇らせてツバサを窘めるが、今のツバサは至極真剣な様子で真奥の手を校

分し、

「……よくわかラン」

「それはこっちのセリフだっ！」

もはや遠慮も何もなく、それこそ放り出すように手を離した。

「一体なんなんだよあんたら！」

これが男女立場が逆だったなら、余裕で犯罪として処理されるレベルである。

真奥もそこまで料簡の狭いことを言いたくはないが、少なくともツバサの行動は最初から車内マナーとかそれ以前の問題だ。

「いー匂いに邪魔されて、よくわかラン」

「はあ？」

「マオウの手は、いー匂いがする」

なんだと言うのだ。

職業柄、手洗いには日頃から神経を使っているが、今日の真奥は朝トイレに入った後、朝食前に近所の薬局で八十円で買ったなんの薬でもない泡立ちの悪い石鹸で手を洗っただけだ。

そうこうするうちに、バスはようやく、府中運転免許試験場の前のバス亭に停車する。

「じ、じゃあこれでっ」

ツバサの不可解な言動は気になるものの、一秒でも早くこの父子から解放されたい真奥は、そそくさと立ち上がるとツバサの脇をすり抜けるようにして足早にバスの前方に向かい、逃げるようにバスから降りた。

試験場と反対側の車線のバス停のため、目の前の歩道橋を駆け足で上ると、あの父子が降りてくる前にさっさと手続きを済ませるべく、試験場の正面玄関へと突撃した。

一方のヒロシとツバサの父子は、バスを降りる際、調布駅北口からの運賃二二〇円を払うために、千円札の両替を数々手間取った拳匂に一番後にバスを降りた。

「……ツバサ、あまり目立つことは……」

「だって、初めてだったんだモン」

ヒロシの言葉足らずの注意に、ツバサは黒びれた様子もなく言い返す。

「ゼツタイ、あのオニーさん、何かあるよ。手から、匂いがしたモン」

「匂い？ げほっ」

ヒロシは、走り去るバスの排ガスを思い切り吸い込んでしまい、小さく咳き込む。

「うん」

「なんの匂いがしたんだ」

「んー……マオウ、どこに行っただろう」

ヒロシの言うことを聞いているのかいないのが、ツバサは真奥の姿を探してバス停できよろきよろと周囲を見回す。

「……とにかく、試験は受けるぞ。今日こそ、受かる」

「ガンバレー」

ヒロシの決意とした決意の声に、ツバサはまるで気のない様子。

やがて真奥の姿を探すのを諦めたツバサは、ヒロシと共に歩道橋を上がる。

「それでねー、マオウの手の匂いだケド」

「……お前の話の飛躍には、いつも驚かさレル」

ヒロシは落ち着かない様子で後ろをついてくるツバサを振り返る。

そしてツバサは例によって、そんなヒロシの様子など気にも留めずに、言った。

「マオウの手からはネー」

そのとき、二人が降りた側とは反対側の車線のバス停に別の場所からやってきたバスが止まり、大勢の乗客者を吐き出すのが歩道橋の上から見取れた。

これでは、ヒロシが手続きするにはかなり待つことになるだろう。

ヒロシが表情を変えないままため息をつくとき、ツバサは続けた。

「油と、芋と、それと、なつかしい匂いがしたヨ」

「……懐かしい匂イ？」

油と芋、というのがよく分からない様子のはヒロシだったが、それでも何かを感じてツバサを振り返る。

ツバサは立ち止まってその場で突然くるくるとパレリーナよろしく回転しはじめるが、やがて試験場の正面玄関にびたりと視線を向けると、真剣な声色で小さく言った。

「懐かしい匂い。ワタシが、昔いた、あったかい場所の匂い……」

## 原

「ねえ、何か変な臭いしない？」

パソコンデスクに座ったまま、津原は顔を擧めて周囲を見回すと、カジュアルコタツで書き物をしていた若原が顔を上げずに答える。

「ベルの部屋だ」

「は？」

漆原は振り向いて疑問の声を上げる。

香ってくるのは、ハーブを適当に混ぜ合わせて煮しめたものを磨やしているような、甘くて鼻の奥の神経に障る、幽の浮くような香りだ。

「香を焚きしめているらしい。それが法術の増幅器になるとか」

「……あいつ何やってんの？」

「知らん。昨日はドアの隙間から桃色の煙が湧き出していて、さすがに私も驚いた。とにかく試せることはなんでも試すぞうだ」

「窓から外に漏れたら、よその人に火事だと勘違いされて通報されない？」

漆原は顔を皺めて鈴乃の部屋の側に顔を向ける。

「まあ、あいつなりになんとかエミリアの行方を探そうとしてるってことかね」

「まあな」

西屋は漆原の問いかけにあまり取り合わず、真剣な顔で机の上で鉛筆を走らせている。

千穂と恵美の誕生パーティーをやるはずだった日から、西屋は暇を見つけてはこうして書き物をするが多くなった。

漆原も最初は家計簿が何かなのだと思っていたのだが、一日にA4コピー紙に五枚ほどのペ

ースで増えてゆく書き物を見て、一度は、

「パソコン使う？」

と珍しく気を利用して尋ねたところ、

「パソコンは分かん」

と無下に返されるという一幕があった。

むっとした横原はそれ以降あまり気にしないようにしているのだが、芦屋がそんなことをしはじめた日のことを考えると、芦屋は芦屋なりに、何か思うところがあって自分のできることをしているのだろう。

少なくともこの一年の家計簿総ざらい、というようなことではないはずだ。秋だし。

と、そのとき、

「うわっ！」

「むっ？」

アパートが小さく揺れる。

鈴乃の部屋から、爆発音と呼んでいい衝撃音が生じ、床原も芦屋も驚いて声を上げる。

それと同時に、

「うううっ、げほっ、げほっ」

と、開け放たれた窓から隣の鈴乃が窓を開けて咳とめく音が聞こえてくる。

「漆原は吾屋と一瞬間を見合わせてから立ち上がると、朝の晴れ間のうちに干されている洗濯物を避けながら、窓から身を乗り出して隣を覗いた。」

「うわっ、なんだよこの煙！ 何してんだお前！」

そこには部屋から湧き立つ白い煙から逃げるようにして、全開にした窓から顔を出して涙目で咳き込んでいる鈴乃の姿があった。

「る、ルシフェル……す、すまないけはっ、ちょっと雷の起動に失敗した……けはけは」

「失敗して爆発するような危ない術を室内で使うなよ」

至極まっとうな漆原の突っ込みに、

「い、いや、古道具市などを回って色々増幅器になりそうなものを調達したんだが、やはり微妙に道具の持っている霊的な概念が異なっていてけはけはっ」

もともと言い訳をしながらも咽せ続ける鈴乃。

漆原は呆れて首を横に振るが、彼の頭の上から、吾屋も顔を出して苦言を呈する。

「何をしているべル、近所迷惑だぞ。洗濯物に妙な香の匂いが移ったらどうしてくれる」

鈴乃の部屋から流れる煙が、わずかに風下になっている魔王城側に流れてくるのを敏感に感じ取った吾屋は、折角干した洗濯物を機織にされてはたまらないと、窓枠にかけた洗濯物を總めて引っ込める。

「いや、面目ない……はあああ」

鈴乃はぐったりした様子で窓枠に体重を預け、深呼吸をする。

「きちんとした設備が整っていれば難しくないはずの術なのに……千穂殿に倣うように修行をつけたくせに、その実自分がまるで修行不足とは情けない……」

千穂はどではないにしろ、ここ二週間で弱気になりがちなのは鈴乃も一縷だった。

「あんまり進展ない感じか」

「残念ながらな……」

ようやく謎の煙が収まり、鈴乃は大きく息を吸い込む。

「おい、何をしていたか知らんが、調理器具を使う前にはもう一度よく換気をしておけよ。引火したら目も当てられん」

もう一つの窓を開けて洗濯物の場所を移動させた西屋が鈴乃に呼びかけると、干された布団よりしくだらりと窓枠に垂れ下がったままの鈴乃は、気のない様子で手をひらひらさせる。

「エメラダ殿とアルバート殿以外に、エンテ・イスラ側で信用の置ける者がいれば……」

「そんな奴がいれば、そもそも貴様が苦勞をする必要など初めから無いではないか」

西屋は鈴乃のボヤきを容赦なく断じるが、鈴乃本人もそんなことは分かっているので反抗したりはしない。

「仕方がない、また少ししたら別の方法を試すか……部屋を片付けなければな」

香を焚いたり煙を出したり燐発したりと何をしているか知らないが、今の鈴乃の部屋は、以

前上がつたときの整理整頓された様子とは一変した惨状を呈しているに違いない。

「エメラダ以外ねえ」

漆原は鈴乃のボヤきを聞いて、少し毒を吐く。

「なあべル」

「なんだ」

自分から呼びかけておきながらしばし悩む様子を見せた漆原だが、やがて意を決したように一枚の名刺サイズの紙片を取り出す。

殆ど魔王城から出ないくせに名刺などこで手に入れたのかは分からないが、保管が悪かったのか埃がこびりつき、汚い折り目がついたその紙を見ながら漆原は言う。

「エメラダとアルバート以外で……信用ができるかってゆーとむしろできないけど……聞けば事情は知ってそうな奴が……」

漆原が迷いながらそこまで言っただけだった。

「あ!!」

三人が顔を出している窓から見下ろせる道の方で、大声が上がった。

「ん?」

「あ!」

「……誰?」

アパートの脇を通る道からこちらを見上げている人物は、驚きと喜びの顔で小さく手を振る。だが高屋と鈴乃は、その笑顔にかすかな不安が見え隠れしているのを見逃さなかった。

「こんにちは、高屋さん、鈴乃ちゃん。あと……初めましてだと思うけど……漆原さん、だっけ？」

「だから、誰？」

見知らぬ女性にいきなり名前を言い当てられて首を傾げる漆原の疑問を、残る二人は無視した。

「鈴木さん……」

「梨香殿、なぜ……」

高屋と漆原は、道からこちらを見上げる鈴木梨香に、驚きを隠せなかった。

「軽茶ですが」

「あ、すみません……」

高屋が出したお茶を、梨香はかしこまって受け取る。

魔土城に通された梨香は、最初は興味津々で部屋の中をあちこち見回していたが、元々物の多い部屋でもない。

その後はコタツの天板の上に目を落としたまま、芦屋達が座るのをじっと待っていた。

「梨香殿、先日は世話になった」

鈴乃も新しい着物に着替えてから魔王城にやってきて、先日テレビの購入にあたってアドバイスをもらった件で改めてお礼を言う。

「しかし、よくアパートの場所が分かりましたね」

芦屋が登に座りながら言うと、

「あ……それはこの前テレビ買ったときに鈴乃ちゃんと携帯のアドレス交換して……」

「私と？」

名指しされた鈴乃は、目を瞬かせて自分を指差す。

「鈴乃ちゃん、携帯電話のプロフィール機能のところに、名前と番号とアドレス以外にも色々入力してるでしょ。機種にもよるけどあれ、赤外線通信でプロフィールデータやりとりすると、全部相手に行っちゃうんだ」

「ああ、そういうことか」

鈴乃は得心する。

確かに以前、梨香と番号を交換したときに、赤外線通信機能で自分のデータをプロフィールから送った気がする。

「特に見られて困ることは書いていないし、そのおかげで梨香殿が迷わずに済んだのなら、良

かった」

朗らかに笑う鈴乃だが、

「うん、職業のところが『なんとか審議官』になっててそれはよく分からなかったけど」と追撃されて、笑顔が固まる。

「……はは……そんなことが書いてあったか」

「うん」

製香は特に不審がっている様子もなくそれ以上何かを言うつもりはないようだが、鈴乃がどこかなく視線をずらすと、津原の視線は明らかに自分の肩抜けさを嘲笑っていた。

「……」

自分の迂闊さを睨って下を向いてしまう鈴乃だが、それよりも製香は切迫した様子で言う。

「そう、で、連絡もせずいきなり訪ねてきちゃって悪いかなって思ったんだけど、でも、いつでもたつてもいられなくてさ……」

日頃明るい彼女が、そこまで言うとき表情を曇らせる。

その表情で、芦屋は大体製香の言いたいことが予想できてしまった。

「芦屋さん、鈴乃ちゃん。恵美……どうしちゃったか、聞いてない？」

そしてその予想は即座に的中する。

恵美はエンテ・イスラ療養にあたって休みを取ったとは言っていたが、旅立つ日から一週間

だけのはずだ。

単純に考えて、恵美は丸二週間も、戦場を無断欠勤していることになる。

「電話も繋がらないしメールも返ってこないし、思い切ってマンション行っても留守で、仕事も……結構長いこと、無断欠勤しちゃってるんだ」

「それでは悪化はク……戦場では大丈夫なのですか？」

短い付き合いの声屋にも分かるほど、梨香が空元気を振り絞っていることが分かったので、声屋は踏み留まって当たり障りのない表現に留める。

「今のところはなんとか……恵美、今まで無断欠勤どころか遅刻も一切無いし、勤務態度も能力も評価すごく高くて、だからフロアチーフとかマネージャーとか上の方の人も、怒るより前に心配してる感じで」

「そうですか……」

「ただ、恵美、一人暮らしでこ所親海外でしょ？」

「え、ええ……」

恵美の対外的な境遇の設定を知らない声屋は、話の流れで同意を求められて一瞬慌てる。

「職場以外じゃあんまり友達付き合いとかも無かったみたいだし、病気とか、大きな事故とかに遭ってたら誰も分からないんじゃないかって皆心配してて……」

「>……」

視線を落として話す梨香の顔を見て、芦屋は鈴乃と漆原に目くばせする。

やはり、ここまで音信不通になれば、誰でも不吉な想像をしてしまうのだ。今になって案外論は通じないだろうという認識の確認をしてから、視線を梨香に戻す。

「で、私の知ってる恵美の友達って言ったら、あとはもう真央さん達しか思い浮かばなくて、それで……いきなりで迷惑かなとは思ってたんだけど、じつとしてられなくて……」

ここで「友達」の部分を訂正するほど芦屋も漆原も空気の読めない悪魔ではないが、さりとて、この場に梨香の期待に応えられる者は一人もいないのは確かだ。

「残念なのですが……我々も、鈴木さん以上のことは分かりません」

梨香は、あまり落胆した様子を見せなかった。

彼女もある程度は覚悟していたのだろう。いや、必要以上の期待をしていなかった、という方が正確かもしれない。

「蓮佐が、なぜ仕事を休んだのかはご存知なのですか？」

「うん、なんか実家の用とかで……ちよつと言いくそうにしてたからあんまり突っ込んで聞くのも悪いかなと思って、どこに行くのかとか聞けなかったんだけど……」

これが例えば、もう一人の同僚である清水真季だったとしたら、突っ込んで恵美の故郷のこなど尋ねたかもしれない。

だが、梨香にとって必要以上に誰かの出自を知ることとはほとんどタブーに近いものがある。

それは彼女が幼少期に出身地の神戸で経験した大災害とも関係しているのだが、それがなくとも「実家の用」というフレーズは、ある程度の年齢になるとなかなかデリケートな問題を含むことが多い。

「我々も、その程度のことしか知りません。実家に帰るとは聞いていましたが、それがどこなのかということは……正直申し上げて、興味が無かったということもあります」  
極力怪しまれないように、嘘は最小限に。

「鈴乃ちゃんも？」

男と女で、伝えられている内容が違うかもしれないという期待を孕んだ瞬間だが、鈴乃も、  
「すまない……私も、それ以上のことは……」

芦屋と同じことしか言うことができなかった。

「本当のこと」を言っても、梨香には信じられないだろうし、余計に混乱させるだけだ。

「……だよね……ごめんね、ほんと、いきなり来てこんなこと……」

「……大丈夫ですか」

張りつめていた意識が緩んだのが、傍目にも分かった。

そのまま梨香が横倒しになるのではないかと心配した芦屋だが、幸いにして梨香は姿勢を崩しつつも保っていた。

「もう……どうしちゃったんだろ、恵美……」

それは梨香ならずとも恵美に聞<sup>き</sup>ける全員の心中を代弁<sup>だいべん</sup>していて、それ以上誰も二の句が續げず、重苦しい空気が室内を支配<sup>しはい</sup>しはじめる。

「警察とか、相談した方がいいのかなあ」

「ちよ、それは……」

梨香の、日本人としてごくまっとうな意見に思わず反応してしまったのは漆原<sup>しつげん</sup>だった。

警察に相談したところでなんの意味もないことだけは芦屋も鈴乃も分かっているが、条件反射で反応してしまった漆原を、梨香はちらりと見る。

「つて、なるよねー。友達って言ったって私は親戚でもない赤の他人だから警察とかは話が大きくなりそうで抵抗あるんだけど……でも、通報しあぐねてるうちに取り返しつかなかったらつて思うとね……」

だが、幸いにして漆原の反応をごく普通の、警察沙汰<sup>さた</sup>を面倒がる一般市民の反応と勘違いした梨香は肩を落とす。

「梨香殿……」

梨香の様子が痛ましくて、鈴乃は思わず慰める<sup>なぐさ</sup>ように梨香の肩をさすろうとするが、

「でもさ」

梨香の次の一言が、場の空気を一変させた。

「もう一週間も音信不通って、やっぱりおかしいよ。ううん、音信不通だけならまだしも家に

も帰ってないなんて……」

「三は？」

「……へ？」

梨香の思ひもかけない言葉に、高屋と漆原と鈴乃の声が悪い切りカブった。

「鈴木さん？」

「はい？」

「……今、なんとおっしゃいました？」

高屋は目を丸くして尋ねる。

「今って……え？ 家に帰ってないのはおかしいって」

「違う違うその前！」

漆原が突っ込む。

「いつから、連絡無いつて？」

「え？ だから、一週間前から……」

困惑しながら返事する梨香。

だが、その一言こそ、三人に混乱をもたらす。

「待て、ちょっと待ってくれ梨香殿、確かか、それは確かなのか？」

「な、何が？」

「だからエミリ……惠美殿から最後に連絡があつたのが、その」

「先週、金曜の夜だけ……?」

「二週間の金曜の夜?」

今度こそ、魔王城を驚きが支配した。

一週間前の金曜の夜と言えば、惠美が帰ってくるはずだった日から一週間後のことだ。

真央や鈴乃達が惠美の行動を把握できなくなったのは二週間前。

それなのに、それから一週間後になって、連絡があつたとは一体どういふことなのか。

「な、何をそんなに驚いてるの?」

「わ、私達が惠美殿と連絡が取れなくなったのは、二週間前の金曜なんだ。いや、その日に帰ってくると言つたままいなくなったわけだから、実質的には三週間経つ」

「え?」

慌てつつも、鈴乃が代表して話を引き継ぐ。

「その連絡とは電話か? それともメールか?」

メールならば誰かが惠美になりすまして送ることも可能な気がするが、梨香の答えはまたも予想を裏切つた。

「電話だったよ」

「あ、相手は惠美殿で間違いなかったのか?」

「え、えーっと、ちよっと待って」

鈴乃と男二人の突然の気迫に身を引く梨香だったが、持ってきた鞆の中から折り畳み式の携帯電話を取り出すと、着信履歴の画面を呼び出す。

「確かこれが、恵美からの電話だったんだけど……」

だが、梨香が示してみせた画面にはなぜか、「非通知着信」の文字が。

「非通知だったのですか？」

「非通知の着信拒否とかしてないんだ」

「うちの実家の家電がどういうわけか184の非通知設定がデフォルトになってるの。それでたまりに爺ちゃんとかが電話してくるから」

「でも非通知ということはそれが恵美殿を騙った別人とか……」

目の前の証拠と証言を俄かに信じられない鈴乃はうがった見方をするが、梨香は首を横に振って否定する。

「それはない。恵美の声だったし、こっちから何か言う前に恵美だって名乗ったし、話す内容もいつもの恵美と変わらなかつたもん。それでも電話会社勤務ですから、振り込め詐欺的な電話は警戒してるんだから」

そういうのに限って危ないんだよ、という漆原の呟きは、梨香の耳には届かなかった。

「どんな話をしたの？」

「ええっと確か、仕事のシフトの当たり障りない話だった。ああ、そうそう、それで思い出したけど、二週間前の金曜って言ってたっけ？ その日も恵美から電話もらったよ？」

梨香はさらに携帯電話を操作すると、その日の表示を声屋達に向ける。

そしてその着信も、非通知設定だった。

「この日の翌週、つまり先週のシフト、変わってもらえなかったって電話だったの」

「翌週のシフト？ 恵佐はほぼ毎日出勤していたのではないのですか？」

「ううん、今月は、ちょっと少なくしてたみたい。この週は三日くらいしか入ってなかったんじゃないかな。で」

そこで梨香はふと声屋を見て、首を傾げる声屋と目が合うとなぜか慌てたように目をそらした。

「ま、まあその、あの、私も悲しいかな込み入った予定は無かったし、元々入りたかったのにあぶれてた日が多い週だったから願ったりかなったりで交代オッケーしたんだけど」

声屋と鈴乃は顔を見合わせる。

聞いている限り、梨香の話に疑いの余地は無い。

そこまで話して別人ということほさすがにないだろうし、電話の内容にはなんら緊急性は感じられない。

だが、何かが引っかかる。

「本当にそれだけ？ 何か変わったこととか無かったの？」

「ええ？」

津原の質問に、梨香は腕を組んであくまで答へぬ。

「変わったことって言ってもなあ。恵美って昔校から長電話するタイプじゃなかったし、これと言って変なこととは無かった気がするけど」

「話したのは、どっちの電話もバイトのシフトの話だけ？」

「え？ うん、そうだったと思う。後の方の電話は、変わってくれてありがとうみたいな話だったけど」

梨香はそのことに特に疑問を抱いていない様子だが、鈴乃達にとっては問題だ。

「一体どういうつもりで、この状況でそんな『あまりに普段通りの電話』を梨香相手にしたのだらう。」

なんの連絡も無いまま予定を一週間過ぎて、千穂や鈴乃が心配することが分からない恵美ではないはずなのに、その一週間目に梨香に来た連絡は、シフトを変わってもらったことに対する礼だけ。

ともあれ、恵美の行方不明という事態に突然降って湧いた情報だ。

この端緒を逃してはならないと全員が理解していた。

「アルバイトのシフト以外に、何か話さなかったか？ 今日の天気とか、普段と違う挨拶とか、

どことなくだらないことでもいい！」

必死に梨香の記憶を喚起しようとする鈴乃。梨香もその真剣さに押されて素直に記憶を掘り起こそうと頭をひねる。

「ドラマとかでよく聞くけど、まさか自分がそんなことを言われる立場になるとはね」

そんなことをボヤキ、しばし唸りながら顔に手を当てていた梨香だが、

「ん〜、最初の電話を順序立てて話すと、非通知でかかってきて、実家かと思って出たら恵美だったのね。んで、そう、何か早口でまくし立てる感じで、声も遠かった気がしたから、はら、恵美のご両親海外って聞いてたから、なんか通話料のこととか気にしてんのかなって思っ、はら、海外だと無料通話とかバケットフリーとか適用されないからさ」

記憶を探りながらなので、口から出る言葉も途切れ途切れになる梨香。

「なんか、音がフワフワしてる感じだったかな。電波が遠いか、弱いか、だから地下とかからかけてんのかなって思っ」

それは異世界だから遠いだろう。だが梨香の回想を妨げてはいけないので、三人共彼女の顔に注視したまま無言で頷く。

「ああ、そだ、何か後ろででっかい音で放送みたいなのしてた。それで海外なんだろうなって思っただんだ」

「放送？」

「うん、何語かわかんないけど、なんか夏祭りや盆踊りの曲を大音量で流したりするじゃん？ あんな感じの音がしてたなあ。んで、えー、だからシフトを変わってくれて話になって、それで、あー、確か」

と、梨香はやおら靴から手帳を取り出して、ばらばらとめくりはじめた。

「あ、そうだった。確か恵美からお願ひされた日の中で、一日だけどうしようかなって日があったんだ。だから真季ちゃん……あ、同僚の子ね、その子確か暇してたよって、頼んでみたらー？ って言ったら、そういえば、それが唯一変と言えば変だったところかな」

恵美は梨香の提案に、こう答えたという。

「『真季ちゃんには、電話できない』って。昔々とか交換してるはずだからあれ？ って思ったんだけど、私もその子とはメールするけど電話とかしたことなかったし、結局その日も私が出ることにしてそのあとすぐに切れちゃったんだけど……で、先週の電話はシフト変わってくれてありがとうってだけで、そうだ、そんなときも後ろでなんか放送してたなあ。でもやっぱり話題って言ったら仕事のシフトのことしか話してないね」

これはどういうことだろう。

その背後の放送というのが何かは分からないが、例えばそれがエンテ・イスラのどこからの発信かとして、そんな電話を梨香だけにしてくる理由がさっぱり分からない。

まして何かトラブルに巻き込まれているならもっと切迫した何かを訴えても良さそうなのに、

悠長に仕事のシフトの話をするとはどういうことなのだろう。

いや、そもそも、

「……何故、梨香殿なんだ？」

「へ？」

「あ、いや……」

思わず漏れた嘘きを、鈴乃は慌ててごまかす。

梨香には申し訳ないが、危機的状況にあるなら梨香に電話をしたってなんの解決にもならないことは恵美だって分かっているはずだ。

となると、予定外の事態が発生したのは確かだが、それは恵美の身に危険が及ぶような状況ではなく、それでも早期増遠が不可能なため、やむを得ず梨香に勤務を代わってもらった？

「いや、違うな」

シフトの交代を願い出る余裕があったにも関わらず、梨香にしか連絡をしなかったのには、必ず相応の理由があるはずだ。

「つと、すいませんちょつと」

思いがけない情報に張りつめていた空気を高屋が破った。

「おい、津原、窓を閉めろ、雨だ」

「え？ あ、本当だ」

「む、予報は午後からではなかったか。いかん、部屋窓の窓が開けっぱなしだ」

見ると、梨香を迎え入れたときにはまだ陽光が差していたのに、いつの間にか薄い雲が空を覆い、ぼつぼつと小雨を降らしている。

鈴乃は先ほどの法術の爆発の煙を散らすために開けていた窓を閉めに、慌てて自室に戻る。

「あ、芦屋さんそっちに洗濯物……」

梨香は鈴乃の部屋の壁紙から透さけられた洗濯物に、雨が当たってしまっているのを見て思わず立ち上がる。

「し、しまった、これは不調法を……」

芦屋は今の今までそこに洗濯物をひっかけっぱなしだったことを梨香に詫言ひる。

タオルや靴下などに交じって、ゴムが残念になったトランクスなどもおっぴらに出たままで、女性の客を部屋に迎え入れるときに出しっぱなしにして置いて臭いものではない。

「気にしないで、これくらいで頑赤くするようなガキじゃないから。でも……」

梨香の視線から洗濯物を隠そうとする芦屋に梨香は微笑むが、ふと窓の向こうを見て空と同じように顔を曇らせる。

「うわ、でも見て向こうの空。そんなに大雨の予報だったっけ？」

梨香の声に芦屋は両手に洗濯ハンガーを抱えながらも同じ方角の空を見上げる。

「これは、大雨になるのでしょうか。随分とお引止めしてしまいました。鈴本さん傘は」

「一応折り畳み持ってるけど……でも、もうちよつといていい？ お互い恵美のことで知ってることが食い違ってるから話もしたいし、それにあれは……」

目を覆らせば、そう遠くない距離の空から、ゲリラ豪雨の如き雨の瀑布がヴィラ・ローゼ砦まであと少しというところまで迫っていることが分かった。

「ちよつと、折り畳みじゃ、駄目そうだし」

西屋が頷くより前に、遠い空から、雷が鳴る音が聞こえてきて、それが合図だったかのようには空は急速に暗くなっていた。そのときだった。

どたばたと騒がしい音と共に、隣の部屋から慌てた様子の鈴乃が戻ってきた。

その手には携帯電話が握られていて、背中のイルミネーションの具合からいってどうやら着信しているようだ。

「緊急事態だっ！」

「な、何？」

鬼気迫る様子の鈴乃に梨香が目を丸くするが、鈴乃はそれには答えずしばし西屋と漆原を交互に見てから、

「ルシフェルっ！」

梨香の目の前で漆原をそう呼んで、携帯を持っていない方の手で漆原に何かを投げる。

「……これ、この瓶ってお薩摩の……」

それはホーリービタン<sup>フービータン</sup>の小孩<sup>こご</sup>だった。

聖法氣を補充するための、惠美と鈴乃<sup>スズノ</sup>が、日本で超常的な力を維持するための生命線とも言うべき栄養ドリンクだ。

「千穂殿から、SOSだ！」

「は？」

「佐々木さんから？」

「千穂ちゃん？　って、あの千穂ちゃん？」

鈴乃は一刻の猶予<sup>ようよ</sup>も惜しい、という様子で、芦屋と漆原に携帯電話の画面を突きつける。

そこには「非通知」の文字。

芦屋と漆原は顔を見合わせた。

ただのSOSではない。緊急送受を使った、本物の緊急事態だ。

「ルシフェル、今は貴様<sup>あなた</sup>しかいない、すぐ飛ぶぞ。場所は千穂殿の学校だ！」

「佐々木千穂の学校……って、警備北高校、だっけ？」

要するに鈴乃は、漆原を万が一の援軍として連れていこうとしているわけだ。

普段なら、例え千穂の危機だろうと面倒くさがって動きそうにない漆原だが、このときはなぜか顔つきを厳しくして、素直に立ち上がった。

何よりもそのことが、芦屋を驚かせた。

敵である鈴乃の要請で、漆原が千穂のために、雨が降っているのに外出する!?

「お、おい鎌月少し落ち着け、一体何が」

声原は梨香を目の前にしていることを思い出させようとするが、鈴乃は首を振る。

「一刻の猶予も無い。千穂殿の言うことが本当なら、千穂殿だけでなく学校や、周辺にも被害が及ぶ可能性がある。すまない梨香殿、話はまた後で」

鈴乃と漆原は顔を見合わせて頷き合うと、まるでCMのように一気にホーリービタンを飲み干した。

そして。

## ※

「おい、なんだこりや」

真央は試験会場である教室の窓から外を見て顔を曇めた。

時計を見ると、まだ十一時を少し回った程度の時間。雨が降るという予報は見えていたが、こんな大雨の予報ではなかったし、時間ももっと遅かったはずだ。

「薄々分かってたけど……天気予報って雨に関してはあんましアテにならねえな」

自然のことについて気象庁や予報士に文句を言っても仕方のないことではあるが、最盛期は

天候すらある程度操ることができた魔王としては、お天気お姉さん達に若さと美しさ以外のところでも頑張っていた、だいたいものである。

「……………こういうとき、暇だな」

真奥は窓に打ちつける雨粒を見ながらぼやく。

今回の試験は、いかに集中できなかったとはいえ、合格点に達していないなどということは絶対に無いと断言できる手応えだった。

試験終了後は所内の電光掲示板に合格者の受験番号が表示され、その後外の練習用コースで実技の練習があるはずなのだが、

「これちょっとでさねえだろ」

外の雨は、それこそ台風と見まごうばかりの大雨に強風を伴っていた。

真奥が免許を取る理由を考えれば、こういう日こそ安全な教習コースで練習したいところだが、こんな大雨の中で仮にも警察が実技練習をさせてくれるのだろうか。

今のところ中止というアナウンスは無いし、合格者発表の予定時間までまだ一時間ほどある。一時間でこの大雨がやむかどうかは分からないが、八月中はゲリラ豪雨が一時間経てば小雨になるということもあったので、それを見込んでいるのかもしれない。

いずれにしろ、今の時間はただただ試験場内ではんびやりと時間が過ぎるのを待つしかない。

周囲には真奥と同じように暇を持て余している受験者が溢れかえっており、皆それぞれ思い

思いの場所に陣取って、携帯電話を眺めたり本を読んだり音楽を聴いたりしている。

真奥は待合スペースのベンチの端で同じように暇を持て余していた。

しかし真奥の携帯電話は通話とメールだけで十分な、旧世代で省機能な機種。

そうでなくても手持無沙汰になったからと言って携帯電話をいじる習慣は真奥には無かったし、暇を潰せる文庫本などという贅品を購入したことは一度もない。

魔王城にあるのは大半が図書館から借り出した本か、真屋が古本屋で購入した料理本ばかりだ。

「健康的には過ぎてるが、文化的には最低限度振り切ってるよなあ」

日本に来てからはほとんどがむしろに働くだけだったが、そろそろもっと広い視野で日本という国を見つめても良いかもしれない。

先日のマダロナルドバリスタの講習や今回の運転免許の試験は、真奥に取っては一つ意識を触発される事態だった。

日本では、学ぼうと思えば学べないことは何も無い。

もちろん学府で体系的な学問を修めるには先立つものが必要だが、今回の免許試験の受講費用のように、貧しいなりに特定の仁義を通せば援助してくれる公的なシステムがあることはすでに知っていた。

そしてそれは、とても楽しいことのような気がする。

「……帰りに、本屋でも寄つてみるか。小遣い貯まつてるし」

真奥は、出勤する度に本屋から手渡される「食事代」三〇〇円を、使わずに済む日は必ずへそくりとして貯金していた。

もちろんそれ以外にも自分で自由にできる金はちゃんと給料から取り分として手にしているのだが、それらは万が一のときのための保険のようなものだ。真奥は思っている。

ともあれ運転免許証が手に入れば、日本でできることがまた一つ広がる。

公共交通機関を使わずに動ける行動半径が広がる、というのは、革命的なことだ。

もちろん免許を手に入れたからといって自分のスターターを手に入れなければどうしようもないのだが、安いスターターは賛否を言わなければそう時をおかずに購入できると真奥は踏んでいる。

「夢が広がるな」

外の天気と真逆の明るい笑顔で、皮算用な夢を思い描く真奥の顔に、影が差した。

「よー！ マオウ！」

「……………ああ」

顔を上げるまでもない。サトウツバサだ。

彼らも試験を受けに来ているのだから、試験場建物内で再び遭遇してもなんの不思議も無い。顔を上げると、天井の蛍光灯を背後に立つ、キヤスケット帽の女と、その背後には彼女の父

親、サトウヒロシ。

「……試験はどうだった？」

父親のヒロシはともかくツバサはそもそも受けているのかどうか分からないが、一応そう尋ねると、後ろのヒロシがその体面と雰囲気（たいめんきふ）にふさわしい重々しいため息をつく。

「ダメ、かもしれナイ」

「や、ダメっしょー！ アレはー！」

「問題文が……半分も読めなかッタ」

「あんた……受験料（けんしゅりょう）勿体ないからしばらくやめた方がいいんじゃないか？」

ヒロシのあんまりな強白に、真実としてもそう忠告せざるを得ない。

適当なツバサが言うからあまり信用はできないが、本当に今回の試験が十回目としたら、既に十回分受験料を払っている計算になる。

原付はもちろん、普通自動車免許なら馬鹿にならない金額だ。

「サトウさん、あんた自分の国の運転免許持っていないのか。国際運転免許とかあったら」

「ない」

「……………あっそう」

もう少しこう、会話の羅網（らもう）を考慮した受け答えをしてもらいたいものである。

「第一オトーさんの故郷に車って無いしネー」

「ん？」

「ツバサ」

「あ、ゴメンゴメンめんどめんど」

真奥は一瞬首を傾げるが、ヒロシがツバサをどうという理由が奢め、ツバサが全く反省してないのがありありと見える会話を見せつけられ、即座にどうしても良くなる。

「でもサー、マオウが言うのも分かるヨー。オカネ勿体ないヨ」

「ま、まあ、サトウさんをバカにするわけじゃないが……」

「だから横で私が問題文読んであげルって言ってるのニ」

堂々たる宣言に、真奥は苦笑する。

「なんで親父さんが読めなくてお前が日本語の文章読めるのかは知らないが、試験は一人で受けるもんだろ。他人が読んだらカンニングで、最悪逮捕されんぞ」

「カンニング？　ワルガシコイって意味だっけ？」

「……逆にそっちの意味が出てくるのはすげえけどさ」

「そんじやもー、コノサイ免許なんか取らなくてイーんじゃない？」

身もふたもないように聞こえるが、無謀な洗脳で金をドブに捨てるよりは、今は試験から身を引くという選択は、真奥も頷ける。

「まあ、あれば便利だけど今のままじゃ金無駄だしな」

「ソーソー、オトーさん、もうお金勿体ないから免許取らずに運転しちゃエバががが」  
どこまで本気なのか分からないが、仮にも警察内でその発言は危険すぎる。

真奥は、自分のことでもないのに、あっけらかんと大声で無茶苦茶なことを言い出すツバサの口を慌てて塞ぐ。

幸いにして真奥の隣は壁で、反対側にいる男性は若干音漏れするイヤホンで音楽に聞き入っていた。

「もがき」

「お前なあ、分かってんのか、ここ一応警察なんだぞ？」

「……」

真奥はツバサから手を放すと、目だけで周囲を見回してから小声で注意する。

「とにかく他人が問題文を読んだりなんかできねえし、バカなこと言ったら最悪試験受けさせてもらえなくなるかもしれないぞ。気をつけろよ」

「そっかし。でも、バレなきゃだいじょうぶががが」

「だからそういうこと言ったらダメなんだって」

とことん空気を読まずにNGワードを大声で連発するツバサの口を再び塞ぐ真奥。

「……ツバサ、私もそう思うゾ」

「あんたはもうちよっとこう、娘の日本語をなんとかしろよっ！」

冷静にツバサに突っ込みを入れるヒロシにも訝異する真奥だが、

「むぐむぐ」

理解したのかどうなのか、ツバサがばたばたと手を振るので、真奥も手を放す。

ツバサのあまりの物言いや慣れ慣れしい態度に思わず口を塞ぐなどという強硬手段に出てしまったが、考えてみれば初対面の女性に対してセクハラもいいところである。

千穂や恵美がこの場になくて良かった、いつものクセで反発的に思い、

「……」

真奥は得体の知れない露を胸の中に感じ、そのままベンチに座り込みようとして、

「……おい」

ツバサが自分の口を塞いでいた真奥の手首を掴み、座ろうとしていた真奥の腰が途中で止まる。

「すんすん」

まただ。何故ツバサは真奥の手の匂いを嗅ぐのだろうか。

「……やっぱり、芋の奥に……すんすん」

「おい、ちょっと、何すん……」

「べろ」

「うひいっ!?」

今度は、さすがに隣の音楽青年も肩を壁めて真奥を見上げた。

しかし、真奥が思わず妙な声で叫んでしまったのも仕方がない。

掌を、舐められたのだ。

「な、な、な、何すんだおいつ？」

真奥は日本に来て初めて、倫理的に有り得ない事態に直面したという意味で羞恥心で赤面してしまう。

「お、お、おま、今」

匂いを嗅がれ、その上舐められた手を意味なく体の後ろに庇い目を白黒させながら抗議する真奥だったが、

「んー……」

キヤスケット帽を自襟に被ったまましばし首を傾げていたツバサはまるで意に解さず、しきりに首をひねっている。

そして、やがて意を決したように頷いた。

「オトーさん、この人、やつばそうカモ」

「む？」

突然ヒロシに話を振って、ヒロシも驚いたように目を見張る。

「オトーさん、帽子取ってイイ？」

「……自立たないようにナ」

既に必要以上に悪目立ちしていると思うが、とロシの許可を受けたツバサは、一つ顔くともむろに被っていたキヤスケット帽の鈎に手をかけ、そして、

「……………何だ」

その下から現れた顔に、真奥の息が止まりそうになる。

いや、顔だけではない。

キヤスケット帽の内側にしまわれていた髪にも、やや眼そうに真奥を見つめる瞳にも、何もかもに度肝を抜かれてしまった。

折角美しい造作の顔立ちなのに、物憂げというよりは何も考えていなさそうな表情で若干損をしている気がする。

年の頃は、恐らく千穂より少し若いだろう。

だが、問題はそんなことではなかった。

ツバサの瞳の色は、紫色だった。

顔の横だけ長く、後ろは短く切り揃えられた髪の色は、薄暗い蛍光灯の下でも明るく反射する目の覚めるような銀色。

そして何よりも、

「……お前、お前、まさか、その、髪……」



「ん」

ツバサは顔の横の髪を指先でくると回す。

真奥が釘付けになったその前髪に、一房の、紫。

真奥のうめくような声に、ツバサはやはり何も考えていなさそうな笑顔で頷いた。

「匂いでやっぱりそうじゃナイかと思っタ」

「匂い……って」

真奥は幾度となく、ツバサに手の匂いを嗅がれていたことを思い出す。

「君が何者か分からナイけど、私の鼻は確かだッタ」

ツバサは鼻の下を指で得意げにこすりながら、にやりと笑う。

そして、混乱する真奥がますます混乱するようないことを言い出した。

「マオウ、君はネーサマを、アラス・ラムスを知ってるんだネ？」

「……………ん？」

予想外の事態にうろたえたことは確かだが、そんな中でも、今とりわけ何か重要なことを言われた気がする。

「ネーサマ？」

「ん」

「って？」

「ネーサマ。アラス・ラムスのこと」

「……んん？」

今、自分は目の前の二人に対して言うべきことがある。

絶対ある。

その髪の色はなんだとか、そもそもお前達は本当に親子なのかとか、お前はそもそも日本どこか地球人ではないだろとか、その外見でアラス・ラムスの名を知っているということはお前はセフィラから生まれたのかとか、俺の身の回りの一体誰と関係してるんだとか、そもそも目の前の二人の日本での過ごし方に関して徹底的に問い詰めた末に、氏名住所電話番号に加えてなんらかの身分証明書の通し番号まで控えておくべきだろう。

が、そんな確認すべき諸々すべてをカッ飛ばして、そのことに触れずにはおれなかった。

「ネーサマって……姉、ってことか？」

「ん、マオウの言うアラス・ラムスと私の知ってるアラス・ラムスが同じなら、そのアラス・ラムスは、私のネーサマ」

アラス・ラムスなんて面倒な名詞を持つてる存在がそこごろいてたまるものか。

もうツバサがアラス・ラムスの名を知っていることに關しては突っ込まない。必要ない。

だが、やはり解せない。

「ネーサマってのは、つまり、その、お前にとって『姉』にあたる存在を敬意を持って呼んで

るのか？」

「アネニアタルゾンザイラケイイラ……何？」

「……おい」

と、そのとき、おもむろにヒロシ、いや、今となってはその名が本当なのかすら怪しいが、とにかく暫定ヒロシが真奥の肩を重みのある手でずっしりと叩いた。

「多分……キミの想像通りダト思ワ」

「何を肯定してくれてんのかもうちよつと具体的に頼む！」

口に出したのはツバサが「ネーサマ」という単語をどういう意味で使っているかだけだが、一応真奥の中には、それこそ地球とエンテ・イスラのいっそも創生神話にまつわる謎に至るまで疑問がぐるぐる渦巻いている。

「……ネーサマ？」

「あんたらと話してると疲れるな」

真奥は久々に暴れ出したくなってきた。

「よし、聞き方を変えるぞー 親父さんあんたちよつと黙っててくれ。おいツバサ」

「ん？」

真奥は、最初に抱いた疑問を解決すべく、言葉を発した。

「……お前は、アラス・ラムスの『妹』なのか？」

「おう！」

明るく肯定された。

「……なんでだ？」

ツバサの外見的特徴、銀色の髪に一房だけ紫色の前髪は、これはアラス・ラムスやイルオーンと同じ、セフィラから生まれた者達の特徴だ。

単なるファッシュョンという可能性は、ツバサの顔から「アラス・ラムス」という単語が出てきたことと考えないでも良いだろう。

だが……。

「ヤダナ、私が美人だからって、ジロジロ見んなヨッ！」

ツバサの顔から眉元までざっと眺めた真奥の肩を、なぜか嬉しそうに叩くツバサ。

「……殴りてえ」

男女平等、という色々な意味で都合良く使われる日本語が脳裏をよぎるが、とりあえずぐつと怒りをこらえる。

ツバサの姿は、先ほどの印象通り、千穂より少し若い、あるいは幼い。

だが言い方を換えれば、少なくとも中高生くらいの印象を抱かせる体つきではある。

それなのに、彼女が「ネーサマ」と呼ぶアラス・ラムスは、言わずもがなの赤子の姿だ。

もちろんアラス・ラムスも、そしておそらくツバサも、単なる人間ではないのでその成長を

人間と同様に捉えることはできない。

今はまだ真奥の知り得ない理由で、成長の速度に差が出てしまったのだろうが、それにしたつて差がつきすぎではないだろうか。

ただ、この二人がエンテ・イスラの関係者であることはもう疑いの余地は無い。

真奥は周囲を見回すと、ヒロシの方にこっそり耳打ちする。

「あんたら、エンテ・イスラの人間なんだな？」

「!!」

するとなぜか、ヒロシは驚いたように目を見張り、

「……何故それヲ？ キミは、一体……？」

「こんな危なっかしい奴連れて、今までの話を理解してなかったのかあんたはっ!!」

本気で驚いているらしいヒロシにいい加減突っ込み疲れた真奥は、折角取ったベンチから立ち上がると手拍きして稼働を促す。

周囲の人間に聞かれて困る話ではないが、聞かれて変な人達だと思われても困るので（もう手遅れかもしれないが）、真奥達は試験場の正面玄関の、その日の受付は終了したので既にシヤッターが下ろされている試験受付窓口の前に陣取った。

人の出入りは多い場所だが、その分足を止めて三人の話を耳をそばだてているような者がいたらすぐに分かる場所だ。

正面玄関の反対側には免許を更新するための窓口が聞いていた。

「さて、一つあんたらの本当の名前を聞かせてもらおうか」

「……」

ツバサとヒロシは軽く顔を見合わせる。

真奥が何者かを測り兼ねているのだろうか。

「今更、こんなことを確認するのも変かもしれないが……」

唐突に、ヒロシが口調を変えた。

いや、言語を変えた。

「君が我々の敵でないという確証が無い。我々がエンテ・イスラという、世界すら遡る場所から来たということを知っている君こそ、一体何者だ？」

先ほどの森ばけたキヤラから一変、ヒロシの目つきと言葉が一気に力強くなる。

彼自身からは聖法<sup>マジック</sup>気などの特殊な力は一切感じられないが、それでもその目と言葉の力は、単なる中年男ではないことを物語っていた。

「……魔<sup>マジック</sup>ウエズ語か。西大陸東部の言葉だな」

真奥も、応じて言葉を変える。

征服できなかった西大陸西部の神聖ウエズ語を除き、話すだけなら魔力が無くてもエンテ・イスラ全土の言語を操<sup>ささ</sup>ることができる。

「（悪いが、質問をしているのはこっちだ。今まで、エンテ・イスラからやってきた奴らや関係者は全員把握しているつもりだったからな。あんたらがどういう惑の者なのか気になるし、あんたらはある意味、初めて現れた手がかりだ）」

「（手がかりう）」

真奥は頷くと、ツバサに視線を移す。

「（さっきはビツタリしすぎて確認しそこねたが、きちんと聞いとく。お前、イエソドの矢片から生まれたのか？）」

本来「ネーサマ」がどうこうよりまずそこを確認しなければならなかった気もする。

真奥は唐突に現れたエンテ・イスラへの全く想像もしない手がかりに動悸をおさえられないが、ツバサの反応は至って軽かった。

「そだよー」

しかも空気を読まずに日本語のままだ。

「オトーさん、もうブツチャケちやってイー？」

「（……）」

ヒロシはまだ真奥を警戒するように沈黙していたが、ツバサの方はそれを肯定と受け取ったのか、元々ヒロシの意志を聞く必要など無かったかのようにそのまま話し続ける。

「ダイジョウブだよオトーさん。マオウは『テンシ』じゃナイ。それくらいは私にも分かる」

安心させるようにヒロシの腕に軽く触れると、ツバサは紫色の大きな瞳を真つ直ぐ真奥に向けて、言った。

「私の名前は、アシエス・アーラ。ツバサってのは嘘の名前」  
アシエス・アーラ。

その名を、真奥は全身に酸寒を行きわたらせるように、深呼吸して脳に刻み込む。

「アーラ……それで、ツバサか」

「うん！ ツバサって、響きイイよね！」

真奥はただ、頷いた。

「……つまりだ、あんたとアシエスは、血の繋がった親子ではないってことだな。サトウってのも当然偽名だろう？」

ここまで来たら、当然サトウヒロシが本名であるはずがない。

魔王サタンが真奥・真天であるように、彼にもまた、本当の名があるはずだ。

「サトウの姓は……日本に来て間もないころに出会った男にあやかって、名乗った」

「(そいつは普通の日本人なんだろうな。正体をバラしたりは……)」

暫定ヒロシは、首を横に振った。

「だが、明るく強く、日本のことを何一つ知らない私にも優しい男だった。何度転んでも、自分の夢の再興を目指して、どんな仕事でも請け負って毎日楽しそうに働いていた」

苦勞をしたのか、とは聞かない。

その直接的な原因を作ったのが自分だと分らないほど、真奥は悪かではない。

「（お前ら天文台員から来つてきたが、ずっと二層に住んでたのか？）」

「（いや、最初はシンジュクに近いところだったが、ミタカに移ったのは、ツバサ……アシエスの希望を聞いて、サトウが紹介してくれたんだ）」

真奥は思わず唖る。

これは、いつ断れ違つていても不思議ではなかった。

いや、もしかしたらこの二人は、日本で真奥や東美が引き起こした数々の事象をある程度キヤツチしているのではないかとすら思えてくる。

「（……なあ、俺はあんたの本当の名は知らないが、あんたが知ってるかもしれない奴の名を知ってるかもしれない）」

「マワリタドイねー」

ツバサ、いや、アシエス・アールはどこまでもあつけらんを地で行く態度を崩さない。

このとき、真奥はふとアシエスの違和感に気づく。

「（お前もしかして、徳ワエズ語喋れないのか？）」

「うん、でも、理解はできるヨー。ここで、こウ」

アシエスは自分のこめかみと真奥の顔とを交互に指差す。

「残念残念か。で、逆にあんたは使えないのか」

「私は残念ながら法術の知識も才能もからきしだ。だから、苦勞している」  
あのかこもない上に空気の読めない日本語はそういうことだったのか。

「それで、私が知っているかもしれない君の知り合い、とは……」

「ああ……」

真央は、小さく頷くと、鋭い目でヒロシを改めて見る。

「だが、この名を聞いた以上、あんたは可能な限り俺に協力しろ。俺もできる限り、あんたとアシエスに協力してやる。俺の前から逃げるなよ」  
するとヒロシは少しムッとしたように眉を蹙めた。

「私も子供ではない。日本で使ったエズ語を喋った時点で、それくらいの覚悟はできている。君こそ、そこまで言うからには私に敵対するようなことはするな。法術はからきしだが、腕に覚えがないわけではない」

なぜかその瞬間、アシエスに視線が飛んだのを真央は見逃さなかったが、あえて触れはしなかった。

「言ったな。だが、ビビって腰抜けすなよ」

真央はにやりと笑うと、意を決して言った。

「俺と俺の仲間達は、エミリア・ユスナイーナを探している。エミリアは最近まで日本にい

だが、数週間前にエンテ・イスラに帰って以降連絡が取れない。あんな何か……」

「エミリアっ？」

反応は劇的だった。

鋭い目つきで真奥を警戒していたヒロシの表情は、あっという間に崩れてしまう。

エミリア。

その名を聞いた瞬間、まさしく頭に血が上ったかのように表情が一変する。

ヒロシはその大きな力強い手で真奥の両肩をがっしりと掴むと、過呼吸一歩手前のような落ち着かない息遣いで真奥に顔を寄せる。

「（え、エミリアを知っているのか？ き、君はエミリアがどこにいるのか知っているのか！！）、日本にいるとはどういうことだ！！」

野太い声はよく響く。

さすがに通りすぎる人々が足を止めて怪訝そうにこちらを見るが、ヒロシにはそれに気づく余裕は無い。

「（落ち着け、デカイ声出すな！ 注目浴びてる！）」

「（これが、お、落ち着いていられるか！ どことだ！ エミリアは、どこにいるんだ！！）」

「だから落ち着けて言ってるんだろ！」

真奥はとっさに日本語に戻ると、強引にヒロシの手を振り切る。

「(おいっ!)」

「(……よく聞け。確かにエミリアは日本にいた。だが、数週間前に事情があつて一度エンチ・イスラに帰つたんだ)」

「(なん……だって)」

「(だが、本人が日本に戻ると言つた日からもう二週間過ぎてんだ。俺達も事情があつて、エンチ・イスラまで探しに行くことができない。だから、俺達にとってあんたらは、まさしく降つて湧いた手がかりなんだ)」

「(……)」

「降つて湧いたとはシツレイな!」

アシエスは放置して、ヒロシは思わずシャッターの閉じた受付によりよろと背中を預けると、そのままするすると崩れ落ちそうになる。

「おいっ、これ以上面倒事増やすな!」

感情に任せて行動されて職員に目をつけられても困るので、真美は慌ててその腕を支えた。

「(エミリア……エミリアが……)」

「(……やっぱり、真美の関係者が……まあ、そんなことだろうとは思つてたが)」

アシエスがアラス・ラムスと等質の存在なら、当然そこにはイエソドの欠片が介在しており、真美の聖剣の核と関係ないはずがない。

だが、一方でこの反応は、この一年ちよつとの間の真奥や恵美の動向を知っている人間のものではない。

それはアシエスにしても同様だろう。

そして真奥は、ここ数か月の自分と恵美を、魔王と勇者を取り巻くありとあらゆる状況、情報、脳をフル回転させて想起し、そして一つの結論に至る。

「あんたもしかして、恵美……エミリアの……」

「……エミリアは……エミリアは、私の、姉だ……大切な」

「……そっか」

「オトーさんの、ほんとの名前、ノルド。ノルド・ゆす……ゆす、なんだッケ？」

横から会話に割り込むアシエスの言葉の中から、必要な情報だけを抜き出す真奥。

恵美の父親。ノルド・ユステイナー。

そして、セフィラ・イエソドの子、アシエス・アール。

まさしく横から牡丹餅ひょうたんから駒の状況だ。

絶対に、この二人を手放してはならない。

真奥がそう思った、そのときだった。

「ん？」

ポケットの中で、携帯電話が鳴っている。

この時間、電話をかけてくるような相手に心当たりはないが、どうせ酒屋あたりが試験の結果が気になって津原のパソコンから電話をかけてきているのだろう。

今はそんなことより目の前の二人の方がよほど大事だし、放っておこうと決めて改めて目の前の男を問い詰めようとしたときだった。

「早く出るバカ魔王っ!!」

「おわっ!!」

「ひやあっ!!」

唐突に頭の中に、まさしく巨大ハンマーで殴られたかのような怒号が鳴り響く。

一瞬視界が明滅しかけたが、それよりも先に、真奥はなんとかポケットから携帯電話を取り出した。

そこには、未通知の文字。

そして電話を取ってもいないのに、また怒号が響いた。

「魔王! 通じているのは分かってる! さっさと答えろ!!」

「な、な、鈴乃っ!! お前、なんだよいきなり」

間違いない、鈴乃の声。しかもこれは、電話を介した概念空間だ。

「貴様が電話に出ないからだろうが! 緊急事態だ! すぐ答えて戻れ!」

「はあ? 戻れっってお前……」

真奥は思わず目の前の二人を交互に見る。

ヒロシ改めノルドはうつろな目で腰を抜かしているし、アシエスはなぜか目を真ん丸に見開いて、何かに驚いたようにこちらを見ている。

「こっちは今取り込み中だ。それにまだ免許もらってないし、今すぐ帰れつつあったって……」  
真奥は特に必要は無いのだが、怪しまれないために非通知の電話を耳に当てながらそう抗弁する。

しかし、鈴乃は全くそれを聞き入れなかった。  
それだけの、理由があった。

「千穂殿から、SOSだ！」

「なんだって？」

「魔王、そちらは雨が降っているか？」

「あ、ああ、なんか台風みたいにすげえ雨が……」

「中心は、笹塚だ！ 突然、東京に台風クラスの低気圧が出現して暴風雨をまき散らしている！ その中心は、笹塚の……千穂殿の学校だ！」

「な……んだそりゃあっ？」

無茶苦茶だ。何を言っているのか分からない。

だが、鈴乃がそんな嘘をつく理由はどこにも無い。

そして鈴乃の言葉を証明するように、突然試験場内にアナウンスが鳴り響く。

「えー、本日試験場ご利用の皆様にお知らせいたします。間もなく原動機付自転車免許学科試験の試験結果を発表いたしますが、悪天候のため、実技講習の開始時間を遅らせてます。詳しくは、試験窓口の係員にお尋ねください……なお、普通自動車免許再取得の方も……」

「台風だって……んなアホな」

「天使か悪魔か人間かは分からんが、誰かが今日の元々の悪天候に乗じて大規模な術式を展開している！ 早く戻ってこい！ 私とルシフェルだけでは、どれほど持つか分からんからな！ 千穂殿の学校だぞ！」

それだけ言うと、鈴乃は一方的に概念迷宮を遮断した。

「い、一体何がどうなってんだ？ そ、それに今すぐ帰れつつあって、こ、こいつらもどうすりゃいいんだよ！」

真奥は頭を抱える。

千穂が危険、と言うからには、試験の結果と天秤にかけることなど考えられない。

だが、今すぐ試験場を飛び出しても、管線に帰るにはバスと電車を乗り継がねばならず、軽く一時間はかかるだろう。

タクシーを使ったとしても、この大嵐でスピードを出してくれるとは思えない。

それに、折角偶然の出会いで見つけた手がかりを二人も、この場に残していくことなどでき

はしない。

ファーファレルロに返した魔力、もうちょつと取つとくんだった！ とみみっちい後悔をひと月夜くたつた今ごろ考えたつて意味は無い。

あのときは、まさか最大戦力の恵美がいなくなることなど考えもしなかったのだから。

「……タクシーしかねえか！」

この二人を引き連れて世塚に戻るには、他に方法が無い。料金に聞しては死ぬほど痛い、タレジットカードでなんとかなるだろう。

「あのさ、マオウ」

「あひ」

「もしかして、何か急いでる？」

と、アシエスが恐る恐る声をかけてくる。

「急いでるが、どうしていいのかわからねえから困ってる！」

「今の女の人の声、概念違えたネ？」

真美は目を見開いた。

「お前、今の聞こえていたのか？」

「ウン、イチオー」

一応もクソもないが、そういえば鈴乃の最初の怒号で、アシエスも一緒に飛び上っていた。

「どうしたイノ？ 私達も今マオウにいなくなれるのはチョット困る」

「そりゃこっちだって一緒だ！ できればお前らと一緒に、今すぐ禁座に帰りたい！」

「ササヅカ？」

「俺んちがある町！ ああこそ！ 飛んでいけば最短距離で行けるのに！」

直線距離がどれほどかは分からないから適当に言っているが、実際真実が魔王に戻って全力で飛翔すればさほどかからず禁座に戻るだろうし、本人は慌てているのでおれれているが、そもそも魔王サタンはグート術が盛える。

「三人で、飛べばいいノ？」

「それができねえから困ってんだろ！」

「ワタシと、マオウと、オトリさんだよネ？」

「そうだよ！ ああ、こんなこと言ってる場合じゃねえ、タタシ！ 捕まえねえと……おいあんな、いつまでヘタってんだ立ってくれ！ 俺達今回も免許はお預けだ！」

真実がいまだにへたり込んでいるヒノルドを引き起こそうとすると、

「分かった。マオウ、方向だけ教エテ」

アシエスが、なんでもないように言って、そして、

「はい！」

試験場内で、いきなり、浮いた。物理的に。

「つて、おいしいいい？」

真奥は慌ててそれを止めようとするが、それよりも先に、

「マオウ、オトーさん、はい！」

アシエスは二人を見ただけで、書屋の悪魔型のように念動力で浮かべて見せたではないか。

「あ、アシエス！ 目立ってる！ 超目立ってる！」

三人の人間が、運転試験場内で浮いている。

零重力的にも、物理的にも。

ざわめく周囲をよそに、アシエスは素知らぬ顔で、浮いたまま真奥とノルドを念動力で引つ

張って、大雨の吹き荒れる外へと出ると、重い雨雲が支配する空へと急上昇した。

「おわあああああああ！」

そのあまりの速度に真奥は思わず悲鳴を上げるが、アシエスはお構いなしだ。

真奥とノルドを持ち上げるのに何らかの念動力を使っているのは間違いないが、結界の類い

を張っているわけではないらしく、真奥もノルドもあつという間に雨粒で全身びしょ濡れになる。

「マオウ、どっち？」

「どっち！ つて、まだどっちがどっちか……」

「さっきのおネーさん、天候の術式って言ってたネー じゃあ、きつとあっちだ!!」

「おいしいいいいいいい!!」

真奥が周辺地理を把握するよりも早く、アシエスは真奥とヒロシの体勢すら立て直さず、真直ぐ東の空目指して飛空しはじめた。

「急ぐんだコネ！ 飛ばすヨ！」

「ま、ま、待て！ ちょっと体起こし……ぐええええええええええ!!」

「いっくよおおおおおおお!!」

「……………」

真奥の悲鳴と、ノルドの古なきうめきが尾を引く中、三人は府中運動試験場から、真直ぐ東の空へ向けて飛び去ったのだった。



おはようございます

芦屋は追い詰められていた。

魔王城のカジュアルコタツで差し向かいに正座をしたまま、こちらをひたと見つめてくる鈴木梨香の視線が、聖剣の切っ先のように痛い。

いや、実際に芦屋は恵美の進化聖剣・片翼と直接はやり合ったことはないのだが、むしろ聖剣の切っ先が向けられている方が、力で振り払える分いくらか楽だったかもしれない。

「芦屋さん、どうしてさっきからずっと黙ってるの」

「あの……その」

命じられたわけでもないのに同じく正座の芦屋は、知将の二つ名も形なしのしどろもどろなありさまだ。

魔王城の中には芦屋と梨香だけ。裏庭に面した窓の縁と畳が少しだけ濡れており、梨香の視線はその窓と芦屋とを往復している。

そしてカジュアルコタツの上には、空っぽの茶色い小瓶が二つ。

「私は教えてって言ってるの」

「はあ、その、おっしゃりたいことはよく分かるのですが……」

「前々から色々不思議だなとは思ってたけど、まだ突っ込んだこと聞けるほどし、し、疑しくなれてないなと思ってたから」

なぜか一瞬だけ舌をもつれさせた梨香だが、すぐに口調は鋭さを取り戻す。

「テレビ買ったときも、そのうち開けばいいやくらいには思ってたんだけどさ」

「は、はあ」

外は雨で、気温も大したことがないのに、背中が汗でじっとりしているのが分かる。

「やっぱりこれは、正直誤が分からない」

「で、しょうねえ……」

洗濯物より生乾きな笑いを浮かべるしかない芦屋だが、梨香は追及の手を緩めなかった。

「で、もう一度聞くんだけど」

「は、はい」

「鈴乃ちゃんと漆原さんはどこに行ったのー」

もはや疑問形ではなく、詰問だ。

「それも、こんな雨の中ー」

そして梨香は窓を指差す。

「窓から外に飛び出してー」

「うう……」

芦屋ははとはと弱り切ってしまった。

雨が降ってきて、自室の窓を閉めに行った鈴乃が魔土城に戻ってきたのと同時に、鈴乃にかかってきた千穂からの電話。

千穂なら最初に真実に助けを求めそうな気もするが、概念送受を扱いはじめたばかりの彼女には管轄から調査というのとはなかなか難しい距離だろう。

だが何かが起こるにしても、このタイミングでなくても良いだろうに。

概念送受を会得した千穂がSOSを出してくるのは、このひと月編の関で初めてのことだ。恵美が行方不明になって二週間、確かなんらかの非常事態が発生するのは皆ある程度覚悟していたし、一秒が惜しいかもしれない事態なのも分かる。

だが、鈴乃も漆原も、栄養ドリンクを一口で飲み干すと、それを魔王城の畳の上に躊躇なく放り出し、

「行くぞ、しっかりついてこい」

「はいよ」

梨香が目の前にいるのに、窓を開けるとはどういう料理なのか。

「ま、待て二人共！ 一度冷静に……」

「ちよ、二人共何してんの！ あぶな……っけ」

高屋と梨香は、全く違う理由で二人の暴挙を止めようとする。

だが、梨香の目の前で暴風雨と呼ぶべき悪天候に躊躇なく二階の窓から飛び出した鈴乃と漆原は、

「え」

二階の窓から裏庭に落下したりはせず、そのまま水平に飛翔して、道路を挟んで向かいの家の屋根の上に下り立った。

「え？ え？ え？」

目を見開き口を閉じることもしない梨香。

その後ろで高屋は頭を抱えてしまう。

向かいの家の屋根の上で、恐らくは方向を確認しているのだらう。

鈴乃がある一方を指し示すと、二人は普通の人間にはあり得ない跳躍力で、屋根伝いに雨の向こうに姿を消した。

「つつ」

「つ」

そのあと高屋を振り返った梨香の形相は、まさしくこの世のものとも思えぬものだった。

梨香にはなんだかんだと世話になっているし、人間ではあるが千鶴の次くらいに好感度が高かっただけに、あの瞬間の梨香の、驚愕と疑念とその解消を求める追及の意志がこもった眼差しは、ちよっとしたトラウマになりそうだ。

で、鈴乃達が飛び去って十五分ほど、高屋は梨香と差し向かいで正座させられる羽目に陥っているのだ。

「……」

「ん？」

梨香は段々目が据わってきている。どうやら黙秘権も弁護士を呼ぶ権利も認めてもらえようにはない。

事ここに至って梨香がなんの説明も無しに納得するはずがないのは芦屋も分かっている。

だが、ただ黙っているのではなく、正直梨香相手に何をどこまで話せばいいのか芦屋には判断がつかないのだ。

そもそも梨香は魔王城領の人間ではなく恵美の友人で、恵美が自分の正体を明かしていないのはこれまでの付き合いで分かっている。

となれば、芦屋の判断で恵美のことまでバラしてしまうと、もし恵美が帰ってきた場合、どんな面倒事に発展するか想像もつかない。

かといって、芦屋には梨香の記憶を操作するような魔力は全く残っていないし、謙原のように得体のしれないところから魔力なのか聖法気なのかも分からない力を補充することもできない。

恵美の行方について情報交換をしていたはずなのに、どうしてこうなってしまったのか。

自分はこの間にも無能だったのだろうか、と、思考の隅で泣き言を言いたくなる。

「じ、実は……」

「はい？」



「か、鎌月も、うちの凄原もですわ」

「うん」

「この、栄養ドリンクの、モニターを、その、しております」

「で？」

「その、効果、と言いますか」

「そんなファイト一発ねーしっ!!」

梨香が拳でコタツを殴り、空の小鞆が小さく揺れ、芦屋はびくりと身を震ませる。

「タリコのビスコだってそんな大風暴敷広げんわ!」

例えがよく分らないが、梨香は立ち上がると窓に飛びつく。

「ここから! お向かいの家まで、どう見たって十メートル以上! 助走も無しに飛べるとか

あり得んでしょう! あり得るならオリンピックタ出ろ!」

「お、おっしやる通り……」

「……あのね、芦屋さん、私は別にね、凄原さんや鈴乃さんが、宇宙人とか超能力者だとか言いたいんじゃないのよ」

結構それに近い概念の存在だとは思いますが、それを言っても仕方がないのでただ黙る芦屋。

「でもハリウッドのワイヤーアクションだって、もうちょっとジタバタしながら飛ぶよこの距離! それを生身でっておかしいでしょ! なんなの、凄原さんと鈴乃ちゃんてなんなの?」

青屋は、この一瞬、かすかな希望を見出す。

梨香はどうやら鈴乃と漆原の超人的な身体能力にのみ言及している。時間稼ぎにしかならないが、ここはあの二人に責任を押しつける形でシラを切り通せば良いのではないかと。

そんな希望的観測に一瞬振りつこうとするが、

「それに青屋さん驚くよりも、やめろって感じだったよね？ 初めてじゃないんでしょ！」

あーゆーのを見るのー」

日本の女性は視野が広く観察眼が鋭い！

こんな状況にも関わらず、青屋は心底感心する。

そして、再び追いつめられる。

「……正直にお話して、鈴本さんに信じていただけたかどうか……」

ため息と共に、青屋は観念した。

自分の正体に関して、さほど積極的に隠蔽工作を續けていたわけではないし、大体この場合、

失策の責任は鈴乃にある。

この上青屋が問いつめられてすべてを白状したとして、誰に責められよう。

実際には結構責められるのが世の残酷な真実なのだが、とにかく

「……私は、自分の目で見たものを信じられないほどバカじゃないよ」

青屋の諦めを感じ取ったか、梨香も矛を収めて再び卓につく。

「それに……ある程度、覚悟はしてる」

「覚悟？」

「うん。前に話してくれた、真美さんと会社やってたって話、嘘じゃないけど、本当でもないんでしょ？」

「……何故、そう思われるのですか？」

真屋は意外そうに目を細めて尋ねると、梨香も首を傾げる。

「さあ。でもこの前、一緒にテレビ買った後で携帯選んだときにね、そう思ったの。だってあのとき真屋さん、鈴乃ちゃんのこと、『本来仲が悪くあるべき相手』って言ってたでしょ？」

「ええ、そういえばそんなことを言ったような気も……」

「でも最初にセンタッキーの二階で鈴乃ちゃんのことを話したときには、本当に鈴乃ちゃんのこと、気遣うような言い方してたじゃん。元から仲良くなかった真美と違って、ちゃんとお隣さんとして接してた。つまり、彼女が引っ越してくるまではお互い知らない間柄だったはずでしょ？」

「!!」

「それが、『仲悪くするべき相手』だなんておかしいよ。深刻にお隣同士喧嘩したなら一緒に買物なんかするはずないし、よく分からないけど、鈴乃ちゃんとあなた達、お互い気づいてなかっただけで昔会ってたとか、存在だけは知ってたとかいう相手だったんじゃないかって。

多分それは、恵美も一緒」

「遠佐が？」

「うん、だって初めて鈴乃ちゃんが私達の敷場に来たときと最近じゃ、恵美の鈴乃ちゃんへの接し方、全然違うもん。昔は二人で真奥さんを取り合ってるんじゃないかって勘違いするくらい警戒してたのに、今じゃちよつと妬けちやうくらい仲良さそうだしね」

吉屋は、今度こそ本当に感心すると同時に、自分達の迂闊さにも呆れた。

恵美がいつの段階で鈴乃の正体に気づいていたのかは知らないが、少なくとも吉屋は、梨香と初めて出会ったセンタツキートの二階では、また鈴乃のことを、うどんを差し入れてくれた卑なる隣りの住人くらいにしかなっていなかった。

だからそのとき鈴乃を氣遣うようなことを言ったのはあながちウソではないのだが、それなら鈴乃の正体を知ったら知ったで、梨香の前ではそれまで通りの関係を演じるべきだったのだ。それなのに、敵なのか味方なのか判然としない微妙な関係のお隣さん同士のまま梨香の前でいつも通りの姿を見せてしまっていた。

そして梨香はその違和感に気づかないほど、鈍い女性ではなかった。

「それまでもなんとなく、結構奥深いところあるなーって思ってたけど、はっきりこの人達は人に言えない何かを抱えてるって思ったのは、やっぱりあの電話屋でかな。多分、それは鈴乃ちゃんや恵美も、もしかしたら……そうなんだと思う。遠原さんは今日が初対面だからよく分か

らないけど、まゝあんなの見せられちゃね」

あんなの、とは、もちろん先ほどの大脱走のことだ。

「で、きっきのあれば、一体なんなの」

「……」

芦屋は意を決する。

いずれこんな事態が起こるだろうことは覚悟していた。

これで梨香が自分達を愚れて追つかなくなるなら、それはそうなる運命だったのだろう。

よもやマスコミなどに売られることはないだろうなと思いつつ、そんな愚かな真似をする人間ではないことくらい短い付き合いの芦屋でも分かる。

「鈴木さん」

「……」

「実は……我々は」

「ひっ？」

「この日本のん？」

折角意を決して自分達の身の上を明かそうとしたのに、梨香が突然小さな悲鳴を上げる。

そして芦屋の後ろ、漆原と鈴乃が飛び出した窓を、覗きながら指差している。

「？」

その指の示す先を追って振り返った芦屋は、

「うわっ！」

一瞬（一瞬）になって悲鳴（いきなり）を上げた。上げざるを得なかった。

なぜならそこには、

「あしやー……あけてー、まどあけてー」

ずぶ濡れ（ぬれ）になって朦朧（もろく）とした表情で外から窓（まど）を叩く、真奥（まおく）の姿があったからだ。

「おーい、あしやー」

気の毒、という単語を絵に描いたような有様（ようさま）の真奥（まおく）だが、府中（ふちゅう）の運転免許試験場（けん許けん験場）にいるはずの真奥（まおく）が、どういう理由で濡れ鼠（ぬれねずみ）になって窓の外に張りついているのだろうか。

ともかく最初の驚きから回復した芦屋は、慌て（あわて）て窓に飛びついて聞け放つ。

するとそこにいたのは間違（まちが）いなく真奥（まおく）だったのだが、大風（おおふう）と雨粒（あまつぶ）と一緒に飛び込んできたのは、真奥（まおく）ではなかった。

「ま、魔王様!? い、一体どうしてこんなところから!? こ、この者（もの）達は何者（なにもの）ですか!？」

「うー……さぶい……あー、説明（せつめい）は後（あと）、ちよつとこいつ、置いてくわ」

そう言（い）って真奥（まおく）は、自分は室内（しやうむ）に入らず代わり（か）りに、

「ぬっ……」

大柄（おほびら）な中年男性（ちゆうねんなんせい）を、部屋（へや）の中に蹴（け）り込んできた。

真奥と同じく濡れ鼠なその男性は頭を振って畳の上に起き上がるが、

「……誰？」

「だ、誰ですか」

梨香はもちろん、苺屋も見たことのない男だった。

「おし、す、鈴木梨香、来てたのかい。あし、まし、ちょっと待、急ぐから、話は後で……声届、このおっさん、着替えさせてやってくれ。本人は戦闘経験があるっつーんだが、今ちょっとこのおっさんの身柄、万が一にも手放すわけにはいかないんでな」

「ま、魔王様、私にはさっぱりワケが……」

「あし、すまんが後で、遅れると鈴乃にどやされる。ちーちゃんが危ないらしいし……ぶえっくしやー！」

「わっ！ え、さ、佐々木さんから連絡があつて、まだ十五分がそこら……」

真奥は初めから異常を察知していたわけでもあるまいに、府中からここまでこの短い時間で来られるはずがないと思つた苺屋だったが、

「マオウ、もういい？」

「おし。頼む。あうう寒い……」

もう一人、聞きなれない人物の声を追って見てみれば、なんとそこには、もはやどんな言い訳もできないほど、はっきり物理的に空中に浮かんでいる見知らぬ女性が一人。

思わず梨香を振り返れば、彼女の目はめまぐるしく青屋と真奥と女性と中年男性の間を行き来している。

「魔王様！ その女まさか……！」

「あ、俺が向こうに着いたらこいつも燃ってこきせ……」

「んじや、いっくよー」

「わり、とにかく後でええええええ……」

真奥が最後まで言い終わらないうちに、一人はびしょ濡れの見知らぬ中年男性一人を残して、鈴乃と漆原が消えた方向へ真奥の叫びを響かせながら飛んでいってしまった。

青屋も、そして梨香も、両風が吹き込む窓を閉めることすら一瞬忘れて、二人が去った空を見る。

「……」

「……」

「……」

そして、青屋と、梨香と、見知らぬ中年男性はお互い目を見合わせ、

「と、とりアエズ何か服ア……」

「貴様、一体何者だ？」

「空飛んでったあああああああああ？！」

まるで噛み合わないまま、それぞれ好き勝手に叫んだのだった。

## ※

真実が鈴乃の概念選受を受け取る少し前。

「それ」があまりにもナチュラルに雨の降りしきる校庭を歩いているのを見たとき、千穂は思わず卒倒しそうになった。

恐怖に、ではない。そのあまりの唐突さに、である。

普通に考えれば、恐怖の対象として見なければいけないのだろうが、細かいところは遠慮と一度は差し向かいで会話をし、あれだけ色々なことを聞けば、「それ」がエンテ・イスラの悪魔の中でもかなり高位の存在であることが分かる。

マレブランケという一族の、頭領格と呼ばれるボスの人達。

フアーファレルロ（覚えた）という、あのイルオーン少年を連れていた頭領格は新人らしいが、今校庭を闊歩しているマレブランケは、遠目だかフアーファレルロよりも一回り大きい気がする。

最初は驚きすぎて分からなかったが、何かを右手に持って引きずっている。

それが、学校の創立五十周年を記念して卒業生から贈られた『平和と真実』と題された彫像

だと気づいた。

幾何学模様をあしらった球体に海老反った裸の人間が三人巻きついているという謎が謎を呼ぶデザインで、寄贈当時から現在に至るまで、在校生には不気味、意味不明、芸術の押しつけと不評だったその映像を、引き抜いたかへし折ったか、とにかく球体部分を地面に引きすりながら、マレブランケは悠然と闊歩している。

この間、自分の勝手な判断で真奥達に要らぬ心配をさせたばかりである。

千穂は一人で対処しようとは微塵も思わず、真奥に連絡を取ろうと試みる。

今日は二度目の試験を受けに行くと言っていたが、これは、多分それに優先する事案だ。

だが、届かない。

他の生徒達と同じく校庭のマレブランケに釘付けになっている先生の目を盗んで携帯電話を使っても、真奥にリンクできる手応えが無い。

増幅器を使っても、ここから調布まで届かないのだろうか。

恵美は結局今に至るも行方不明のまま、となればあとはあの悪魔に戦闘能力で対抗できそうなのは鈴乃しかない。

千穂は教室の全員が校庭に注意を向けている間に、もう一度靴の中の携帯電話を掘り、鈴乃に概念送受を試みた。

今度は送信に成功し、鈴乃もすぐに学校に駆けつけてくれると言ってくれた。

「さ、ささちし、なんだと思う、あれ」

そのとき、学校で最も親しい友人である東海林佳織が、口をばくばくさせながら校庭を指差すが、もちろん知ってたって答えられない。

「え、えっと、なんだろうね。さ、きつと危ない動物とかじゃ、ないのかなあ……」

そう答えるしかない。悪魔の人達、ごめんなさい。

するとそれに抗議したわけでもないだろうが、校庭のマレブランケは、今まで弄んでいた「平和と真実」を、赤ん坊が飽きたおもちゃを投げ捨てるように、無造作に放り投げた。

「ワ」

千穂だけでなく全員が息を呑む。

「平和と真実」は隕石のように校庭の隅まで飛ばされて、サッカーゴールのポストに当たって無残に砕けてしまった。

今のは、飛ぶ方向が違っていたら校舎を直撃していたかもしれない。

「ちよっとくらいなら、なんとか……ならないかな」

あのマレブランケを、他の生徒の目につかないところに移動させられないだろうか。

鈴乃の判断を仰ぐようと携帯電話を握りしめるが、千穂が積極的に動くことを鈴乃が良しとするはずがないと思ひ留まる。

やはり、自分は大人しく静観しているべきだろうか。そんなことを思ったときだった。



千穂は、誰にも見とがめられることなく、笠幡北高校の旧校舎の屋上に向かつていた。

笠幡北高校は創立七十年を過ぎ、旧校舎は既に築五十年を過ぎているらしい。

建て替えの計画は千穂の在学中には残念ながら行われそうにないが、旧校舎は三年生の教室以外には、委員会会議室や生徒会室など、人が常駐していない教室ばかりだ。

学校内のはば全員が校庭に釘付けなこともあって、旧校舎に飛び込んだ千穂は誰ともすれ違うことなく廊下を走り抜け、目的の屋上まで達り着くまで、

「!?」

思わず足を止める。

旧校舎三階の角、屋上に通じる唯一の階段の脇に、生徒達に『開かずの間』と呼ばれている教室がある。

別に昔そこで生徒が死んだとか、意味不明な封印が施されているとかいうことではなく、大昔は家庭科室として使われていたが、今は比較の問題で新しい家庭科室が築三十年の新校舎にあるため、単に使われなくなった部屋、というだけのことだ。

申し訳程度の南京錠がかけられているが、その南京錠が引っかけられている金具はドライバ一本あれば子供でも開けられる粗末なもの。

千穂が恵美の異世界転移をイエソドの欠片越しに見送ったのもこの部屋の前だったのだが、その開かずの間のドアが、内部から破壊されているのだ。

そして廊下には、冗談のように大きな泥つきの足跡。

「……………ここから？」

間かずの間を覗くと、窓などが破られた形跡は無く、古い机と水道設備と埃だらけの戸棚が残っているだけの部屋だ。

だが床の真ん中に、新しい焦げ跡のようなものがある。あれは一体なんなのだろう。

「……………と、今はそれどころじゃない！」

検証は、後から鈴乃が来たときにすればいい。今は外のマレブランケだ、階段を駆け上がると、千穂の目の前には当然のように鏡のかかったドア。

だが問題ない。千穂は下階に誰もいないことを確認してから、大きく息を吸った。

「あーたーらしい、あーさがきたっ！ きぼーおのあーさーだ！！」

千穂は、体の奥底に沈む力を意識して、ラジオ体操の歌を熟唱し、聖法気を活性化させた。単に概念送受を使うだけならこれほど全力で活性化させる必要は無いのだが、今は別に術を使うために活性化しているわけではない。

長く歌えば、それだけ強力に聖法気活性が行われることを訓練で知った千穂は、聖法気を練り込むようにラジオ体操の歌を繰り返して歌う。

果たして千穂の狙い通り、歌が三週目に入りそうになるとき、ドアの向こうに大きな質量が着地する気配を感じた。

「……貴様か、俺を呼んだのは」

フアーファレルロのそれに似た、ややくすんだ重い声。

千穂はまず、安堵の息をついた。

思った通り、千穂の活性化した聖法氣を感じてくれたのだ。

「……良かった、日本語、喋れるんですね」

「何モンだ？ 何故、俺を呼んだ」

「理由は、ちよつと言では話せないんですけど……とりあえず、他の生徒や先生達があなたに迂闊なことをする前にお話ししようと思ったのと」

「ふん、そんなみみっちい聖法氣しか持ってねえワリには、なかなか吠えるじゃねえか」

千穂を侮るような口ぶりの外存在。だが、千穂は例え相手が侮蔑の意味を含めて言ったとしても、それが事実だった場合結構素直に受け入れてしまう。

「正直、私戦う力とか持ってませんし、あなたをどうこうできるなんて思ってます。でも、あなたをここへ呼んだのには、ちゃんと理由があります」

「あ？」

相手の姿が見えないこともあろうが、今は鈴乃が間近まで駆けつけてくれていると確信しているからこそ、あまり恐怖は感じなかった。

「この扉、あなたの力で開けてください。鍵持ってこられなかったんで、マレブランケさんな

ら、できますよね」

「……」

ドアの向こうから、わずかな戸惑いの気配。

「この世界は結構すばいに戦しいんです。異世界から来た悪魔と一対一でお話ししたいから屋上の鐘貸して欲しいって言っても、大人は貸してくれないですよ」

その瞬間、旧いなりに頑丈そうな重々しい鋼鉄の扉のノブが、

「っ！」

外側から、ぐしゃりと潰される音がした。

千穂の狙い通り、外から鍵を壊してくれたのだらう。

やがて反対側の支えを失った内側のドアノブがぼろりと千穂の足元に落ち、その開いた穴から、見覚えのある鋭い爪が一本、無遠慮に差し入れられた。

千穂は、このとき初めて恐怖を感じた。

ファイアアルロは、イルオーンを介していたこともあり、それほど恐怖を感じなかった。

だが、今度は全く見えず知らずの悪魔と差し向かいなのだ。

大丈夫、悪魔の人間は、話せば分かる。

そう自分に言い聞かせて、千穂はゆっくり開かれるドアを凝視する。

「チビ人間のくせに、いい度胸じゃねえか小娘が」

ファーファレルロよりも野蠻な口調の、ファーファレルロよりも一回り大きいマレブランケがそこにいた。

最初の印象ほど爪は長くない。体軀こそ大きい、爪やら翼やらはファーファレルロのそれよりもやや小ぶりにも見える。

だが、吹きつける魔力は、ファーファレルロの比ではない。

魔王型の真奥とは比べるべくもないが、それでも事前に全力で魔法気を活性化していなければ、相対しただけで気分が悪くなって嘔吐することもできなかっただろう。

「見たところ本当にこの国の人間のようなだが……俺の前に蓋面で立つてられるところを見ると……そうか、テムエがファーレの小僧がほざいてた、新生魔王軍大元帥、マドロナルド・パリスタか」

異世界から来た幹部級の悪魔に、真面目くさって「マドロナルド・パリスタか」と確認されても、その本来の意味を知っている千穂は思わず笑いがこみ上げてきそうになる。

「ファーレ、というのは、もしかしたらファーファレルロの愛称なのだろうか。それも、何かちょっと可愛い」。

だが、そこは型氣を読んでぐっとこらえて不敵な笑みを浮かべようと努力する。

「自己紹介はいらさないみたいですね。あなたが今まで私が出会った悪魔の人達みたいに、紳士的な人ならいいんですけど」

すると大柄なマレブランケは悪臭のする息をまさ散らしながら、耳を塞ぎなくなる大声で哈哈大笑する。

「ガハハハハハハハハハハ 慣れねえマネはするもんじやねえな。声が震えてるし、彼達悪魔に恐怖の感情は隠せねえ！」

「っ！」

千穂は未知の脅威を前に、思わず赤面してしまふ。

「だが、ブルった鯨んこのクソ度胸に免じて、人間の言うところの紳士のように先に名乗ってやろうじやねえか」

「ど、どうぞ……」

千穂は、マレブランケの背後にある空を、思わずちらりと見る。

鈴乃は、まだ来ない。

「彼様はリヴィタオッソ。お察しの通り、マレブランケ頭領格が一人。だが、ファールの小僧みてえな甘ちゃんじやねえことだけは覚えておけ。彼は、魔王サタン様のご存命は素直に喜ぶが、新生四天王など断じて認めん！」

その瞬間、錯覚でなく、両風が急速に強くなった。

みるみるうちに遠くの空の雲の色が濃くなり、目に見えるほど雲が流動して大気が衝を打ち据える。

リヴィタオツコと名乗ったマレブランケの魔力も、活性化では防ぎきれないほどに強くなった。

だから、四天王だけでも実は五人なんですけどねとは、さすがの千鶴も言えなかった。

# ※

「わぶわっち!!」

真奥は空中でいきなり全動力の拘束から解かれ、雨で濡れた地面に無残に尻から落下する。

「おいっ！ 何すんだっ！ こことだちーちゃんの学校じゃねえぞ！」

「ゴメン、ちよつとヨリミチ」

もはやパンツまで雨水が浸透した下半身を締め気味の目で見下ろすが、

「……マジで台風だな、本当……って、ここ、マドロナルドじゃねえか」

ふと周囲を見回すと、そこは真奥にとって馴染んだ場所。

マドロナルド轄々谷駅前店の目の前だった。

この暴風雨のせいか人通りは皆無で、とりあえず安心した真奥。

レジ内を見通せない場所に落ちた（落とされた）ので木崎達はどうしているのかは分からないが、窓から見える客席は、この天気なら仕方ないと言わざるを得ない占有率だった。

「これじや轢<sup>ひ</sup>を割<sup>や</sup>しといても吹き飛ばされかねねえな」

秋のフエアを譲<sup>ゆづ</sup>った轢<sup>ひ</sup>は強風時のマニュアルに従<sup>したが</sup>って歌<sup>うた</sup>えて横転させてあるが、足元の重石<sup>おもいし</sup>が風でがたがたと揺れている。

「ココに……誰か、いたネ」

「ん？」

だが、アシエスが見ていたのはマグロナルドではなく、向かいのセンタツキーであった。アシエスの視線に釣<sup>つ</sup>られて向かいのライバル店を見て、

「うわ！ 大丈夫かあれ！」

客席の大きな窓ガラスが一枚、見るも無残<sup>むざん</sup>に砕けてしまっている。

瓦<sup>わ</sup>か何かが、大風で飛んできたのだろうか。

センタツキーの店長である大天使サリエルはどうでもいいが、商店街の仲間として、センタツキーで働く従業員やお客に怪<sup>あや</sup>我が無かったか心配になる真裏<sup>まうら</sup>。

見たところ所<sup>ところ</sup>も消えているようだが、落雷でもあってブレーカーが落ちたのだろうか。

「デモ……もう、イナイ」

「なんだ、センタツキーになんかあんのか？」

アラス・ラムスと等質<sup>どうしつ</sup>の存在であるアシエス・アーラが大天使サリエルの存在を感知していても不思議はないかもしれない。

だが、それならば「もういない」とは？」

「……ごめん、急ぐんだよね、もうヨリミナしない」

「んんん……………っ!!」

真実の返事待たぬ、ほとんど暴挙と呼んでいい空中浮遊と同時に、二人の姿は雨雲に吸い込まれて、空に消えた。

## ※

「それで……リビコッコさんは、日本というか、地球に何しに來たんですか」

吹さつける雨風にあつという間に制服も髪もびしょ濡れで寒いし、強力な魔力と体軀は怖いし、二重の理由で震えながらも千穂は気丈に尋ねる。

見たところイルオーンのような伏兵を忍ばせている気配は無いが、それでもチリアットが大勢の配下を引き連れていたことを考えれば、およそ油断はできない。

が、リヴィタオッコは、悪魔の表情に詳しくない千穂にも分かるほど、不機嫌そうに顔を歪めた。

「なんかおめえの発音ム方つく」

「えっ!!」

真面目に悪魔に目的を尋ねたら、発音の悪さを指摘された？

「リヴィタオッコ、だ。言ってみろ」

「……り、リヴィオッコ」

悪魔相手にこの風雨の中、何をやっているのだらう。

だが相手の機嫌を損ねても仕方ないので、予想外のリビートアフターミーに、千穂はとりあえず素直に応じる。

「殺すぞ、鶏じゃねえんだ」

「あ、エンテ・イスラでも鶏は「こっこ」って鳴くんですね」

「おちよくってんのか。言っておくが、ドウオラギニエツイーノヤスタルアミリコーニあたり  
の名前を呼び間違えたら、ヤツらがキで短気だからな、人間なんざたちまち首が飛ぶぞ」

「ど、ドウ、どら、どうろらぎにや……えええ？」

あんまりな話だ。

悪魔の名づけ文化がどのようなものか知る由もないが、もしマレブランケ達も親が名前を付けるのなら、そんな面倒な発音の名を付けた親の顔と名前が見たい。

「まあ、それさ大層えりや他の連中は、もういねえ。安心しろ」

「え？」

一瞬、とても重要なことを聞いたような気がしたが、すぐにリヴィタオッコの声が飛ぶ。

「もう一回！ リヴィタオッコ！」

「り……りヴいくおっこ！」

「よし！ やりやあでできるじやねえか！ 多少さこちねえが、所詮異世界の人間だ、そこは許してやる」

「ど、どうも……」

とりあえず、発音の試験は合格したらしい。

「それで、り……りビ……りヴィタオッコさんは何をしにここに……」

「暴れに来た」

「え」

一瞬、自分がリヴィタオッコの名を間違えて彼の機嫌を損ねてしまったのかと思いきや、どうもそうではないらしい。

「といっても、別にここで大量虐殺するつもりはねえ。この施設に来たのも、たまたまゲートの出口がここだったってだけの話だ。前に、誰かがここを出口にしてゲートを通ったのかも。だが、とりあえず、俺は出たところで分かりやすく暴れろって言われただけだ」

「分かり、やすく？」

「そう、こんな風にな」

その瞬間、牙がずらりと並ぶ口を愉快そうに歪めたりヴィタオッコは、千穂が顔を手で庇

うほどの風を起こしながら両手を広げる。

その瞬間、彼（この）北（きた）高校（こうこう）を囲む（かこむ）雨風（あめかぜ）が圧縮（あつしゆく）されたように渦巻（うずまき）、まるで学校が巨大なハリケーン（ハリケーン）の壁（かべ）に包まれてしまったかのようにだ。

「や、やめてください!!」

千穂（ちほ）は悲鳴（ひめい）を上げる。

学校と外の境（さかい）目の暴風雨（ばうふうう）は、先ほどの比（ひ）ではない。

雨（あめ）と風（かぜ）が暴力的（ばうりてき）な壁（かべ）を作り、周囲（しゅうい）の家屋（けあ）の瓦（わ）屋根（やね）を吹き飛ば（とば）し、庭木（ていぎ）を傾（かたむ）け、電線（でんせん）を千切（せんぎ）りスパータ（スパータ）させる。

「どうだ、分かりやすいだろう」

そんな千穂（ちほ）の反応（はんぷう）を楽しむ（たのしむ）かのように、リヴィタ（リヴィタ）オッコ（オッコ）は天候（あまが）を操（あやつ）る魔術（まじつ）を継続（けいぞく）する。

「こんなこともしてみるか」

リヴィタ（リヴィタ）オッコ（オッコ）は、広（ひろ）げた手先（てさき）で爪（こ）を小刻（こ）みに動（うご）かす。

どんな変化（へんか）が起きたか、千穂（ちほ）には分からなかった。だが、一瞬（いつしゆん）うなじの毛（け）に違和感（ごわかん）を覚（おぼ）えた次の瞬間（そのとぎ）、無風（むふう）無音（むおん）の世界（せかい）に閃光（せんこう）が走（は）った。

「さやああっ!!」

千穂（ちほ）の悲鳴（ひめい）が空（そら）を裂（ひ）く。風雨（ふうう）の壁（かべ）が閃光（せんこう）を発（は）したかと思うと、無数（むすう）の稲光（いなこう）を地上（ちじやう）に降り注（つ）ぎはじめたのだ。

家々の屋根のアンテナ、電柱やマンションの避雷針などに次々落雷するが、視界を白熱させるほどの稲光をその程度で受け止められるはずがない。

「ふん、うまくいかねえな」

閃光が収まり、千穂が恐る恐る目を開けると、学校の周囲の何軒かの家から火の手が上がっていて千穂は息を呑む。

だがリヴィタオッコはそれだけのことをしたにも関わらず不満そうだ。

「ふん、もっと豪快に火の海になるかと思っただが」

視界いっぱいのが雷が広がったときには千穂もその光景を覚悟したが、近年は各家庭に高級な精密機器がたくさんあるため、落雷被害への意識が高まっている。

また送電用架空線のインフラを、インターネット回線などの送電目的以外のラインが多く利用しているため様々な落雷対策が施され、それらの設備には避雷設備の設置義務が課せられている。

要は送電線や電柱などがそのままアースの役割を果たしたので、リヴィタオッコの想定したほどの被害が起きなかったのだらう。

だが、それを言えば、いや、言わなかったところで、

「もうちょい力いっぱいやるか」

そうなるに決まっている。

「待ってくださいー そんなことして、なんの意味があるんですか!!」

「あ？」

「暴れるだけって……今まで日本に来た悪魔の人間は、皆サタンさんを連れ帰るとか、遊佐さん……勇者エミリアの持つてる聖剣を奪いに来たとか、ちゃんとした目的があったのに……あなた達は、そんなんでいいんですか!」

「言うねえ、嫌んこが」

「リヴィタオッコさんの任務、『フアールの小僧』よりずっと次元低いですよ! もっと大悪魔らしく、かつこ良く悪いことしたらどうなんですか!!」

「おめえ。なんか勘違いしてねえか？」

「……………」

「今、おめえ自身も、この施設のカギ共も、周りの街の連中も、みいーんな恐れて、怖くて悲しい思いをしてんだろ。おめえの目から見たフアールの小僧がどんなに意地な使命を帯びてたか知らんがな」

リヴィタオッコは、にやりと笑う。

「悪魔にや、こつちの方がずっと美味しい任務なんだよ! 大量の恐怖と悲しみを……魔力を一気に食えるからな!」

その瞬間、リヴィタオッコはさらに力を込めて両手を再び大きく広げる。

「ううっ……」

放射された魔力を浴びた千穂は、一気に息苦しくなつて両膝を地面についてしまふ。活性化させたせいで、聖法氣を消費しきつてしまったのだ。

ホーリーピタン、飲まなきゃ。

そう思うのだが、千穂の一本は教室の靴の中。だが今ここで背中を見せれば、この残酷な悪魔は自分の命を摘み取るかもしれない。

「気に食わねえなら、力づくで止めて見ろよ。王佐の司教母、新大元帥様よ……」  
力を失いつつある千穂を嘲るようにそう言つたリヴィタオッコ。

千穂はそれでも自だけはそらすまい、残酷な方に屈しまいと顔を上げて睨みつけようとした。そのときだった。

「なら、そうさせてもらおう」

凄とした声と共に、リヴィタオッコの巨体が、轟音を上げて千穂の前から消え失せた。同時に吹きつける魔力が掻き消え、急に呼吸が楽になる。

「ぐ……ぬっ」

空中で翼を広げたリヴィタオッコは千穂のいた場所を睨みつける。

「私も一応、新大元帥の一人でな。貴族のやることが気に食わんから、力づくで止めてやる」  
巨大な大槓が、軽々と振るわれ、兩翼を天から差す陽光に煌めかせる。



「す、鈴乃さんっ！」

千穂は自由になった瞬間で叫んだ。

暮を大根に変化させた鈴乃は、雨に濡れた長い髪を暴風に靡かせながら、視線を背後に宛つた千穂に向ける。

「すまない、遅くなった。急に強くなった風の壁を突破するのに、手間取った」

「おい、その言い方だとお前一人の方で抜けたみたいになってんじゃん！」

すると、上空からさらに聞き覚えのある声。

振り返ると、真っ白な翼をはためかせた漆原がゆっくりと着地するところだった。

「漆原さん……それ……」

千穂は、漆原の背の翼の色に目を丸くする。

以前、真黒と戦っていたときの漆黒の色ではない。まるで、天使のように真っ白な翼だ。

漆原はそんな千穂の視線に気づいたのか、決まり悪そうにそっぽを向いた。

「あーあ、あいつがあんなに暴れるって分かってたら、魔力受容を優先させたのに」

「ルシフェル、冗談でもやめろ」

鈴乃が眉を皺めて答めるが、漆原は涼しい顔。

「冗談じゃないからね。でもまあ、今日はいいよ。あいつが」

漆原は鈴乃に吹き飛ばされたりヴィクトワコを見上げる。

「ダートを開いてこの学校に現れたんだとしたら、それは偶然じゃないんだろうな。僕も若干責任を感じざるをえない」

「同感だ」

「え？ え？」

鈴乃と漆原は、なぜか妙な連帯感を見せて息をつくとき、改めてリヴィタオッコを見上げる。リヴィタオッコは鈴乃の大槌の直撃を食らった脇腹を押さえながら、ゆっくりと屋上の地面に着地する。

「……ルシフェル様と、そっちは……お前が、デスサイズ・ベルか」

「む？」

鈴乃は片肩を上げる。

「私のことを知っているのか？」

「ああ。ファールの小僧が言ってた特徴と合致するし、それに……」

「なんだ」

「いや、ちっと予定外だが、おめえがこっちに來たってのは」

鈴乃の感覚では、リヴィタオッコの力は恐らく自分と互角か、そうでなければやや弱い。

油断していた後ろからの一撃はかなり効いているはずだ。

それに一応漆原も味方について、正面から戦闘に突入しても負ける要素は皆無。真奥もこちら

に向かつてゐる。

それなのに、リヴィタオツコのこの不自然な余裕の空気はなんなのだろう。

「最高に好都合だ」

その笑みの形態きは、先ほどの比ではなかった。

※

「……………」

コタツで向かい合う人間が、三人に増えた。

新参の一人は正座が苦手らしく、背腰のシャツとズボンを借りた姿で居心地が悪そうに胡坐を掻いている。

「で、この人は……」

「知りません」

先ほどから禁書の質問にしろもどろだった高屋も、これなら答えられる。

もはやどんな言い訳も通用しない登場と退場の仕方をした真奥が放り出していった男性は、本当に高屋の全く見知らぬ人物だったのだ。

わずかな会話と、真奥が空を飛びながら連れてきたことや前差しの印象を考えると、まず昔

普通の日本人ではあるまい。

そうすると最初に考えられるのはこの男がエンテ・イスラの人間、という可能性だが、それでも産屋には疑問が残った。

見たところ、聖法氣も魔力も感じられないが、そんな「ごく普通のエンテ・イスラの人間」などという存在が、何故日本にいるのだらう。

恵美も鈴木もエメラダも、そしてサリエルやガブリエルも、彼らは世界や次元を超える技術と普通の人間にはない超自然的な力を有している。

だからこそ、世界を超える理由を持っていた。

もしこの男性がエンテ・イスラの一般市民なのだとしたら、どういう理由で日本にいるのだらう。

自分の意志で世界を超えてくる力は、この男性には無い。  
なのに、ここにいます。

若原は、ちらりと梨香を見ると、

「鈴木さん」

「ん？」

「申し訳ありません、少し、仲間外れにしています」

「は？」

音節は心の中でもう一度読むと、真実が連れてきた男性に顔を向け、口を開いた。

「（この言葉が分かるか？）」

その瞬間、男性ははつとなつて頷いた。

「（徳ヴェズ語……いや、中央交易言語か。君も、この国の人間ではないのか）」

「んん」

梨香は、目の前で突然意味不明な言語で会話をはじめた二人に目を丸くする。

「（あの、マオウという人もそうだった。君達は、一体何者だ？）」

「（正直、それはこちらが聞きたい。見たところ法術士ではなさそうだが、どうしてこの世界にやってくるようになった？ 貴様は何者だ？）」

「ちょ、ちよつと、二人共……」

「（話せば長い。お察しの通り私は法術などからきしの、元は農夫だった男だ。本来ならセント・アイレの片田舎から一歩も動かずそのまま一生を終えるはずだった）」

「な、何語……？」

梨香は目を回す。

英語でもないし、ニュースやドキュメンタリーなどで時折耳にするドイツ語やフランス語でもない。

音節の区切りすらあいまいな、まるで宇宙人の言葉だ。

「（君やあのマオウさんが今もって何者か分からない以上、話せることは多くない。だが、私は、あの子を……ツバサを守る役目を負って、世界を越えた。いつの日かツバサをある人物に渡すために）」

「（流す……）」

芦屋は首を傾げるが、そういえば、真奥と一緒にもう一人、女性がいたことを思い出す。

「（ツバサとは……真奥が連れていた、あの女性のことか）」

「（……）」

名乗らぬ男性は沈黙する。

日本語の「真」という言葉と同じ意味の名を持つ存在を、芦屋は知っている。

それはわずか一週間の間この部屋で過ごし、その後仇敵の保護下に置かれ、そして今、仇敵と共に行方不明の存在だ。

「（真奥が貴様を連れてきた意味が分かった。いや……重要なのは、貴様よりも、ツバサというあの女性か）」

芦屋は、否定も囁も許さぬ鋭い語気で、言い放った。

「（あの女性は、イエソドの欠片の化身だなう）」

「（……）」

男は沈黙する。

だが、目はそらさない。

ほんの少し前の出来事だ。

悪魔大尚書カミーオは、言った。

カミーオに、オルバが言った。

聖剣は、もう一振りあると。

その一振りは、日本にあると。

チリアットは、それを探しに来たのだと。

芦屋は動悸をおさえきれなかった。

目の前の、元農夫のただの人間が、自分達とエンテ・イスラを取り巻く世界のすべてを変えてしまう可能性を孕んだ鍵を握っていることに、気づいたからだ。

「(貴様……貴様は)」

芦屋は、上ずる声を必死に抑えて、心の中の乱れた予測を確信に変えるべく動いた。

「(貴様は……エミリア・ユステイーナの、父親か)」

「……えみりあ？」

梨香は、初めて聞き取れた人の名と思しき響きに、違和感を覚える。

だが、そんな梨香の様子に芦屋も男も気づけない。

それも無理からぬことだった。

「君達は……ああ、そういうことか」

厭しい声色で言い放つ男、勇者の父、ノルド・ユスティーナと、

「(なんたる、ことだ……)」

魔王腹心の四天王筆頭、邪魔大元帥アルシエルの懸念だ。

「(そうか君達が……違うな、あのマオウさんが……妻の言っていた、「選ばれた者」か)」

「(選ばれた者)………)」

「(妻の言葉さ。「選ばれた者が世界の真実を暴く覚悟をしたとき、翼を焼く」。マオウさんが

エミリアの名を出したときに、もしやと思ったんだ)」

妻、とは、この場合、当然恵美の母親たる大天使ライラのことだろう。

だが、天使は持つ力は超常的でも、存在自体は大変に俗っぽく、伝説や聖典に描かれるよう

な、言葉だけで世界を魔術的に轉るような、運命を操る力を持ってはいるわけではない。

大体たかが大天使ごときに偉大なる魔王サタンが「選ばれた」などと、不遜も甚だしい。

「ねえ」

大体世界の真実とはなんだ。

言葉は御大層だが、「世間」などというあやふやな言葉の「真実」など、宝石の値段やダル

メ香組の味の評価より当てにならない。

「ちよっと」

大体、人間一人、天使一人ごときに、これが世界の真実だなどと偉そうに語られてたまるか。我々悪魔は、形而下で語られる真実などに路傍の小石ほどの価値も見出しはしない。

「聞けっ!!」

「はいっ!!」

耳元で突然叫ばれて、吉屋は飛び上がる。

怒声に驚き耳を押さえて横を見ると、そこには悪魔より悪魔の形相の梨香がいた。

「自分らだけで何分かってるか知らんけど、うちにもちっとは話聞かせろ」

「は……」

「お、お嬢さん、怖いですね」

梨香が、蚊帳の外に置かれて怒っていることくらいはノルドにも分かるらしい。

落ちていた口調で梨香をなだめようとしたが、梨香は悪魔大元帥を嫁ませた視線でノルドを

射殺す。

「おっちゃん、日本で平穏無事に生きたいなら、歯に衣着せること覚えたほうがいいよ?」

「お……」

「で、吉屋さん?」

「は、はい……」

「結局このおっちゃんは何センで、真実さんや漆原さんや鈴乃ちゃんがなんであんなことが

できるの。かつて質問にはいつ答えてもらえるの！」

そんな質問してないだろうとか、混ぜすぎだというような切り返しは血を見るだけだと分かっている。で、芦屋も言わないが、真奥がやってくる前は、一度は覚悟したのである。

「す、鈴木さん、お話します、お話ししますから一度座って……」

芦屋は梨香の両肩に手を置いて落ち着かせようとすると、

「そ、そ、そんなことでごまかされたりせんもん」

「へ？」

今にも火の玉になって突撃してきそうだった梨香が、今度は火を噴きそうな顔色になって、しおしおと崩れるように素直に畳に座り込む。

「で、で!? なんなん!?」

顔を赤らめてこちらを睨み上げてくる梨香。

「は、はあ……」

芦屋は何から話すか迷った末に、ノルドを指し示す。

「この男ですが」

「う、うん」

「道佐の、父親だそうです」

「うん………えっ？」

頷いてスルーしそうなになった梨香は、目を点にしてノルドを見る。

「恵美の……お父さん？」

「はい。恐らく、本当のことかと思えます」

「え？ え？ あ、そ、その」

先ほど勢いで暴言を吐いたことを思い出した梨香は、今度は少し顔を青ざめさせる。

「さ、さっきは失礼なこと言つて、すいませんでした」

「よく分からないけど、ダイジョーブ」

それは大丈夫なのだろうか。技術士でないノルドの日本語能力が若干不安になる青屋さんが、もめられても困るので先に進む。

「（この人は、この国のエミリアの友人だ。リカ・スズキと言う）」

今度は梨香を、ノルドに紹介する。

「リカ、さん」

「は、はい」

「エミリアが、いつもお世話されております」

まるで恵美が梨香に望まぬ介護でもされているかのような言い方が、言わんとすることは分かるので梨香もさっきのように突っ込んだりはしない。

「あ、こ、こちらこそ……あ、あのさ、青屋さん」

「はい」

日本人らしく意味のないお辞儀を繰り返しながらも、梨香はふと、声屋を見上げる。

「さつきからちよいちよい『エミリア』って聞こえるし、今、お父さん思いつきりそういったけど、それって……」

この梨香の疑問に答えることは、梨香を千穂と同じフィールドに呼び込むことを意味する。千穂は受け入れたが、梨香はどうなるだろうか。

場合によっては後で鈴乃に記憶操作をさせなければならないかもしれないと頭の隅で考えながら、声屋は梨香の世界を変えるために、言葉を紡ぎはじめた。

「遼佐のことです」

「えっと……それは、外国行くと、日本人にも外国風のあだ名が付けられてるとか、宗教上の理由で付いた洗礼名とかミドルネームとか、そういうこと？」

「いいえ」

声屋は梨香の心の理解が追いつくように、ゆっくりと話す。

「我々の知る『遼佐恵美』の、本当の名です。彼女の本当の名は、エミリア・ユステイナと言います」

「……ちよつとよく分からないんだけど」

梨香の表情には、明確に困惑の色が浮かんでいた。

「本名って……エミリア・ゆ、ゆ、ユステイナ？ それが恵美の、本名？」

「はい」

「恵美って、日本人じゃなかったの？」

「そういうことです」

「……あ、そ、そうか、お父さんが外国の人ってことは、要するに生まれと育ちは外国だけど、サッカー選手みたいに日本に帰化して日本人の名前を……」

梨香が無理やり引き出した想像は、西屋の子想通りだった。

梨香を落ち着かせるためにゆつくり首を横に振ると、西屋は梨香に目線の高さを合わせる。

「いいえ、違います。遊佐の……エミリアの故郷は、地球上のどこにもありません」

「……どういうことよ」

「その前に……鈴木さんは、映画をご覧になりますか？ ゲームでも構いませんが」

梨香は、今の話題に全く関係なさそうな質問に、不信任を募らせる。

「と、突然何よ。ゲームは小学生以来やってないけど、映画は結構見るよ」

「なら、こう言えば概念は理解していただけるでしょう。遊佐恵美、エミリア・ユステイナは、地球人ではありません」

「……チキユウジン？」

「正確ではありませんが、分かりやすい言い方をすれば、遊佐は宇宙人です。この地球のどこ

でもない、はるか遠い星から、地球にやってきた、異界の人間です」

「……バカにしてるの？」

当然の反応だろう。

怒りを孕んだ反応も、悪魔の予想通りだ。普通の人間の、自然な反応だ。

「この話を信じていただけないなら、私はもう、鈴木さんがご覧になった現象を説明することができなくなります」

「私が見た………って」

梨香は、はっとして悪魔の姿を見る。

先ほどよりも一層強くなった風雨が叩きつける窓から飛び出した鈴木乃と漆原。

外から現れて、空に飛び去った真実。

「……これから向かいの家まで、どう見たって十メートル以上、助走も無しに飛べる人間」が、この世に、地球上にいますか？」

「……………」

梨香は、何度も悪魔の顔と窓を交互に見る。

やはり、自分の理解を超えた現象を説明されて心がそれに追いつかないのだ。

千穂のようにいきなり強烈な現実を目の前で見せつけられれば、まだ違ったかもしれない。

だが梨香は、今日まで何も知らず、まだ「本当のこと」をほとんど見ていない。

「鈴木さん」

「つむぎ」

書屋の呼びかけに、髪香は喉を鳴らして煉み上がった。

「あ……あ、あ……」

先ほどの気丈な様子から一転、「未知の現象」に対する恐怖が体を縛っているのが分かる。

声が、うまく出せないのだろう。

「で、でもそんな……嘘、だって、うるし……すすの……まおう……」

名前を結ぐ。

目の前で見たものを、反駁する。

「う、嘘でしょ？ 冗談でしょ？ あ、フザけてんの？」

それでも、持ち前の強い心で、なんとか自分の意識の物を守ろうとする。

「そ、そんな話信じられるわけじゃない、まだ鈴乃ちゃん達が、魔法使いとか超能力者だつて言われた方が信じられるわ！ そんなの世界中にいくらでも……」

「ですね、私も鈴木さんの立場だったら、そう言うと思います」

「しょ、証拠見せないよ！ そ、それこそ宇宙人だとか言うくせに、バイトして貧乏暮らししてるなんておかしいじゃない！」

「……必ず言葉もあります」

芦屋はこんな場合だというのに苦笑してしまふ。

「でも、宇宙人も、米を食うためには働かないとならないのです」

だからこそ、こんなことでも無ければ梨香に正体が露見する（*アカリクミ*）ようなことはまず無かつただろう。

だが、所詮（*しよせん*）は異世界の者同士。本来出会うはずのなかった者同士だ。

ここで芦屋が悪魔の姿に戻ることができたならこれ以上ないくらいの証拠になるのだが、残念ながら今の芦屋にはそれができない。

「今は、確たる証拠をお見せすることはできませんが……そうですね、鐘月鈴乃が帰ったら、責任を持ってきちんと鈴木さんに証拠をお見せしましょう。まあ鈴木さんが、こんな胡散くさい話を最後まで聞いてくださるのなら、ですが」

「……」

梨香は答えない。疑念の眼差し（*うぎげん*）のみを返してくる。

「（信じてもらえないのも無理はない。私だって、エンテ・イストラで聞かされたら一笑に付す。

こんな、超高度の文明国家が異世界にあるなどとな（）」

ノルドの歌（*うた*）に、芦屋は心の中だけで同意する。

人間の世界。人間の国。人間の文明。

日本の全てが、人間よりも生物的地位に立っていたはずの悪魔達が（*あくま*）永劫に手の届かない遠か

未来の現象だった。

「（真奥は、貴様到我々の正体を明かしたのか？）」

「（……いや。だが、人間でない、ということとは、大体想像はついている）」

考えてみれば、貴屋はまだノルドに名乗ってもない。

惠美の失踪とノルドの出現は、貴屋達魔土城の面々の、間違っているけれども悪くない、そんな日常の崩壊の象徴だった。

「（ついているが……自己紹介をしてもらうのは、また今度になりそうだ）」

「ん？」

貴屋と梨香の成り行きをただ眺めていたノルドが、突然厳しい目つきになって立ち上がった。

貴屋がかつて商店街の横丁で手に入れた「管轄つ子万歳！」とプリントされた長袖シャツを着たまま立ち上がったノルドは、足音を立てずに窓際に移動する。

足音はせずに結局家鳴りがしたが、貴屋はノルドの動きにつられて窓の外を見て、

「!!」

目に入ったものに、一気に全身を緊張させる。

もはや台風と変わりのない暴風雨の中、外はさきほどまで人っ子一人いなかったはずだ。

それなのに。

「（安全に囲まれたな。私は見たことがないが、どこの勢力が分かるか？）」

ノルドの問いに、芦屋は答えることができる。

できるが、その答えは、芦屋にとって信じがたいことだった。

これまで、彼の世界がこれはどの暴挙に出たことがあっただろうか。

「……東大陸の……エフサハーンの騎士団で二番目に位の高い、鎌倉市騎士団の長役だ。一体、どういうことだ。」

芦屋はノルドに答えるというより、ほとんど自問するような口調だった。

アバートの周囲を、異装の騎士達が完全に取り囲んでいる。

一体いつの間にか現れたのだろうか。

どこから現れたのだろうか。

チリアットのときと同じように、バーバリッティアの刺客か？

否。

外にいる異装の騎士達は、全員、人間だ。特殊な魔力は、一切感じられない。

理由は分からないが、自分達を狙ってきたことだけは間違いない。

「な、何よ、二人共どうしたの？」

その瞬間、芦屋は一瞬で我に返った。

そうだ。

自分や真奥、津原にノルド、あるいは鈴乃すら、政情次第でエンテ・イスラの人間達に狙

われる可能性は、決してゼロではない。

だが、聲音は違ふ。

彼女は、エンテ・イスラの事情に一切関係ない、ただの日本人だ。引き込んではいけない。巻き込んではいけない。

「リカさんは関係ない。守らねば。そうだろう」

「あ、ああ」

ノルドの言葉に、音屋は頷く。

「私を狙つてきたか……いや、違ふな。マオウさんに遭わなければ、私はここにはいなかった。君達か」

「（そういうことになる。あるいは、隣の人間かもしれんが、いずれにしろ今この建物にいるのは、私達三人だけだ）」

不気味な一団は今のところ動く気配が無いが、あの人数になだれ込まれれば今の音屋には勝ち目が無い。

「（君は、戦えるか?）」

「（往時ならあの程度の人數、何ほどのことはないが……今は）」  
我ながら情けない返答だ。音屋は歯噛みする。

「……私も、正式に訓練を受けたわけではないから似たようなものだ……せめて、タバサが

「……アシエスが帰ってくれば、あるいは……」

ツバサリアシエスとは、真奥と一經にいたあの女性のことだろう。

だがどういう経緯かは分からないが、彼女は真奥と共に、恐らく千穂の救援に向かっている。そのとき、気づいた。

外の集団が全員東大陸の人間なら、その裏で糸を引いているのは間違いないオルバ・メイヤーだ。

そして千穂の学校が何者かの襲撃を受け、恵美がいない今、救援に向かうのは鈴乃が、いざというときに底力が桁違いの真奥だ。

漆原の行動だけは読めないが、彼は時折、魔力以外の力を源にして術を用いることがある。いずれにしろ、今現在、日本で戦う力を一切持っていないのは、たった一人だけだ。

「東大陸……か」

苜屋は嚙みしめる。

危険なのは、恵美や鈴乃ばかりではなかった。

千穂の学校での騒動は、騒動。

敵の、オルバの、バーバリッティアの狙いは、悪魔大元帥アルシエルだ。

## 第

「うええ……酷い雨……向こうはこんなじゃなかったのに」

彼等駅に降りたその女性は、横殴りの雨にげんがりした様子を見せる。

「タタっちやおうかな。でも確が駅からもそんな遠くないんだよね、もったいないかなあ」  
駅周辺地図の目の前で、キヤスター付き旅行靴の上に大きなショルダーバッグを置いて、駅からの道で悩んでいるらしい。

だが地図と見比べるために手に持っているのは、地図やメモや携帯電話の類ではない。  
なんと税務書だった。

「よし！ タタろう！ 濡れたくない！」

しわだらけの税務書をショルダーに無造作に突っ込むと改札外のモールを抜けて、ガードをくぐる道に出て、タタシーを揃ええるために周囲を見回したとき。

「わぶっ」

風向きが変わった。

その瞬間、鼻をヒタつかせる。

「……なんじゃこりや？」

首を傾げると、考え込むように顎に手を当てて、「その臭い」がした方向に向き直る。

「あ………」

やがて何かを感じ取ったか、一つ頷くと露骨に嫌そうな顔をした。

「こりや、タタれん。くそ。確かお風呂無いんだよなあ」

心底嫌そうにボヤくと、その人物は駅の中に逆戻り。

設置されたコインロッカーにすべての荷物を放り込むと、

「うっひやあああああああ」

叫び声を上げながら、大雨の狂塚に、傘もささずに突入する。

無造作に束ねたボニーテールと、健康的に日焼けした肌があつという間に雨に染まり、そして、その姿は雨煙の中に溶けていった。

## ※

同時刻。

真裏とアシエスは、途中の寄り道はあったものの、無事、千穂の学校である笹幡北高校のすぐ近くまでやってきていた。いたのだが、

「うおおお!!」

真裏は怒声を上げて嵐の壁に空撃するが、人間の男の脚力では暴風の中で立っていることすらできず、アスファルトの道路をころころ転がされた上に電柱に激突してしまう。

「つてええええ!!」

「こりやエライことダー!」

擦り傷やら激突やらで痛みに悶える真裏を、まさしく他人事のように見ているアシエス。

「くっそ! ここまできて! 中の様子がさっぱり見えねえ!」

外から見ると、箕輪北高だけが入道雲に吞み込まれてしまったかのような有様だった。

高校の敷地を円形に囲むように雲がかかり、人の足を全く寄せつけない。

周辺で目立った被害は当初危機したほどではなく、電線が一本切れているだけなのが不幸中の幸いか。

だが周辺に被害が無いからといって、学校の中がどうなっているかはまた別の話だ。

「なんだかマオウ、タロウないなあ」

「うわ、ムカつく」

前髪が風圧で逆巻いているのに、全く変わらぬトがけた表情で肩を練めるアシエス。

「それでよく、私にアバートに帰れと言ったネ」

「お前やノルドに万が一のことがあったら、本当に打つ手無くなるからな!」

真裏は、ここまで来ればあとは自分と鈴乃が協力して事に当たればいいと思ひ、アシエスに

はアパートに戻るよう命じたのだが、

「ダイジョーブウ？ 私、いた方がよくナイ？」

「何かすんげえムカつく！」

真奥が、高校に入れないのだ。

人間の足腰は、風速が二十メートルにもなれば、立っていることすら困難になってくる。

そして明らかにこの風の壁はそれ以上の速度で渦巻いており、狂風に生身で突入すると、先ほどのように弾き飛ばされてしまうのだ。

「鈴乃の叔、もう中にいんのかな……」

焦りが募る真奥。

この風の壁の中にいる敵が何者かは分からないが、なにせ最近日本にやってくる異世界の存在は、いかな力衰えたとはいえ魔王たる真奥が手こずるような速中ばかりだ。

アラス・ラムスがいなければ勇者だってただでは済まない相手に、鈴乃一人では、申し訳ないが心許ない。

実際真奥は、鈴乃の本気、というのを見たことがなかった。

真奥とはエンテ・イスラでまさしく手加減なしのガチンコ勝負を繰り広げたので、その実力は身にかけて知っているし、それはアラス・ラムスとの融合でより強化されている。

だが鈴乃は、一度敵対したとはいえ、そのときの真奥は裸一貫パンツ一丁。鈴乃も事情があ

って手加減をしていたので、本来の意味での鈴乃の戦闘能力というのは今もって疑わしい。

大体、オルバのような例外を除けば、聖戦者はそこまでガチンコな戦闘をする機会はないのではないかとも思うのだが、鈴乃は銃子でも、マレブランケの一人くらい一人で皆殺しにしてやるなどと物騒なことを言っていた。

嵐の中の気配を察するにも、とにかく嵐の音がうるさいし雨も耳に入ってくるし、町中のおちおちで警戒を呼びかける消防車がひっきりなしにカンカン言っている。

真奥が到着したときにはもうこの嵐の壁は結構な猛威を振るっていたから、そろそろ誰かがこの異常現象を消防なり警察なりに通報して駆けつけてくるかもしれない。

別に自分の責任ではないのだが、できれば、異常な自然現象が偶発的に起こった程度の認識で日本の皆様に納得していただけるとありがたいのだが……。

「うーん、あのへん」

「あ？」

焦りばかりが募る真奥だが、アシエスが藪から棒に空中の一点を指さした。

「誰かが開けた痕跡がアルヨ」

「どの辺だ！」

適当に指差されても、嵐の壁と雨とその他諸々よく分からないものが色々飛んでいるのでアシエスが一体どこを示しているのやら。

「これ、魔力の嵐だぞ。んで、あの辺を誰かが聖法氣でこじ開けたっポイ。もう一度ガツンとやっちゃえば、多分全部碎くだケルんじゃないかな」

「もう一度ガツンつたって、誰が」

「ダカラ、マオウは駄目だめなんでしょう？ なら私がやるヨ。この中、行きたいんでシヨ？」

「で、できるのか……？」

「んー、ちょっと時間かかっていい？ オトーさんが近くにいないから」

オトーさんは特に聖法氣の受容量が大きいようには感じられなかったが、一体どういう理屈なのか。

「時間がかかるって、どれくらい」

「んー、一時間くらい？」

真裏は強風で倒れそうになった。

「かかりすぎだ！ それならノルドをもう一度遠處に行つたほうがずっと早えよ！」

「じゃそースル？」

「だからお前らが面倒事に巻き込まれるのは困るんだって」

「デモナー、ナマハンカな力じゃあそこは壊れそうにないシ……マオウ、君がヤドリギになつても、聖法氣は生まれそうにないシ」

「ヤドリギ？」

「うん。私もネーサマも、ヤドリギになる人の心の強さで力が決まる」

「ちょ、ちょっと待った！」

真央は慌ててアシエスを止める。

アシエスは、なんだかずいぶんと重要な話を流れて無造作にしはじめた気配がある。

清聴したいのはやまやまだが、それを全部聞いていてはそれこそ一時間では収まるまい。

「今是要点だけ聞くぞ。あのおっさん、ノルドみたいに魔力も魔法気も持たない人間でも、そばにいれば力を引き出せるのか？」

「オトーさんから力を吸うとかじゃなくて、オトーさんの影響で私が元氣出る感じ？」

真央は息を呑む。

それはまるで、自分が魔王に戻るときと同じ、人の心のありようを力に変換しているのと同じではないか。

「じゃ、その対象を、一時的に俺にとかできないのか？」

「できるヨ？」

アシエスは至極あっさり頷くが、すぐに妙に作ったように顔を曇める。

「でもなんか、マオウって嫌な感じがあるんだナア。生理的にウケつけないと言うか……」

「お前こんな非常時に、しかもほとんど初対面の相手に本当酷いな」

面と向かってこんなに明るく生理的に受けつけないとまで言われたのは日本に来て初めての

ことだった。

大体運転免許試験場ではいい匂いとか言ってたじゃないか！

「でも、できるんだな？」

「うーん、だからマオウだと聖法氣じゃないから……」

「なんでもいい！ その、緩びてるところにデカイ力を当てればいいんだろ？」

「マア……」

何やら気が進まない様子のアシエスだが、真奥はその手を握って頼み込む。

「ひゃあー」

「頼む！ 今はなんでも試さなきゃならないんだ！ できることがあるなら力を貸してくれ！

その代わり、そのあととはちゃんと面会見るから!!」

「そ、そう……？ お、男の人にソシナこと言われたの初めてだナア」

ほんの少し、頬を赤らめるアシエス。

「……言っとくけど、お前の『ネーサマ』のこと教えてやるって話だからな？ 変な意味に取

るなよ？」

一抹の不安を覚えた真奥だが、

「じゃあ、マオウ、もうちょっと近くニ」

アシエスに目で示されて、一歩近づくと真奥。

何か特別な手順が必要なのかと素直に一步近づくと真奥だが、

「お、おう……って、おい！」

目を閉じたアシエスがいきなり顔を近づけてきて、真奥は焦って身を引く。

「ななな、何する気だー」

「何って……おでことおでこをゴツツンコ」

いきなり距離を取った真奥に絶対に驚いているらしいアシエス。

想像したことではなかったと真奥はホッとしたが、そんな想像をしてしまったことに対して曰く言い難い羞恥がこみ上げてくる。

改めて、それでも恐る恐るアシエスに近づくと、今度は顔をがちり固定されてしまう。

「今度は逃げんなヨ」

「へいへい」

これからタイマンでもかますような色っぽくもなんともない呼びかけで、真奥の緊張が少しはぐれる。

ゆっくり近づくとアシエスの顔

すると、そこに見覚えのある光が灯った。

紫色の、アラス・ラムスと全く同じ、イエソドの欠片の光。

やはり、アシエスは、そうだった。

「ヤドリギ……か」

アシエスの言葉がふと、額の片隅に上ってきた瞬間、額と額が接触した。

「!!」

その瞬間、まるで熱いものに触れたかのように、今度はアシエスが真奥からぱっと飛びずさつてしまう。

「ど、どうした……?」

何か手続的な問題が起こったのだろうか。

不安になる真奥だが、アシエスはこれまで見せたことのないような驚愕の表情を浮かべ、口を戦慄かせて言った。

「ま、マオウ……君……君ハ……」

「お、おう」

アシエスの額が一際強く輝いた。

「……マオウは、魔王だったのかー!!!」

「何言ってるんだお前」

もう突っ込むのも馬鹿馬鹿しい。

概念送受のような力が働いたか、額を接触させたことでなんらかの魔術的な力が発動したの

が分からないが、アシエスは突然真奥の正体を看破したらしい。

だが、その糾弾の一言一句が、どうしても聞抜けに聞こえてしまうのは否めない。そりや、『マオウ』なんだから『魔王』だろう。

「今そこでそれを本気で驚くなり！ マオウが魔王で何が悪い！ まんまだろうが！」

「もつとヒキれ！」

「お前らに言われたくね……うわっ！」

真剣に下らない驚愕の真実についての議論を終えるよりも早く、アシエスの額の光は、全身へと及ぶ。

「ああ……魔王に、悪魔の王に身を任せてしまうンテ……オカーさん、ごめんなさい。私は悪い娘デス」

「俺が魔王とか関係なく別次元の悪人みたいに聞こえるからやめろ！」

どこまでも真実を諍論中傷しなければ気が済まないらしいアシエスは、直視できないほどの光になって突然爆発した。

「うわっ！」

無数の光の粒子になったアシエスは、さらに光を強くして、その全てを真実に降り注いだ。

「え、あ、あれ？ こ、これってまさか！」

アシエスの変化に驚きつつ、真実の脳裏に嫌な予感がよぎる。

紫色の光に包まれながら、真実はこれとよく似た現象を、最近しょっちゅう見ている気がし

た。

いや、光が真奥に吸い込まれるのとは逆の現象。即ち。

「……アラス・ラムスが恵美から出てくるときに、そっくりじゃね？」

多分、そう思ったときには、色々手遅れだったのだろう。

嵐の壁のふもとで、紫色の光の柱が、天も割れよという勢いで空を貫いた。

## 断

鈴乃の大樹とリヴィタオツコの凶悪な爪が正面からぶつかり合い、鈍い音が管轄北高を揺るがす。

空中で繰り広げられる異次元の戦闘に、千穂の目はあまり釘付けではなかった。

時折、屋上に立って空の戦いを見上げている漆原と、その後ろにある、リヴィタオツコが壁を壊した屋上に通じるドアに目を向けている。

「そんなに気にしなくても大丈夫だって。扉を封印するくらいは僕の聖法氣も持つからさ」

千穂の視線に気づいた漆原が、安心させるように背後の鋼鉄のドアをバンバンと叩く。

「な、ならいいんですけど……」

それでも千穂としては心配でならない。

何せ漆原は「随天使」というフレーズが色々な意味でしつくり来る、どちらかと言えば悪魔寄りの存在だと思っていた。

それだけに真っ白な翼を背に、恵美や鈴乃に近しい力を持っていることが不思議でならない。おそらく鈴乃からホーリービタンを譲られたのだろうが、漆原はあれを飲んで大丈夫だったのだろうか。

千穂は自分が飲む量を厳密に決められている。

もとは強い悪魔のはずの漆原も、たった一本飲んだだけで倒れてしまった。

真奥だって、半端な量の聖法氣を摂取すれば体にダメージにしかならないと言っていた。

そのとき、漆原が叩いた音に反応したのか、扉の内側から声が聞こえた。

「誰か、誰がいるのか！ ここを開けなさい！ くそ！ なんで開かないんだ！」

異形の生物の出現に加え学校の周囲が暴風雨という異常事態にも気丈に順応した何人かの教師が、屋上に駆けつけたのだ。

鈴乃の指示もあって、現在高校の全ての窓という窓、ドアというドアを、漆原の法術で封印させている。

生徒や教師などが外に出てきて、万が一にも戦闘に巻き込まれないようにするための予防措置だが、その術を為しているのが漆原である、という点がどうにも千穂には不安なのだ。

「扉の封印術は結構高位の法術だから、ただの人間には破れないよ」

そんな都合のいい術を漆原が持っているのも驚きだし、そもそも術の存在意義が千穂には分らない。

「結構使い所は多いよ。日本に暮らしていると分ないかもしれないけど、人間の王族とか教会とか、自分とこの宝物庫や聖堂にこの術を使って関係者以外は出入りできないようにするとかね」

「……な、なるほど」

術の存在理由については納得した。

だが、そんな術を何故漆原が、しかも法術として使えるのだろうか。

「僕だけじゃない。サリエルだってガブリエルだって多分使える。上位の天使には必須の術さ。そう言われて、僕らは育った」

「そう言われて？」

千穂は一瞬違和感を覚えて首を傾げたが、漆原が空に視線を戻してしまつてそれ以上話してくれなさそうだったので、仕方なく視線を上に向ける。

そうこうしているうちに、鈴乃はあれだけ動きにくそうな着物に一撃もかすらず、ほとんど一方的に戦闘を有利に展開させているのが千穂にも分かる。

千穂に対して高圧的だったリヴィタオッコも、度重なる衝突で既に片腕の爪が使え物にならなくなっていた。

以前、惠美と津原の戦いを見たときには、それこそファンタジー映画もかくやというほど不思議な術や力の応酬だったのだが、今の千穂の目には、鈴乃とリヴィタオッコの戦闘は、どちらかと言えばガチンコの肉弾戦に見える。

そして、小柄な鈴乃が、自分の身長はともある大槌を振り回して、さらに自分の数倍もありそうな体躯の悪魔を一方的に打ち倒している姿はいつそ爽快でもあった。

それでも千穂の目にも明らかな程に、鈴乃は手加減をしていた。

何度も背後を取ったり、窮迫り合いで打ち勝ったシーンがあるのに、リヴィタオッコにトドメを刺そうとしない。

ここからでは聞こえないが時折会話をする姿も見えて取れるし、もしかしたら憎悪を促しているのだろうか。

「……魔だな」

「え？」

同じように上空の戦いを眺めていた津原が、首を傾げる。

「リヴィタオッコさ、戦い方が、マレブランタっぽくない」

「どういうことですか？」

「戦い方が、ヘタクソすぎる。ていうか、多分全方じゃない」

「それは、アレじゃないんですか。日本だから魔力をそんなに使えないみたい……」

「だったら、あんだだけボコボコにされてるんだから、こんな大がかりな風のバリケードなんか、さつきと解いちゃえばいいんだ。その分の魔力を戦闘に回せばいいのに、なぜそうしないのかってのが一つと……」

確かにそうだ。

どう考えても高校を取り巻く風はリヴィタォッコの力によるものだし、このエネルギーを鈴乃にぶつけければ今のように一方向的にやられることにはならないだろう。

「ま、まだ何か……」

「チリアットのときに感じた違和感と同じさ。なんであいつ、悪魔の姿保ててんだ？」

「……えっと」

「僕がやってみたみに、周辺から無尽蔵に負の感情を集められるような状況じゃない。かと言ってマレブランケの頭領格とかが、真実みたいな魔力保持能力を持ってるわけがない。それなのにこんな大がかりな術を発動させたまま姿を保てるなんて、絶対おかしい」

「で、でもいいじゃないですか。もし全力になったら、鈴乃さん危ないかもしれないし……」

何やら論調が悪魔を庇護する形になっているが、向こうが弱いままにいるならそれは好都合のはずだ。

「や、多分、全力でもベルが勝てるよ。ただ、それでも今ほど一方向的にはならないくらいまで持っていけると思うんだけどな。あのままじゃ、本当にベルが一方向的に潰して終わりだ。なん

のためにこんな面倒なことをあいつがやってるのか、まるで分からない」

「なんのために……」

そうだ、リヴィタオツコの言葉に惑わされて見失いそうになっていたが、彼はわざわざグートを使って日本に来ている。

それが見込みの薄い負の感情収集だけだとはどうしても思えない。

カミーオは真奥を探し、チリアットは聖剣を探し、ファーフアレルロは真奥と声屋を連れ帰ろうとした。

ならばリヴィタオツコは、日本に来た悪魔達が悉く目的を達成できないまま帰還した現状で、一体何をしに来た。

「それに、エミリアがいないこの状況でつても気に食わない。僕達が来る前に、あいつなんか変なこと言っただけだったか？」

「変なこと……」

一番変なのは、どう考えたってリヴィタオツコの名の発音を練習させられたことだったが、

「そういえば……魔力が集まる美味い任務とか言っていたのに……」

千穂は十数分前の会話を頭の中で反芻する。

リヴィタオツコは、ここで何をすると言っていた？

「大量虐殺をするつもりはない。ただ、ここで分かりやすく帰れる……確か、そう言っ

した。でも、実際にすごい雷が……」

「雷って、僕らが入ってくるちよっと前のあれ？」

「え？ ええ」

「全然すごくなかったけど」

「え？」

「何か雷電みたいな雷が二、三本、近所の家のアンテナとかマンションの避雷針に落ちただけだったけど？」

「そんなんじゃないですよ？ 日も開けてられないくらいすごい稲光が空中に……」

それでも、周囲の家屋は、千穂やリヴィタッコが想定したほど被害を受けなかった。

千穂はそれを、日本の落雷対策の進歩だと思っていたが。

「多分、幻覚魔術じゃないかな。マレブランケの得意技だよ」

「げ、幻覚？」

「あいつら南大陸で、屍霊術と幻覚魔術で実体の無いゾンビとか幽霊みたいな大量に作り出して動揺した人間の隙突くようなえげつない攻め方してたから、多分幻覚でお前一人に雷を見せただけじゃないかな。実際そんな雷撃ったら、どれだけ魔力が必要になるか」

「……」

「まあ見ての通り嵐の壁は本物だけど、マレブランケなのに天候操作ができるだけで相当なも

んだよ。頭領格として、古様なんだろーね。でもそもそも一族の中でも抜きんでたマラコーダ以外は、大体はチリアットみたいに肉体派。見てて分かると思うけど、僕みたいな魔術、ほとんど使ってないだろ？ まあ、魔力を節約してるだけかもしれないけど、ならなおさら天候操作をやめない意味が分からない」

「そ、そういえば……」

千穂は漆原らしくない洞察力に感心しながらも、答えを導き出せるはずもなく首をひねるが、「分かりやすく暴れる、か……でも、一体何から目をそらすためだ？」

「漆原さん？」

「……あ」

漆原の声で再び上空を見た千穂。

そこには、がら空きのリヴィタオツコの背に全力で大槌を振るい、学校の屋上に叩き落とそうとする鈴乃の姿があった。

「せえいっ!!」

気合一閃。ホームラン級のクリーンヒットでリヴィタオツコの肉体が閉石のように落ちてくるのを、

「危ないなあ」

さっと落下地点の真下に回った漆原が両手を掲げると、

「うぐっ……っ！」

リヴィタオッコがうめきと共に空中に静止する。

あのまま叩きつけられていたら旧校舎の屋上が崩れ落ちかねない。漆原がなんらかの**法術**的手段で受け止めたのだろうか。

「おい、マレブランタの頭領。あいつ、あれでもまだ全力じゃないよ。何隠してんのか知らないけど、このままだと死ぬよ？」

「ぐ……んぐ……」

話す気が無いのか、それともダメージが深すぎて喋れないのか分からないが、リヴィタオッコは漆原の手の上でうめくだけだ。

「ふうっ、口ほどにもない」

一方の鈴乃も、やんわりと屋上に着地する。

大綱を直振りしてから、ゆっくりとリヴィタオッコに歩み寄る。

「さあ、いい加減、この学校を解放しろ。そうでなければ、最終的に私は貴様の命を奪う判断をせねばならん。できれば、それはしたくない」

「……救世ばいい。貴様は人間だろう」

リヴィタオッコは苦しそうに掠れた声で言うが、鈴乃は首を横に振る。

「悪魔だから、異端者だから。そういう理由で命を奪うことは、もうやめたんだ」

「鈴乃さん……」

「嵐の雲の衝を解けば、貴様は私ともう少し互角に戦えていたはずなのに、それをしなかった。再三の私の警告にも耳を貸さなかった。何か、別の目的を隠しているな？」

「……」

鈴乃も、漆黒同様にリヴィタオッコの戦い方が不自然であることには気づいていたらしい。

「私が貴様を殺すのは、貴様が明確に、人に、世界に、悪を為したと判断したときだ。私は日本で柔軟な思考を学んだ。私が戦うのは『悪を為す敵』だけ。『人権』が違っただけで殺し合うのはもう沢山だ」

「く……くく……そうして、すべてが後手に回って後悔するぜ」

「信じずに後悔するより、裏切られて後悔する方がいい。最近何かと人間関係が複雑でな。殺してしまつて、後で敵にも理があつたのではないかと思ひ悩まなくないからな」

そして鈴乃は、未だ雨の乾かぬ髪を陽光に煌めかせて言つた。

「それに私の仲間達は、後手に回つたからと言つて手遅れになるような戦利品連中ではない」

鈴乃はそう言うとき、大槌を背の形に戻し、懐にしまう。

濡れたままの髪ではどのみちうまく纏まらないからだ。

「……そうだろうか？ 千穂殿」

振り向いて千穂に同意を求める鈴乃に、千穂は呆氣に取られる。

いや、千穂は鈴乃の言う「仲間」が誰のことを指すのか分かる。いや、指してほしいと常々思っているのだが、鈴乃の口から直接そんな言葉が出るとは思わなかった。

「そ、そうですわね、そうですよわね!!」

なんだか踏しくなった千穂は、ぐっと手を握って思わず飛び跳ねてしまう。

「……なんだかなあ……」

意外と空気の読める男、漆原も、一応二人の言わんとしていることは分かっていたが、それを素直に受け入れる性格でもないし、かと言って水を差すのも面倒くさい。

「で、この周りの嵐の壁、どうす……」

話を先に進めようとしたその瞬間、漆原の視界が一瞬で光に染まる。

「わっ!!」

「なんだ?」

「え?」

漆原と鈴乃と千穂は、瞬時に空を振り仰いだ。

三人が立つ屋上に、突然陽光が降り注いだのだ。

まるで学校を避けるかのように嵐の壁の内側の雨と嵐がやみ、遠く高く青空と太陽を見上げることができた。

「……お前、何かした?」

漆原が眉を皺めて、リヴィタオツコに問う。

どう考えても自然現象ではない。その証拠に、学校を取り囲む嵐の雲はそのままなのだ。

「……」

だが、リヴィタオツコは答えない。彼から目を離さなかった鈴乃は、首を横に振る。

「気に入らないな。何が起こる？」

漆原は顔を皺めて天に上げた太陽を見上げ、そのまぶしさに顔を歪め、光を遮るように手をかざす。

まるで嵐の空に開いた巨大な瞳のように不気味に地上を見下ろす太陽の中に、

「ん？」

漆原はごくごく小さな黒い点を、太陽に張りついた塵芥のような黒いものを見つける。

「なんだ？ 太陽の中に……」

その小さな影が、徐々に徐々に大きくなって、

「っ！」

漆原は年に何度もしないような真剣な表情で目を見開くと、支えていたリヴィタオツコを適当に放り投げ、猛スピードで鈴乃と千穂のそばに就躍する。

「何……？」

「うるし……？」

漆原の唐突な動きに鈴乃も千穂も驚くが、その疑問を呈するよりも早く、

「ふうっ!!」

漆原が白い翼をいっぱい広げて輝かせる。

「……」

鈴乃と千穂はただ息を呑むしかできなかった。

太陽の光の中から、突然鈴乃と千穂のいた場所めがけて、光線と見まがうばかりの灼熱の炎が降り注いだのである。

「ルシフェルっ……!!」

それを、漆原が受け止めた。

真正面にかざした手の先で、リヴィタストーンを受け止めたときと同じように、炎を掌わずか数センチのところで食い止め、背後の千穂と鈴乃を庇う。

だが、その炎の威力はどうだろう。

漆原が白い翼をいっぱい広げ、全身を輝かせて防壁に全ての力を回しているのに、その力を越えた熱風が鈴乃と千穂の髪を轟々と逆巻かせる。

「ぐ、あ、くそ……っ! あいつ、何考えてんだよ!」

珠の汗と鼻管を額に浮き上がらせながら、漆原が叫ぶ。

「ベル! 佐々木千穂を逃がせ! 持たない!!」



「千穂殿、頼まれ！」

千穂の返事を聞かず、鈴乃は千穂の腰をタツクルするように抱え、抱えられた千穂が氣絶しそうな勢いで座上から飛び立つ。

「う……えっ」

胃の中のもものが逆流しそうな勢いで空中へ抛い上げられた千穂は、涙目の端でそれを見た。壁上と校内を結ぶドアが、歪んでいる。

漆原が法術で封鎖し、鋼鉄でできているはずのドアが歪んでいる。

それはどの熱なのか。そんな熱を支えている漆原は大丈夫なのだろうか。

巨大な火炎放射器のような火線を支える漆原の小柄な姿が熱の陽炎で歪んでしまっている。

「こ、これはなんだ?」

ようやく熱が届かない高さまで退避した鈴乃が速度を緩めたが、ここまで来ても炎の発射元を確認できない。

「鈴乃さん! 漆原さんは!」

「分かんらん! だが、今下りれば私はともかく、千穂殿は蒸し焼きになるぞ!」

「そんな……っ!」

千穂はうめくが、状況はさらに悪化する。

炎から離れた場所でも、巨大な影がのそりと立ち上がる。

「遠原に放り出されたリヴィタオッコが息を吹き返したのだ。」

「鈴乃さん、あれ！」

「分かってる！ 千穂殿、校庭に下ろすぞ！」

千穂を少しでも危険から遠ざけようとする鈴乃は、炎と遠原に背を向けて地上を目指すが、

「さ、貴様らはっ!!」

空中で、その行く手を遮った者がいた。

それは、今まで魔突に日本に現れた悪魔のリヴィタオッコと戦っていた鈴乃をして、信じられない相手だった。

「う、嘘っ」

鈴乃に抱えられた状態で鈴乃の敵を見た千穂は、絶望的な気持ちになる。

「そこをどけっ！ 天兵連隊！」

鈴乃が怒号を発するが、敵は動かない。

五人の天兵連隊が、鈴乃を地上に下ろすまいと包圍しているのだ。

「ま、まさかまたガブリエルさんですか!?」

天兵連隊、天使の兵隊達。

今まで焼死となく大天使ガブリエルと共に日本に現れているが、鈴乃は知る。

「兵装が違う……ガブリエルの兵達は、もっと適当な格好をしていた」

五人の天兵達は、重量感のある赤い全身鎧を身に纏い、統一された規格の黒い金属で作られた三叉の槍を携えている。

てんでバラバラで粗製乱造された武器を持っていたガブリエルの天兵とは見た目からして違った。

全員が三叉の槍の穂先を鈴乃と千穂に向けている。

脅しているということはすぐに殺される心配は無いが、それだけに鈴乃には焦りが生まれる。マレブランケの頭領格と、天兵連隊が全く偶然に同じ場所に現れるはずがない。

ということとは、やはり。

「貴様ら……貴様ら、本当に……」

鈴乃の声には、悔しさすら滲んでいた。

目的は今もって分らない。

だが、もはや現実から目はそらせない。

東大陸で暗躍する悪魔の団に、天界と天使達が加担をしている。

信じ難いことだし理由も分からないが、それしかもう考えられない。

「鈴乃さん……」

「千穂殿、動くな。くそ、何があっても動揺しないと決めていたのに……っ」

抱えられた千穂には見ることはできないが、鈴乃の声には悔しさと涙の色が滲じっていた。

「黒鉄の三叉の槍、赤い鎧、鉄と、赤。ルシフェルめ、何がまず動かないだ」

鈴乃は、眼下の校舎屋上で今まさに炎に飲まれんとしている漆原にさらに鞭打つように悪態をついた。

「太天使カマエルっ！ 一体何をしようとしている」

天兵達がその瞬間、一気に殺氣立つ。

その反応からも、彼らの主が鈴乃の推理通りであることは明らかであった。そして鈴乃の声が聞こえたわけではないだろうが、

「す、鈴乃さん！」

千穂の叫びを掻き消すように漆原に襲いかかった炎が膨大し、そして、

「うがああっ!!」

千穂と鈴乃と天兵達が見下ろす校舎の屋上で、小さな影が閃光と暴風に吹き飛ばされ、校舎の縁ぎりぎりに叩きつけられるのが見えた。

「漆原さん！ 漆原さん!!」

呼んでも聞こえるとは思えないが、それでも千穂は叫ばざるを得ない。

それだけでは終わらなかった。

リヴィタオッコが、満身創痍の体を引きずりながら、漆原が倒れた場所に近づきはじめ。千穂は恐怖で息が止まってしまう。

折角鈴乃が、千穂の理想に一步踏み出してくれたのに。

悪魔の漆原や、声原や、真里を、仲間と言ってくれたのに。

いきなり、こんな訳のわからないことで傷つけられて、また全員がバラバラになってしまうのか？

「っ!!」

千穂は、涙に濡れた目で、さらに上空を見る。

漆原を吹き飛ばした者の姿を、今ははっきり見ることができた。

天兵達と同じ、赤い全身鎧に、リヴィタオッコほどではないにしろ、ガブリエルの長身と張り合うほどの巨軀。

「まさか……お前がこんな茶番に付き合ってるとはね……」

聖法氣を全て使い切り、物理的にも焦げついた家庭の不良習慣に戻ってしまった漆原は、倒れたままの無様な姿でそれでも目を空に向ける。

「あとでベルや依々木千穂の糾弾が怖いよ。僕、お前が動かないって断言しちゃったし」

「……」

全身鎧に、頭もフルフェイスの鉄仮面を被った、どう見ても天使と言うより鬼將軍と言った様相の、

「……カマエル、一体、どういう、心変わりなんだ？」

大天使カマエルは、そんな漆原の言葉を無視し、リヴィタオッコを見ると、軽く頭をしや  
くった。

「……ちっ」

リヴィタオッコは舌打ちをしつつも、素直に「指示」に従う。

漆原をどうにかするのかもしれないや、傷ついた翼を広げると、漆原のことなど無視して、鈴  
乃と千穂に向かつて真っ直ぐ上昇してくるではないか。

「悪いな、嬢んこ」

天兵に牽制されて動けない鈴乃。

彼女に抱えられた千穂に、リヴィタオッコは一對一だった最初の調子から一転、気まずそう  
な様子を見せる。

「出せ。分かってんだろ」

リヴィタオッコの、爪が砕けた悪魔の掌を、千穂は凝視する。

「イエソドの欠片、お前が持つてるんだろ。それだけ渡せば俺達は引き上げる。出せ」

千穂は思わず制服のポケットに手を触れるが、

「出すな千穂殿」

鈴乃の叫びに身を凍ませる。

「これ以上、絶対に娘らにセフィラを渡すな！ ガブリエルやラダエルがやったことを思い出

せ！」

「で、でも、鈴乃さん、凄原さん……」

「虚勢を張んな。今のてめえに何ができる」

「……いざとなれば、千穂殿の欠片を私が奪って飲み込んでやる」

「人間を解体するのを、俺達悪魔がためらうと思うか？」

千穂を扶んで殺氣立ったやりとりが続く。

「素直に渡すくらいなら、その方が何倍もマシだ！」

鈴乃の頑とした声も、このときはなんの役にも立たなかった。

ただ、鈴乃と千穂の二人の耳に聞こえたのは、冷酷な一言。

「……だとよ」

その声は、叫んだ鈴乃に向けられたものではなかった。

「うぐっ」

「す、鈴乃さんっ？」

千穂は、全身が鈍く擦られるのを感じた。

それと同時に、鈴乃の湿ったうめき声。

「っ？？」

千穂は視界の端でとんでもないものを見た。

鈴乃の腹に、天兵の槍が真っ直ぐ突き立っている。

「鈴乃さん……っ……っ……」

突然の天兵の暴挙に千穂は悲鳴を上げるが、すぐに大きな慣性が働き、目の前に迫っていたリヴィタオッコが遠ざかる。

鈴乃が空中で飛びのいたのだ。

「す、鈴乃さん!?」

「案ずるな……い、石突きだ、かはっ」

苦しげだが、はっきりした鈴乃の声。

「い、イシヅキ!?」

槍の柄風のことがだが、武器に詳しくない千穂の眼裏には、こんな緊急事態なのにシイタケしか出てこない。

「わわっ!!」

が、そんなことはすぐに考えられなくなった。

赤い天兵達が、今度はまさしく槍の穂先をひらめかせて鈴乃に殺到してきたのである。

「お……っのれええええええ!!」

鈴乃は聖戦者らしからの怒号を吐いて、繰り出される穂先を大柄で払い、空中を舞って避け、なんとか五人の天兵から距離を取ろうとする。

だが、ガブリエルの天兵連とは、そもそも練度が違ふのだらう。

統率されたドッグファイトのように一人が常に鈴乃の背後を取り、一人が弱点だと分かっている千穂を狙い、一人が鈴乃を地面に下ろすまいと真下からブレッシヤーをかけてくる。

第一この五人を振り切ったところで、漆原はもはや立ち上がれず、まだリヴィタオツコとカマエルが控えているのだ。

「す、鈴乃さん！ わ、私は、いい、いいですから」

人間にはあり得ない動きで空中を振り回され、舌を噛まないようにするのが精いっぱい千穂。

「ちよ、ちよっと後援する、くらい平気ですが、ら！ お、壁上に落として……私を離せば、もつと戦い、やすく」

「黙っているろ！」

針の穴を通すような曲芸飛行で三本の槍の穂先を回避する鈴乃は叫ぶ。

「奴らの狙いは私じゃない、千穂殿だ！ 今ここで千穂殿を離したら、それこそどうにもならなくなる！ ぐっき」

言っているそばから、鈴乃の足をさらに別方向から現れた天兵の槍がかすめる。

「鈴乃さん！」

「く、くそっ!! 千穂殿、目を閉じろ！」

鈴乃は言うと返事も聞かずに、口の中でかすかな詠唱に入り、そして正面の天兵に向かつて大槓を繰り出しざと叫ぶ。

「光復 瞬間！」

その瞬間、大槓の先端が太陽のごとき強烈な光を放し、鈴乃の正面に立ち上がった天兵の目をくらませひるませる。

「どけええええええ!!」

その隙を逃さない鈴乃は、そのまま天兵のみぞおちめがけて大槓を精いっぱい突き出した。鈍い手応えがあり、正面から敵の気配が無くなる。

「行くぞ千穂殿! 気をしっかり持て!!」

とにかくまずは学校から脱出しなくては。

このままでは学校の人間に累が及ぶのも時間の問題だ。漆原の封印術はまだ継続しているようだが、カマエルは容赦なく学校の屋上を破壊しにかかっている。

千穂一人ならともかく、学校の生徒教員数百人をとて一人では死に切れない。

漆原のことも忘れてはいないが、まずは千穂とイエソドの欠片を奪われぬようにするのが最優先だ。千穂が気絶しかねない勢いで飛空しようとした矢先、やまの閃光の中で、絶望が声を上げる。

「悪いな。マレブランケに、幻術は効かねえよ」

「くっ!!」

真っ白な光の中から現れた巨体は、リヴィタオッコのものだった。

生き残っていた爪が磨突に並路上に現れて鈴乃はそれを回避できなかった。

大槌を振るって行く手を遮る爪を砕こうとし、その瞬間出しかけていたスピードが緩んだ。

「ぐあああっ!!」

瞳を閉じてもお目をつぶる閃光と強烈な重力負荷の中で気を失いそうになっていた千穂は、

鈴乃の悲鳴と、頬にかかる生暖かい液体の感触で、真正正銘、意識が真っ白になった。

それは時間にしてはほんの数秒だったはずだ。

だが、鈴乃が生み出した光がやみ、境界と意識と感覚が戻った次の瞬間千穂が見たものは、

「つつつつ!!!!」

千穂は声なき悲鳴を上げて身をよじる。

が、体が動かない。動かせない。

なぜなら今自分を抱えているのは鈴乃ではない、リヴィタオッコだ。

そして先ほどまで、必死で自分を逃がそうとしていた鈴乃は、

「……手こずらせやがって……」

リヴィタオッコの目の前で、全身重みみれになって屋上の真ん中に倒れていた。

「す、鈴乃さん、鈴乃さんっ!!!!」

鈴乃の唇口は、千穂の目にも分かるほどざっくりと裂け、着物の裾から覗く足にも深い裂傷が走り、血がとめどなく流れ出している。

何より痛ましいのは、背を外した鈴乃の髪と着物が血に汚れた草のようにコンタリートの床に広がり、そんな彼女を地面に際にするように、着物の端々を天使達の槍が固い地面に刺し止めているのだ。

鈴乃の武器である太極は、倒れた彼女の手の少し先で、なんの力も持たない髪飾りに戻っていた。

「あ……ぐ、ち、千穂、どの、うぐ……」

それでも鈴乃は、うめきながら千穂に手を伸ばそうとする。

「鈴乃さんっ……うぐっ!!」

千穂も必死で手を伸ばそうとするが、当然リヴィタオッコがそうはさせない。

さらにリヴィタオッコは伸ばされた鈴乃の手を蹴飛ばすと、憐れむように鈴乃を見下ろす。

「何故そこまで逆らう。お前は大法神教会の聖職者なんだろう。あれも、そいづらも、天使で、お前らが崇める神様の僕だぜ? お前が逆らってなんの得もねえだろうに」

鈴乃は血に汚れた顔で、痛みをこらえながら、リヴィタオッコを睨み上げる。

「こんな……こんな真似をする天使など、こちらから、願い下げだ!! 私が崇拜するのは、人の世を安寧と正義に導く、正しい信仰だけだ!!」

叫べば叫ぶほど、鈴乃の傷口から血が流れる。

千穂は身震いして声が出せない。

「悪く手を結び、人に害を為し、世を乱す天使が天使であつて、たまるかああっ!!」  
 「結構。背中に一本筋の通った戦士は嫌いじゃねえが、今はどうしようもなくてな」  
 まるで申し合せたように、天兵がリヴィタオッコに歩み寄る。

「おい、嫌んこ、悪いことは言わねえ、出せ」

リヴィタオッコの忠告はしかし、千穂の耳には届かない。

感覚がマヒしてしまっている。

「いいか……がはっ……千穂殿、絶対、渡すな……」

「す、すず……」

「悪いことは言わねえつつたろ。何があつても知らんぞ」

絶望的な状況で、リヴィタオッコと天兵達が千穂と鈴乃に迫る。

天使の姿をした、魔の手が。

## 後

「なんなの……なんなのよこれっ!!」

梨香の叫びが、笹塚の街の片隅にこだまする。

雨はますます力を強め、グイタ・ローザ笹塚の前庭を濡らす。

見たことのない異装の集団。手に握りしめた携帯電話は、なぜか圏外。

そして。

「芦屋さん！ ノルドさん！！」

雨に濡れた土の上にへたり込む梨香の目の前で、芦屋とノルドが傷つき倒れ伏していた。

「なんなの！ あんた達なんなのよ！！」

パニクた状態で、錯乱したように梨香は役に立たない携帯電話を投げつけた。

それは、梨香の目の前で芦屋とノルドを打ち倒した長身の男の胸に当たって水たまりの中に落ちる。

「しくじったなあ。まさかのノルド・ユステイナがいてラッキィ、とか思ったのに」

異装の集団の中で一人だけ、古代ギリシャの彫像のような格好をした長身の男は、心度困ったように肩を揺る。

「日本の一般人がいたのは計算外だあ……どうしよう」

困り果てたようにそう言いながら、梨香に一步步み寄るが、

「あ、あ……」

梨香は腰が抜けたように動かない。

無理もないことだった。

全身鎧で完全武装の異装の集団だけでも恐ろしいのに、屈強な男性である芦屋とノルドが一瞬で打ち倒されてしまうのを目の前で見てしまったのだ。

純粹な暴力に全く免疫の無い梨香は、恐怖で全身が動かなくなってしまったのだ。

「うー、女の子を怖がらせるのは趣味じゃないんだけど……あのさ、分かってほしいんだけど、君には時に危害を加える気は……」

「こ、来ないで、来ないでっ!! 助けて! 助けて芦屋さん!!」

「……これ僕、一体なんだと思われてるんだろう……強盗じゃないよーあ痛っ!」

庭の石やら何やら、手近なものを無理やり投げつけようとする梨香だが、そんなものではどうにもならない。

「ま、言い訳できる状況じゃないか。ごめんね、泣いても騒いでもいいから、もう少しだけ我慢して。おい」

長身の男は背後の集団に何事が指示すると、異装の騎士達が四人、前に進み出てくる。

「ちよっと……ちよっと、何するの……」

騎士達は、倒れてビタリとも動かない芦屋とノルドを担ぎ上げる。

「どこに……どこに連れていく気よ……」

「連れていく? 違うよ。返すんだよ。元いた場所に」

「元、いた？」

「ま、君は気にしないでいいよ。あ、警察とかに言っても無駄だから。僕らそういうのに捕まったりしないから。ま、ちよつと交通事故に遭ったとでも思つて諦め」

「うん」

「って、あれ？」

今の今まで自分に怯えて全身を硬直させていた梨香が、一息で立ち上がると戸屋を抱え上げた異装の騎士に觸みかかった。

「ワ」

梨香の予想外の動きに、騎士達も動揺する。

「どこに、どこに連れていくのよー」

「(……………!!)」

「ワケ分かんないこと言うな!! 戸屋さん返せ! 返せこら!!」

「ちよ、ちよつとお嬢さん! びっくりすんなあ、ちよつとやめ」

「あっ!!」

纏りつく梨香を、騎士が振り払う。

あっけなく吹き飛ばされ、顔から水たまりに叩きつけられてしまう梨香。

「あ、おいちよつと!」

そのとき、男が慌てふためく。

梨香を振り払った騎士が、戸屋から手を放すとあろうことが剣を抜いたのだ。

「やめろバカ！ 余計なことすんな！」

長身の男が止めに入ろうとするが、とても間に合う距離ではない。

梨香が這いつくばった状態で顔だけ振り向くと、そこには日本に生きている限り見るはずのなかった、凶器と、殺気と、自分の命が消える瞬間があった。

「っ！」

梨香が息を呑む暇もなかった。

雨を弾きながら振り下ろされる銀色の軌跡がやけにゆっくり見え、そして、

「どおおっせええええいあ！！」

大気を震わす大声がしたと思ったら、その途端、梨香に剣を振り下ろそうとしていた騎士がゴムボールのような勢いで真横に吹き飛んだ。

「!?」

「ええ!?」

これには梨香だけでなく、長身の男も驚いた。

鈍い衝撃音と共に、水平に吹き飛んだ騎士は、

「っっ!!」

ヴィラ・ローザ銃塚の敷地を囲むブロック塀にカエルのように叩きつけられ、そのままずると地面に崩れ落ちた。

「な……」

梨香の目に最初に映ったのは、平たいゴム底の靴を履いた、足だった。

その足の出所を追ってゆくと、お手本のような形で腹りを繰り出すデニムパンツ。

黒いシャツに、日焼けした肌、黒いボニーテール。

「……誰かな。どうやって、ここに『入った』？」

へらへらしていた長身の男の顔に、驚りと驚きが浮かぶ。

「どうやって、だって？」

まるでカンフー映画のように、繰り出した脚をそのまま頭の上に持っていくと、優雅に下ろすのは、梨香の見たことのない女性だった。

「自分のシマに入るのに、なんでヨソモンの許可がいるの？」

女性は一瞬笑みを浮かべると、それに触発されたように、異装の騎士達が一斉に剣を抜いて切っ先を向けた。

今度は長身の男も騎士達を止めない。数十人の騎士に剣を向けられているにもかかわらず、日焼けした女性に動じる気配が無いからだ。

「下手に手を出せば、死ぬよ？ 不思議なお兄さん、あんただって例外じゃない」

「……言うじゃないか。あなたは何者だ？」

「このお嬢さん（お嬢さん）もそちらのおじさんも私の知らない人だから、敢えて言うなら……」  
女性はまだ騎士に捕縛された状態の青屋に目をやって、苦笑した。

「青屋君の、元屋い主かね」

※

血に霞む視界の中で、鈴乃は千穂の身柄が天兵に渡ろうとするのを焼望しながら見ていた。  
なんとか阻止したいが、身をよじることでもできず、肩と足の微痛でうめくだけだ。

太陽の光すら凌駕するような紫色の光が、嵐の壁の向こうで炸裂したのは、まさに天兵の手が千穂にかからんとした瞬間だった。

「な、なんだ？」

「……？」

リグイタオツコも鈴乃も、そしておそらくカマエも、その光の源に目を向ける。

それは管轄北高校の正門の外だった。

「む!!」

リグイタオツコが、警戒の声を上げる。

嵐の壁の勢いが、急速に弱まってゆくのだ。

学校の中と外を隔てる真円の嵐の境目があいまいになり、やがて走んで徐々に雨と嵐の力が均され、そして、壁が砕ける。

一瞬で均された気圧差で生まれた嵐に天兵連隊があらわれ姿勢を崩した。

その瞬間、紫色の閃光が、流星のように校庭を横切った。

全員が光を認識した瞬間、今まで壁を形作っていた嵐が猛烈な音と嵐でそのあとを追った。

「ぬっ………」

自分のすぐ脇を光と嵐が通過したりヴィクトオッコは一瞬疑問を上げ、すぐに自分の腕が妙に軽いことに気づく。いや、軽いのではない、これは、腕が、

「あぐあああああああああり」

リヴィクトオッコは、先ほどまで小さな人間を抱えていた腕が、肩から完全に消失していることに気づき、絶叫する。

痛みを認識したのと同時に吹き出す血を押さえ、壁をつくりヴィクトオッコは、

「あり」

足元で、這いつくばっていたはずのもう一人の人間の姿までも、消えていることに気づく。

その人間を地面に縫いとめていたはずの五本の黒鉄の槍は、乱切りされた野葉のようにコマ切れに切り刻まれ、武器としての形を失っていた。

上空から鈴乃を見下ろしていたはずの天兵連隊連も、何が起こったのか一瞬では把握できず、ただ光の尾と嵐の矢の軌跡を追って全身で振り廻った。

カマエルの炎に吹き飛ばされた漆原を背後に庇い、その異形の魔物は立っていた。人間の顔と体軀に、悪魔の手足と二本の角。その片側は折れたまま。

「あ……………あ……………」

千穂は、自分を抱えているのが変わらず異形の悪魔の腕なのに、そこから伝わる安心感に頼んだ涙腺の決壊を止めることができなかった。

いつだって、危ないときには助けに来てくれる、そんな千穂の英雄。

真奥貞夫が、千穂と鈴乃を抱えて立っていた。

いつもの、魔王型ではない。

身長は普段の真奥と変わらないし、こうしてなんの防備もせずにそばにいても、息苦しくなることもない。

ただ、ユニシロの袖と袖から覗く四肢と角は、間違いない悪魔のものだ。

「ま……………真奥……………さん……………」

「ワリイ、ちよつと遠くにいたから遅くなった」

真奥はリヴィタオッゴと天兵連隊から目を離さない。それでも力強い声で、そう言ってくれた。

「……はいっ……ぐすっ……」

千穂は雨に濡れた顔をさらに涙で上書きして頷く。

「怪我、してねえな？」

「はい……津原さんと、鈴乃さんが、守って、くれました……」

「そっか」

真奥は優しく頷いてから、鈴乃に意識を持っていくと、真奥が何か言うより早く、

「本当に、おそ……い、ぞ……魔王」

もう一方の腕に抱かれていた鈴乃は、痛みで霞む視界に真奥の顔を捉えて意識をつく。

左手に千穂を、右手に鈴乃を抱えた真奥は、二人をゆっくり屋上に下ろした。

「これでも超特急で来たんだぞ」

鈴乃の容赦ない物言いに苦笑する真奥。

「ぎりぎり間に合ったんだから勘弁しろよ。本命はピンチに襲撃と現れるもんだ」

確かに今の今まで、津原が倒れ、鈴乃が倒れ、千穂に危機が迫る、多勢に無勢の圧倒的不利な状態だった。

そのことを思いながら、鈴乃は思わず笑ってしまう。

「……そういうことは、勇者に、任せろ。魔王が、やるな……はは……うぐっ」

途端に傷に痛みが走り、すぐに顔を曇める。



全身傷だらけで血に染まっている。それでも一人も、漆原も、なんとか生きている。

「死んだりば、しねえな？」

振り返らない真奥が、背中であいけてきて、鈴乃は小さく頷く。

安堵と共に……真奥が来た、という安堵と共に、鈴乃の傷が痛みを激しく脳に訴える。

「死にそうなほど、痛い。だから、大丈夫だ」

真奥が正面を見据えたまま頷く。

「よく、今まで持ちこたえてくれた。あとは俺に任せろ」

空には大天使、目の前にはマレブランケの頭領格、天兵が五人も、

満身創痍の鈴乃と漆原、戦えない千穂を背後にしながらかし、真奥の余裕は微塵も揺るが

ない。

真奥は一見して徒手空拳であり、魔王型への姿身も不完全で、特別な魔力も感じない。

だが。

「……ああ」

その背に鈴乃は、なんら不安を感くことがなかった。

全てをその背に任せることができる。その確信が鈴乃の胸に宿る。

「さて……状況はいまいち分からないが、とにかくお前ら、大したもんだ。大元師を三人も落と

すなんだ、恵美以来だぜ」

「き、貴様は……」

真奥は空手のまま、片腕を失って跪くリヴィタオッコの前へ悠然と歩いてゆく。

「お、俺様の腕をおおお!!」

半人半魔で魔力も感じない真奥を侮ったか、激昂するリヴィタオッコ。だが、

真奥は悪魔の右手をリヴィタオッコの目の前にかざすと、不敵に笑う。

「マレブランカの頭領格こそだが、俺に向かって随分偉そうな口を利くじゃねえか、ええ？」  
笑った真奥のかざした掌から、紫色の光が輝いた。

「む……」

誰の耳にも届かないが、初めてカマエルが鉄仮面の中で声を上げた。

紫色の光は、掌から腕を伝い、やがて真奥の全身を包む。

その現象に、鈴乃は目を見張る。

「魔力じゃ……ない……?」

わずかながらも悪魔型を発現させ、なんらかの超常的な力を使っている真奥からは、一切の魔力が感じられない。

もちろん聖法氣も感じる事ができず、ただ隣にいただけで圧倒されそうになる純粋な「力」の波動が鈴乃の聖法氣を刺激する。

以前にも、どこかでこれと同じような力を見たことがあった。

「真奥、さん？」

そのとき、弱々しくもはっきりした千穂の声。千穂もまた、真奥の見せる現象が今までと違うことに気づいたのだらう。

鈴乃は目だけで千穂を振り向いて、そして思ひ出した。

そうだ、この力、一度だけ、千穂と一緒に見たのだ。

笹塚より遠か東の地、千葉縣銕子市の、太陽の恵みに最初に浴する聖域、大狀境で。

「さて、お前らの中に、恵美ほど、俺との戦いに命を賭ける覚悟のある奴はいるかな？」

圧倒的な「力」を凝縮させ、大きく振るわれた真奥の右手には。

「聖劍……進化聖劍・片翼……！」

リヴィタオッコが、天兵連隊が、カマエルが、そして鈴乃が、その剣の名を呼ぶ。

真奥の右手にある一握りの剣は、勇者エミリアの持つ・進化聖劍・片翼・と、うり二つの姿をしていたのだった。

※

「このお嬢さんに贈いた無礼の落とし前はそこで潰れてるヤツでついたから、あんた達がこゝで迎くならもう何も言わないよ。でもね」

日焼けした女性は、長身の男の不穏な空気や異装の騎士達の殺気などものともせず、一歩、前に踏み出した。

「……なんだ？」

いつの間にか、その足元から何かが湧き上がっている。

雨に煙る煉獄の街を、さらに霞ませこの場を世界から隔絶させるその正体は、

「霧……？」

「あんまよそ者に好き勝手やられると、私も立場上、黙ってられないんだわ」

「っ」

それは、単なる圧力。

女性の視線が長身の男を射抜く。ただそれだけで、魔力でも聖法気でもない力が、男を貫いた。

「あんたらの世界がどういう結論に落ち着こうと、それはあんたらの問題だ、でもね、こちとらとつくの昔にカタがついてんだ。それを横からやってきて好き勝手すんなら……っ」

女性が気合を入れるように鋭く息を吐いて一歩前に出て、水たまりの水を散らす。

「私達が黙ってませんよってなもんよ！」

それだけで、異装の騎士達が力の流れに押されてよろめいた。

「……ん」

泥だらけになってしまった製香だが、何も起こっていないのに、何故異装の騎士達が憤気づいたように退くのか分からなかった。

この女性が自分を助けてくれたことは間違いないが、だからと言ってこの人数を相手に女一人でどうにかなるとはとても思えない。

だが、事態は思わぬ方向に動いた。

「OK、退くよ。あなたに逆らうのは得策じゃなさそうだ」

長身の男が降参の姿勢を示したのだ。

「でも、こっちもやることはやらなきゃならないんだ。この二人は、連れ帰ってもいいよね」

「ちよ、ちよっとぞ」

慌てたのは製香だ。

この二人、とは、確認するまでもなく東美の父ノルドと、そして西園だ。

「僕が全力出してもあなたにはきつと勝てないんだらうけど、これを吞んでもらえないとこっちも立場上、全力で抵抗せざるを得ないんだ」

「全員死んでも？」

物騒なことを言う女性に、男はあつさり頷く。

「どのみち、このチャンスを手を離して逃がそうもんなら死ぬことになるしね」

「バカなこと言わないで！ 西屋さんと東美のお父さんどこに連れていく気よ！」

女性の存在で少し心が回復した梨香が叫ぶが、男は首を傾げる。

「だからさっきも言ったでしょ。連れてくんじゃなくて、元いたとこに帰すの。お姉さん、あなたが僕の思っている通りの人なら、この二人を連れ帰るのは邪魔しないでくれるよね？」

「ね、ねえ、助けて、青屋さんと恵美のお父さん、助けてよ！」

もう破れかぶれである。頼れる相手は今、この女性しかないのだ。だが既に、会話は梨香を必要とせず、梨香の見知らぬ男と女の間でのみ行われていた。

「分かっているとは思うけど、おじさんの方は『こっちの人間』だし、お兄さんの方は、『こっちの悪魔』だ。元々地球の存在じゃない。だから、いいよね」

そして梨香の期待に反して、ボニーテールの女性はおっさり頷いた。

その途端、降りしきる雨すら蒸発させそうな圧倒的存在感が一気になりをひそめる。

「いいよ。私の立場上邪魔はできない。それが原因だ。だからもう『こっち』で暮れんな」

「感謝するよ」

「嘘、嘘でしょー ねえー！」

長身の男の合図で、異装の騎士達は改めて青屋とノルド、そしてブロック塀に叩きつけられた哀れな仲間を抱き上げる。

梨香はそれを、見ていることしかできなかった。

「ねえ、あんな名前は」

「……ガブリエル。一応、大天使なんて稱すかしい称号を名乗らされてる」

「そりゃ稱すかしい」

目の前で男二人が謎の集団にさらわれそうになっているというのに、女性は兩に溜れたまま笑しげに笑った。

「ああ、ガブちゃんさ」

「いきなりあだ名かい？」

ガブリエルと名乗った長身の男は、不満そうな口調。

「分かっていると思うけど、『私は』邪魔しないけど、他の人達については保障しないから」  
「もちろん、これは僕らの問題だ。これ以上あなたに迷惑はかけないよ」

「どうだかね。男の子の『もうしない』と『反省した』ほど信用ならないセリフもない」  
「鬱ったね。結構長く生きているつもりだけど、あなたにとっては僕も子供かい」

ガブリエルはむしろ楽しそうに笑う。

「よかったら、お姉さんの名前を教えてもらえるかな」

「……う」

そのとき、ガブリエルの背後で騎士の一人に抱がれていた声屋が、びくりと動いた。

「声屋さんっ!!」

聲屋がそれに目ざとく気づいて叫ぶように呼びかける。

「ありや、人間体だからって手加減しすぎたかな」

ガブリエルはさして意に介した様子はない。

「こ、これは……くっ、は、離せっ！」

声屋は身をよじるが、どうにも力が足りず、騎士達が集まってその動きを封じてしまう。

「くっ……す、鈴木さん、ご無事……」

観念したように声屋は梨香の無事を確認しようと顔を上げて、泥だらけの梨香の隣に立つ女性の姿を見た。

それは、声屋が知っている人物だった。

女性の姿を見た瞬間、声屋の脳が高速で回転する。

エミリアが日本にいない隙を狙い、彼等にやってきたガブリエルと、東大陸エフサハーンの騎兵達、捕えられたノルドと自分。

「天祿さん!!」

声屋は叫んだ。

そう、梨香を助けたのは、鏡子の海の家「大黒屋」の臨時店長、大黒天祿。

日本の死者の聖域の管理者だったはずの天祿が、どういう理由で彼等にやってきたのか、声屋には分からない。分からないが、今は天祿しか頼れる者がいない。

「真奥に、西洋美術館で待っていると伝えてください!!」

「おい、黙らせろ」

ガブリエルが指示し、すぐに芭屋は口を封じられてしまう。

だが、伝えるべきことは伝えた。

あとは何が起こっても、真奥が適切に対処してくれるだろう。

「あまねさん、って言うんだ、ふーん」

「そ、大黒天称。ま、私自身は『星』ではないんだけどね。あ、芭屋君、了解。真奥君にそう

言っときやいいのねー」

天称はどこまでも明るい。

「『星』か。まあ、あなたと直接戦い合わなくて済んで、ホッとしてるよ。今回の僕らは本當

に運がいい」

「そうかねえ。その子達、意外としぶといよ」

「知ってる。でも、今国に限っては、彼の頼みの綱も無事で済むかどうか……何せ相手は」

ガブリエルは遠くの空に目をやった。

「僕らの世界の『赤』を完全に支配下に置いてる男だからね。今の魔王サタンじゃ、厭しいん

じやないかな」

「『赤』を支配下にねえ」

天称は眉を嫌める。

「そんなことが出来るなんて話は聞いたことないけど、まあそっちの話はそっちの話だ。私の知ったこっちゃない。ほら、消えるならきつさと消えな」

「待って……待ってよ！」

「はいよ。まあ、彼の主に会ったらよろしく伝えといて。僕個人は、意外と敬慕するから」

消失は、あまりにもあっさりしていた。

梨香の目の前で、数十人もの男達が、音聲と、ノルドを捲いたまま、テレビの画面が消えるようにその場から消え失せたのだ。

「……う、そ……」

水たまりの中にへたり込んだままだった梨香は、その瞬間、

「おつと……」

混乱と恐怖と衝撃に緊張の糸が限界を超え、そのまま崩れ落ちるように気を失ってしまう。

天祢はやんわりと梨香の体を支えようと、慣れた動作で背に担ぎ、周囲を見回す。

「やれやれ……随分とセフィロトの乱れた世界みたいだね、彼らの故郷は」

もう一度梨香を背にしっかりと背負い直すと、天祢は全く乱れぬ足取りで、ヴィラ・ローザ笹垣の階段を上がる。

幸い、二〇一号室のドアが開いている。

芦屋達が、鍵をかけずにガブリエル達から逃げようとしたのだろう。

「ちよつとお邪魔しますよ。こちらのお嬢さんも着替えさせないと、風邪ひいちゃうね」  
天祢は部屋に入ると、梨香をキツチンの板の間に下ろして勝手にタオルを探しはじめた。

「お、整理されてるねえ」

芦屋が整えた洗濯ものを感心したように眺めると、自分用と梨香用のバスタオルを二本取り出し、

「お？」

その洗濯物の横にある、手書きの地図のようなものがびっしり書き込まれた紙束に気づき、手に取る天祢。

自分の髪をぐしぐしと拭いながら一番上の紙を流し見する。

「ふうん。こーゆーとこなんだ。つと、今はこの子着替えさせなさや」

異議の騎士達の懸望で、全身泥だらけの梨香の腹に手をかける天祢。

「さて真真君、このタイミングで帰ってきたりすんじゃないよ」

とんでもない混亂の後だというのに、天祢の声色にはどこか楽しむような空気があった。

※

「あー……すっげえ嫌な予感がする」

半人半魔の真奥は羽根のように軽い剣の具合を確かめるように回転させると、二、三度素振りする。

「これ、魔力じゃねえよなあ。なんか、後で変なリバウンド来そうな気がする。具体的にどうとか分からないけど」

真奥は、ひたすらにボヤいていた。

自分の力に戸惑いながら、そしてボヤきながら、圧倒的な力で、ものの数秒で五人の天兵を地面に這わせた。

天兵自身は、彼らが仕える大天使の足元にも及ばぬ力しか持たないが、それでもカマエルの天兵はガブリエルのそれとは装備も練度も圧倒的に違う。

千穂さえ抱えていなければ鈴乃も戦って戦えないことはなかっただろうが、ガブリエルの天兵を相手にしたときよりずっと苦戦したことは想像に難くない。

それが、まさしく瞬きする間だった。

真奥が移動する度に、その強烈なスピードに音と空気がついてゆかず、風の校舍屋上に大音響を響かせる。

天兵達は、まるでその音で気絶して落ちる蟻のように、一人一秒も持たずに全員が地に伏した。

何が起こったか、誰一人目で追うことすらできなかった。

「うう……津原さんの術がなかったら、学校の窓ガラス割れちゃいますよ……」

真奥の出現で余裕を取り戻した千穂が、涙目で恨み言を吐くほど、壮絶な光景だった。

カマエルは相変わらず高みの見物を決め込んでいるだけだが、リヴィタオッコすら、目の前で天兵が屠られていくのをただ棒立ちの状態で見ていることしかできなかったのだ。

「し、死んで、ませんよね？」

「知らね」

千穂の問いかけと言えど、真奥は容赦がない。

一体どのような攻撃を加えられたものか、赤い全身鎧が潰されたクツキーのように粉々一步手前の状態だ。

「おい、そこのマレブランケ」

「……は」

真奥はリヴィタオッコを見もしない。

見もしないのに、ただその声だけで、真奥と天兵の戦いをただ黙って見ているしかできなかったリヴィタオッコは、地に降りて膝をつく。

先ほど腕を切断されて激昂してたとは思えないほど素直に、傷を庇うことすらせず、ただ雨に血を流し、服従の意志を示した。

「今更俺が誰かなんて聞くなよう　俺は今機嫌が悪い。お前も板挟みの立場なんだろうが、俺

はそんなこと知らん。下手に動けば、処断する」

「は」

あれだけ凶暴に振る舞ったリグヴィタオツコも、魔力ではないにしても、今の真奥がサタンであることも、どう遠慮しなくても自分が敵わない相手であることも分かっているのだ。

「よし、よ……っと」

一つ頷くと、真奥は軽く地を蹴った。そして一足飛びに漆原のそばへと降り立つ。

「おー、生きてるか」

「……結構、ぎりぎりなんだよね、これでも」

そこには未だ指一本動かさない様子の漆原が倒れていて、真奥の足だけを視界に入れて弱々しい抗議の声を上げる。

「もう少し我慢しろ。全部終わったら、病院連れてってやるから」

「……へえ、珍しく優しいじゃん」

「あのお空の大将が」

真奥は上空で、未だ微動だにしない赤い全身鎧を見上げる。

「やる気ないお前を初めから倒したとも思えないからな。ちーちゃんと鎧、守ったんだろ。よくやったじゃねえか」

「……寒めても、何も、出ないよ」

「どうしてお前はそう、自分の立場を弁えねえかな。何か出してやるのはこっちだったの」

昔段の变身ならば、ここで魔力を分け与えて傷を癒やしてやることもできるのだが、いかにせん今の真奥に宿っているのは魔力でも魔法気でもない。

「さて、その天使。お前らが日本に迷惑かけんの、これで何度目だ？」

真奥はここでカマエルに視線を投げる。

声は聞こえているはずだが、カマエルはやはり機動だにしない。

「まあ、俺達に直接ちよっかいかけてくるのはいいとしてだ、何をするにしても、人の迷惑にならないようにしなさいって、お袋さんに教わらなかったのか、ああ？」

悪魔が天使相手にする説教としては喰飯ものの以外の何物でもないが、それを言われても仕方のないことを、確かに天使もしているのだ。

「人をスカウトするにしても、物を譲り受けるにしても、この国じゃきちんと挨拶して、お願いで、金出して、時には法律に訴えるぜ？ 出かい頭に問答無用でぶっ倒して奪うような野蛮な真似して、恥ずかしくねえのか？」

「……魔王」

ようやく口を開いたカマエルの声は、鉄錆のような色をしていた。

「魔王、サタン」

「あ？」



「ぬううー」

真奥もまた神樂的な反射で劍の腹で槍をいなし、

「せいっ！」

払った勢いのまま撤回させ、返す刀でカマエルの鎧に守られた胴を狙う。

攻撃を払いのけられた不安定な姿勢からそれでもカマエルは好く反応した。

真奥の刃の軌道を遮るように槍を振るって柄で受け止めようとするカマエルだが、天兵の鎧を砕き、リヴィタオッコに腕の切断を数瞬気づかせなかったほどの刃の研ぎは、真奥、カマエル双方の想像を超えていた。

「え？」

「ぬっ？」

真奥は、防がれたと思っていた。カマエルも防いだと確信しただろう。

それなのに、抵抗があつたのは打ち合った一瞬だけ。気がつけば真奥は、劍を振り切つていた。

「ぐうっ！」

カマエルのくぐもった声が真奥の耳を打ち、真奥はといえば、自分の振るった劍がカマエルの鎧を割の真ん中から切断し、そのままの勢いで真紅の鎧を紙のように折り裂いたので、遂に豁然としてしまう。

刃は鎧の下までは通らなかつたようだが、鎧が両断されてから一瞬の判断で背後に後退しようとしたカマエルも、自分が刃を受けたことが信じられないようだ。

「……こんなの使われたら、勝負にならんわけだ」

真奥は、今ではない遠い過去の戦いを思い起こしながら、圧倒的な力を手にしているにも関わらず苦い顔をしている。

真奥はそれでも潰断なく剣を正眼に構え、油断なくカマエルの挙動に注視する。

カマエルは両断されて使い物にならない鎧の柄を放り棄てると、浅く切り裂かれた鎧の腹に手を当てて、何事かを唸っている。

「サタン……サタン、サタン」

「あ？」

徐々に息が荒くなっているのが、相対する真奥には手に取るように分かる。

「サタンんんんんん！！！！」

「なんだよなんだよ気持ち悪いよお前うわわわわ」

鎧を切り裂かれて動揺しているのかと思いきや、急に激昂したカマエルは、穂先が残っている鎧の半分を片手に、一瞬の跳躍で真奥との距離を詰める。

「サタンッ！！！！」

鉄仮面の隙間から瞳の色が見えるほどの距離で繰り出される短い槍の穂先を、真奥はそれで

も余裕で受け止める。

不意打ちとも呼べる動きにも驚きはしないものの、どちらかというとカマエルの態度と言動の恐ろしさで気持ち悪さに背筋に悪寒が走る真奥だったか、

「うげっ！」

それよりも深刻な事態が発生していた。

「お、おま、ちよっとこれは！」

カマエルの槍の穂先を受け止めた真奥の剣の刃が、穂先の溝を鋭い切れ味で切断しはじめたのだ。

刃物としての性能が優れている証だが、フォータ状の物体の溝に刃物を差し入れてそれ以上の攻撃を防いでいるのに、このまま相手の武器を切断してしまったら残った部分が体を思い切り刺し貫いてしまう。

「せ、性能良すぎる武器ってのも問題だなおい！」

真奥は慌てながらも、ざりざりのところで叫んだ。

「アシエス！ 解除だ！」

「はいよー、マオウ！」

真奥が叫ぶと、二つのことが同時に起こった。

真奥の手になっていた剣が、一瞬で光の粒子になって消滅し、その粒子が槍と剣が鋭り合っ

ていた真下に集合して、人の形を作る。

光の速度で凝縮した粒子は、光の速度で一人の人間をそこに出現させる。

アシエス・アーラ。

アラス・ラムスと等質の存在の、イエソドの欠片から生まれた少女だ。

障害となっていた剣が消滅して再び推力を取り戻した槍の穂先が真奥を刺し貫こうとするその瞬間、アシエスのたおやかな拳が、槍の腹を思い切り殴り上げる。

「ぬうっ！」

頼りない印象の細腕から繰り出されたとは思えない鈍い音と威力で、大天使が繰り出した槍が思い切り上方に弾かれた。

得物をはね上げられ体勢を崩したカマエルのがら空きになった腕に、

「よっせイ！」

これまた細腕に全体重を乗せた肘打ちが炸裂する。

「むぐっ！」

双方の体格や装備を比較すれば、どう考えても打ったアシエスの肘が弾けるとしか思えないのに、現実ば全身の腕部にガラス窓のそのような縦横無尽のヒビが走り、カマエルの巨体がかんどううって屋上の地面に叩きつけられる。

そのとき、なぜかアシエスの隣で真奥も背中をついて地面に倒れていた。

「マオウー！ 何倒れてんノ！」

「仰け反って槍を投げようとして、尻もちついたんだよ!!」

立ち上がった真奥は理不尽な物言いに抗議するが、

「リンボーの酸欠が足りナイ！」

返ってきたのはもつと理不尽な罵倒だった。

「魔王が日常的にリンボーダンスやっててたまるか!!」

「……真面目に戦えよ……」

倒れたままの漆原の突っ込みはもちろん届かない。

「マジメだよ！ ちょちょいとやっちやうヨ！ マオウよりも、こいつらのが敵!!」

見た目とは裏腹にとんでもないパワーを発揮したアシエスは、全身をうねうねさせながら怪しげな格闘ポーズを取ってカマエルを威嚇する。

「まあ、今助けてくれるならなんでもいいが……」

真奥は顔に手を当てながら考える。

ガブリエルに相対したアラス・ラムスもそうだったように、アシエスも口調はフザけているが、カマエルへの敵意心は本物のように見える。

そうでなければ、ここまで容赦のないパワーは振るわないだろう。

しかし一方で、ファーフアレルロに使役されていたイルオーンは、悪魔に対してなんら含む

ところを見せなかった。

これはただ三人の性格の違いなのだろうか。

「そうは思えないよなあ……」

「く……」

「まあ、こんなことくらいで倒れないとは思っていたが」

真奥の思考は、しぶとく立ち上がったカマエルに導られる。

「サタンさん!!」

「そこでまた俺かよ……なんなんだよお前は……」

断言できるが、真奥はカマエルとは初対面だ。そもそも日本に来るまで天使の実物など一人しか知らなかったのだから。

「かと言って理由も分からないのにアシエスけしかけてもなあ」

「私は構わないヨ」

「まあ落ち着けて」

戦意の衰えぬアシエスを制しながら、どうするか思案していた真奥だったが、

「うん、落ち着いた方がいい。カマエル、君もね」

まさしく降って湧いたような声に、真奥とアシエスは思わず距離を取る。

真奥達とカマエルのちょうど中間の空間が突然揺らいだかと思うと、そこからのつそりとま

たでくの坊が現れたのだ。

「が」

「ガブリエルッ!!」

真奥がその名を呼ぶより早く、アシエスがカマエルに向けたのとは比べ物にならない憎悪を込めてガブリエルの名を呼んだ。

「なんだいなんだい?」

ガブリエルも驚いたらしく、目を丸くしてアシエスを見る。

「ま、待てアシエス!」

驚くガブリエルに構わず飛びかかろうとしたアシエスを、真奥は懂てて制する。

「なんだマオウ! 殺らせろ!」

「待てって! ようやくまともに話ができそうな娘が来たんだ! いまなり殺すな!」

真奥はアシエスの手を掴みながら、ガブリエルを見る。

話ができると言ってもまたのらりくらりとはぐらかされるのが落ちたろうが、少なくともリヴィタオツコやカマエルよりは日本語が通じるだろう。

「アシエス……?」

一方のガブリエルは自分に食ってかかろうとする銀髪の少女を見て、複雑な色のため息をついた。

「まったくもう、イレギュラーが次から次へと……」

「またお前が裏でこそこそしてやがったのか」

真奥はもう、驚きよりも呆れの方が先に立つ。

行く先々のトラブルで、もはやガブリエルは馴染みの顔になってしまっている。

「うん、まあ、そうね、どっちかつつと今までの方が表だったんだけど、今回は真正正銘の裏方だね。ネズミって呼んでくれていいよ」

白痴的な皮肉で肩を練めてから、ガブリエルはカマエルに言った。

「カマエル帰るよ。これ以上欲を掻くと面倒なことになりそうだ。ヤドリギだけでも面倒なのに、連中なんか比べ物にならないのが現れた」

「ふーっ。ふーっ」

「あーらら、すっかり興奮しちやつて……」

真奥は二人の天使の様を見て忘々しげに吐き捨てる。

「なあガブリエル、そいつ、ちよつとおかしいぞ」

ガブリエルの撤退の決意などまるで耳に入っていないかのように、カマエルはただ驚い息を吐くだけだ。

「うん、魔王サタンを前に冷静じゃいられなくなってたんだろうね」

「俺、そいつとそめた覚えも、そもそも会った覚えもないんだが」

「まあ、君をサタンで名付けた君の親に文句言つて。君が魔王タロウとかだったらもうちょっと違つたんだらうけど」

「日本全国のタロウさんバカにしてんのか」

「怒つた人がいたら謝つといて。さ、行くよカマエル。どのみち「こっち」じゃあお互い全力は出せない。本当にヤバそうなのがいるんだ」

「おい、なんの説明も詫<sup>わ</sup>びも無しに逃げるのか」

真奥<sup>まおく</sup>が低い声で牽制<sup>けんせい</sup>する。

なんだか勝手に燃る算段をしているが、さんさん好き勝手にした下<sup>げ</sup>手人<sup>しもやうじん</sup>になんの落とし前もつけさせずに燃すほど、真奥は人格者ではない。

「あし、うん、そうしたいくらい怖い目に遭<sup>あ</sup>つた」

「あ？」

「うーん……そうだ。おい、そっちで寝てる一流ニート」

「お前……人が動けないと思つて」

以前やり込められたのを根に持っているのか、ガブリエルは倒れたままの漆原<sup>うるしはら</sup>を擁護<sup>ようご</sup>するように呼びかけた。

「前に渡した名刺、捨ててないよね」

「名刺だあ？」

大天使が用いるには随分と俗っぽい単語に、真奥は目を刺く。

「……こないだ、引き出しの底で壊れたけになつてゐるの、見つけた」

「きちんと保管してくれよ。あれ作るのだってタダじゃないんだぞー！ 粗末に扱われると傷つくなあ」

悲しげな声を出すガブリエルだが、一つ頷くと、

「その一流が僕の電話番号知つてゐるから、後でかけてきて。ああ、あとこれは、サービスというか、お詫び」

ガブリエルは体の前で一度、大きく拍手を打つ。

真奥とアシエスは身構えるが、その瞬間、ガブリエルの足元から屋上の地面を伝い、学校の建物全てが淡い光に包まれ、それは一瞬で掻き消えた。

「嵐の被害は消したら不自然だからそのままだけど、今まで校舎内に閉じこめられてた人達のこの一時間ちよっとの記憶は、きれいさっぱり消しておいた。これで今は助かして」

「……」

真奥は思わず足元と、そして背後にいる千穂と鈴乃を見る。

「今は……ってことは、リターンマッチがあるんだな」

「君が望めば、ね」

「できれば御免蒙りたいが」

「勇者エミリアの身柄を、僕らが押さえてると言つてもかい？」

「……………」

それはある意味、予想できた話だった。

今まで裏でこそそそ動いてたガブリエル達が、ほとんど暴挙とも呼ぶべき作戦を展開している理由はただ一つ、彼らは、今日本に、彼らの脅威となる勇者エミリアがいないことを知っていたからだ。

だがそれを改めてガブリエルの口から知らされた真奥は、思わず顔を強張らせてしまう。

「いい顔だね。とても悪魔の王の表情とは思えないよ」

ガブリエルは、このとき初めて、底知れぬ思いをうかがわせる楽しげな笑顔を浮かべて言った。

「それじゃ、また会おう。魔王サタン。新たな悪厄よ」

※

ガブリエルは、位幡北高校を数々荒らしたカマエルと、天兵、そしてリヴィタオッコと共に、悪魔の身柄を預かっているなどという爆弾発言を残して「帰った」。

それは恐らく天界ではなく、エンテ・イストラなのだろう。

「タソつたね」

真奥は雨も風もやんだ空に向かって吐き出した。

時間は間もなく十四時になろうとするところ。本当なら、首尾よく運転免許を手に入れて燃りの電車に意気揚々と乗っているくらいの時間だったのに。

「再々試験の代金、どうしてくれるんだっての」

空に向けて抗議の意味を込めた拳を突き上げて、真奥は気づいた。

肉体が、元に戻っている。

元の「真奥貞夫」の姿に。

驚いてアシエスを見ると、アシエスはまだガブリエルが消えた空に向かって何かをギャーギャーと喚いていた。

「……………たたく、何かどうなってるんだか」

いずれにしても、まずは鎧乃と漆原を治療せねばならない。

「ちーちゃん、大丈夫か？」

「あ…………」

千穂は真奥に言われて、自分の姿を見下ろす。

制服と言わず顔も手も、赤黒い血で汚れた千穂の姿は、なかなか追力のある姿だった。

「……………大丈夫、です」

千穂は気丈に頷くも、すぐに瞳が涙で潤む。

「……全部……鈴乃さんの、血、です。私を、守ろうとして……」

「……そうか」

「ぐ……………」

意識が朦朧としていたのか、横たえられた鈴乃がうめいた。

「わ、私、教室に戻って、ホーリービタン取ってきます！ 聖法氣があれば鈴乃さんっ！」

「待て待てちーちゃんー その格好で教室戻んなっ！」

全身血みどろのまま教室に戻って退そうとする千穂を、真奥は慌てて止める。

「……なにせよ、一度アパートに戻ろう。アシエス」

「逃げンナー 戻ってコイー セイセイドウドウとタタカエこのヘタレ！」

「アシエス！」

「このタソ天樹どそー 次に会ったときがオマエラの最期だー 首洗って待ってヤガレー コ

ンチタシヨー!!」

「アシエスっ!!」

「ほイッ!?」

起きることなく天に墜していたアシエスの注意を引くことに成功した真奥は、どっと疲れを感じながらも尋ねた。

「ここに居る全員で、きっきのアパートまで飛べるか？」

「ひーふーみー……うん、ヨエー」

いちいち数える必要があつたのかどうかは分からないが、アシエスは頷いた。

「真奥さん……そういえばこの人は……」

アシエスの存在に初めて気づいたらしい千穂が尋ねてくるが、

「待ったちーちゃん。まずは鈴乃と漆原を連れて帰らねえと。ちーちゃんも辛い。話はそれからだ。恵美のこともある」

「っ！」

千穂が息を呑む。

千穂もガブリエルの言葉は聞いていたはずで、それが今更になって思ひ出されたのだろう。

「じゃあ真奥さん、道佐さんを……」

「そういうことも含めて、とにかくまずは帰るぞ、アシエス！」

「シカタネエナ！ 楽シナ！」

真奥の合図で無駄にサムズアップをするアシエスが手を叩くと、

「わ」

「うっ……」

「ぐ」

千穂と鈴乃と漆原が浮かび上がり、それぞれに声を出す。

最後に真奥とアシエスが浮かび上がると、

「目立たないように、ゆっくり飛べよ」

「注文が多いナア。でもまあ、頑張るヨ。一時的にカラダを許したオトコだしネ」

「……オイ」

真奥は、背後の千穂が鈴乃に気を取られているのを見て密かに胸をなで下ろす。

全く間違いいではないのだが、いつもだったら取り返しのつかない誤解の果てに、恵美の懇願の餌食になってもおかしくないセリフだった。

「ナハハ。いい顔だね。んじや、いくヨー！」

アシエスの合図で、五人はゆっくりと佐幡北高校の屋上から雨が小康状態になった空へと飛び立つ。

空の帰り道、千穂が鈴乃と漆原の顔にかかる雨粒を、懸命にハンカチで拭いながら声をかける。

「もう少しですから、頑張ってくださいね。アパートに帰れば、鈴乃さんの部屋にホーリービタンがありますから」

千穂の法術修行中も何度が目撃した、愛着のリンクの小販。

それが、鈴乃の部屋には大量にストックされているのだという。

それさえあれば鈴乃と漆原の基礎体力を回復させることができるというので、とりあえず二

人の命がこれ以上危険になる可能性は無くなったと考えていいだろう。

真奥はそんな千穂達の様子を横目に見ながら、もう一つの手がかりについて考えていた。

アパートに帰ったら、アシエスと、そしてノルドから、聞き出せる限りの情報を聞き出して現状を整理せねばなるまい。

そしてどんな情報も纏まらうと、最終的には……。

「戻るのか……あの世界へ」

聖十字大陸、かつて一度は掌握しかけた人間の世界、エンテ・イスラ。

「全路、中途半端だったもんなあ」

眼下で沈滞している首都高を眺めながら口にしたボヤキは、悪屋にすら漏らしたことのない真奥の後悔。

人間世界の征服者として、悪魔達の首領として、魔王の責務の全てを果たせぬまま、敗北を言い訳に日本でこのままのうのうと生活していて良かったのだろうかという思いが、常に心のどこかにあった。

この世界でしか学べないことを学んで、魔界に持ち帰る。その志は真実だ。

だが、その志に挑むよりも前に、やれることが、やるべきことがあった気がする。

「何するにしても、バイトのシフト、なんとかしなきゃ……試験三度目とか考えてなかったから今月、もう空いてる日無いし、変わってくれる奴いるかなあ……」

確かにそれとも考えなければいけないことではあるが。

丁度、轆うづ谷たに駅の上空を通ったせいか、思わず思考がズレるが、そのことで真奥まおくは改めて考える。

「俺一人じゃ、本当どうにもならんな。今は……」

千穂と、鈴乃と、漆原と、

「皆の力が、必要だ」

## 源

「あ、帰ってきた。おーい」

聞き覚えのある声が、下の方から聞こえてきた。

視線を下ろした真奥と千穂は、アパートの魔王城の部屋から顔を出してこちらに手を振っている人物を見て目を丸くする。

「天祢さん!?」

「えっ?」

それは、銚子ちうしの海の家で二人の雇い主であった、大黒天祢おおくろてんねだった。

彼女はヴィラ・ローザ貴族の大家、志波美輝しはみきの嫁で、アパートの場所を知っていること自体

はおかしくない。

しかしそれ以前の問題として、彼女は鏡子の海で、先ほどのガブリエル達もかくやという超常現象を引き起こした上に、明らかに人間として不自然な消え方をしたはずだった。

「また一つ、何か手がかりが舞い込んできたのか？」

そう独りこちる真奥は、ほんの数分後、自分の認識がとことん甘かったという現実を突きつけられることになる。

「……うべっ」

脱力した真奥の支えを失った漆原が、共用廊下にずり落ちる。

だが、真奥も、鈴乃に肩を貸している千穂も、それを助ける余裕はどこにも無かった。

魔王城に、苺屋と、そしてノルドの姿は無く、その代わりに、勝手に引っ張り出された真奥の服を着た、全身擦り傷だらけの鈴木梨香が気を失ったように眠っている。

「天降、さん」

真奥は、自分の声が震えているのが分かった。

「うん」

「苺屋と……ここにいたおっさんは……」

「さらわれたよ。私の目の前で」

廊下に落ちた漆原を肅々と助け上げながら、天祢はあっさり言つてのけた。

「さ、さらわれた!? あ、西屋さんがですか?」

千穂も、天祢の言葉を反駁するだけで、冷静な思考ができないようだった。

「私は、この子を守ることにしかできなかった」

天祢はいつも冷徹な声で、横たわる梨香を指し示し、少し離れたところに漆原を横たえる。

「相手は鑑武者みたいな感じの集団と、ガブリエルってのっぽのチャラそうな男だった」

「……って」

真奥も千穂も、衝撃を隠せない。

「心当たりがあるみたいだね」

心当たりは、あるが、しかし無い。

ガブリエルはイエソドの欠片や聖剣を追っていたから、東美の係果を誘導するのは分かる。

だが、何故西屋まで?

まるで状況が揃わず、真奥も、運転免許センターでのことを知らない千穂も混乱が増すばかりだ。

りだ。

そんな二人の様子を見た天祢は頷くと、やおら立ち上がり、西屋が縛めた洗濯物の横にある紙束を真奥に差し出す。

「これは……」

「私には読めない字で書いてある。どこかの地図みたいだけど」

「青屋の字だ……中央交易言語で……」

「それと千穂ちゃん、まずは鈴乃ちゃんの手当てしたほうがいいんじゃない？ あなたも随分（ずいぶん）びしょ濡れみたいだけど、そのままじゃ風邪（かぜ）ひくし死（し）のぞ？」

横から真奥の持つ紙を覗き込もうとした千穂に天祢（あまね）がそう促す。

「そ、そうだ！ 鈴乃さん、お部屋、失礼しますね！」

はっと我に返った千穂は、とりあえず自分のやれることを先にやろうとしたらしい。

顔に生気が戻り、うめく鈴乃を引き連れて鍵（かぎ）が開けっ放しの鈴乃の部屋に入る。

「わっ！ な、なんでこんな散らかって……す、鈴乃さん、ちよっとここに座ってて……」

二〇二号室の中で千穂が慌てふためく声を聞きながら、真奥は青屋が書き残していったものの正体について、少しずつ理解を進めていた。

「……これは、東大陸の地図だ。都市や交通インフラ、他大陸の勢力が強い地域、エフサハーンと内戦状態にある中央山岳地帯の異民族の動向、機密の軍事施設まで……なんだってこんなもの……」

ここのとこ青屋がずっと書き物をしていたことは真奥も知っていたが、まさかこれがそうなのだろうか。

一体芦屋が何を考えてこんなものを残していったのか考えるよりも前に、

「あと、その芦屋君から伝言を預かってる」

「伝言？」

天祿が言葉をつたえた。

「真奥君にね、『西洋美術館で待ってる』。それだけだよ。意味はよく分らないけど」

「西洋美術館……上野の、芦屋がときどき調べ物に行ってたところだ……」

日本に來た当初、地球の魔術文明の消息を尋ねて、世界中の文物が集まる上野の博物館巡りをしていたことを思い出す。

「それは、君達の世界の地図？」

「あ、その……」

そういえば、天祿はその存在の不思議さもさることながら、なぜか鏡子で最初に出会ったときから真奥や鈴乃が地球の人間でないことを知っていた気配があった。

もっと言ってしまうれば彼女の叔母、このアパートの大家志波美輝も。

そんな真奥の疑念を察したのか、天祿は首を横に振る。

「前も言ったでしょ。ミキティ叔母さんが君達に話してないことは、私も話せない。それがルルなの」

「う……」

つれない天祐の態度に落胆した真奥だったが、そのとき續たわっている製香が、うめいて体をよじった。

目覚めたのかと思ったが、しばらくして動かなくなる。

それを見て気絶というより今は眠っている状態なのだと分かって少しだけ安堵するが、

「……吉屋……さん」

「寢言か？」

「……………たすけ……吉屋さん……………たすけて……………」

「やっぱ、怖かったみたいよ。普通の女の子には、吉屋君達も頑張ってこの子を守ろうとしたんだらうけどね」

そうだ、恵美とアラス・ラムスは、エンテ・イスラにいる。

吉屋も、そして恵美の父も。

エンテ・イスラは、元々彼らがいた場所。

しかし今は明確に「敵地」だ。ならば、彼らを助けるのは誰の役目だ？

助けるために、どうすればいい。

どうやって、エンテ・イスラに行けばいい？

自分の方は使えない。アシエスの方はまだ未知数だし、そもそも自分のグート術は魔力由来のもので、それ以外の力を動力源にしても術が安定して発動する保障が無い。

なら、今ダートを開けるのは？

鈴乃は言っていたではないか。しかるべき増幅器があれば、ダートを開けると。

声屋は、西洋美術館で、待っている。

「ダート……そうだ、ダートだ！ おい、鈴乃!!」

ハッと顔を上げた真奥は、魔王城を飛び出すと隣の部屋のドアを叩く。

「ちよ、ま、真奥さ……!! い、今ダメっ!!」

中から千穂が慌てたような声を上げるが、真奥は構わず扉を開け、

「お……」

「あ……」

「真奥さんっ!!!!」

部屋に踏み込んだ瞬間、真奥の顔を怪しげな紋様が描かれた布が直撃した。

「ダメだって言っただじやないですかあっ!!」

千穂の抗議の聲が響く。

視界が布に埋め尽くされる寸前に薄暗がりの中に見えたのは、鈴乃の傷口の血を濡れたタオルで拭いながら栄養ドリンクを飲ませる千穂と、

「ま……おう……き、きま」

着物を胸元までだけきかせて、傷を負った肩を千穂に洗ってもらっている鈴乃だった。

「お、あ、す、すまん！ でも聞いてくれ！ 大事なことあぐっ！」

「いいから真奥さんは出てってください！！」

「ぐえっ！」

今度は布越しにかなりの重量物が翻にクリーンとツットして、真奥の首が後ろに曲がる。

真奥はたまらず引っくり返るが、それでも今思いついたことは、きちんと伝えねばならないと、布を被ったままなんとか起き上がる。

「真奥さんっ！！ いくらなんでも怒りますよ！！」

「よほど……死にたい……らしいな……ぐっ」

千穂と、傷つきながらも殺気立った鈴乃の声が布越しに聞こえる。

「あー、こちらー マオウー 私と身も心も一つになったのに、俺の女の子のハダカを覗こうとハ！」

そんなところにアシエスが空気を読まずに乱入するから、分厚い布越しにも千穂と鈴乃の殺気が増したのが分かった。

「えっと、――〇番は……あれ、漆原君、この部屋って電話とか無いの？」

「僕も、見た目より、結構重傷なんだけど……」

天祐と漆原の悲しいやりとりまで聞こえてきて、さすがに勢いに任せすぎたと感じた真奥は、アシエスに引きずられるままに部屋から出ると、閉められたドア越しに鈴乃に声をかける。

布を取り外して最初に目に入っただのは、先ほど投げつけられたと思しき広辞苑だ。

「な、なあ鈴乃！」

「……………ああ？」

なんだろう。力の無い低い声のはずなのに、魔王たる真奥の背筋が凍りそうなほどの殺気に満ちている。

「あ、後で好きなだけ殴っていいから今は聞け！」

「え、マオウそんな趣味が」

「アシエスうるさい！ と、とにかく鈴乃！ お前、増幅器があればゲート、開けるって言ってたな!!」

「……………ああ」

地の底を這う声が返ってきて、それで真奥は目を輝かせる。

「あるんだ！ 上野の西洋美術館に、お前が使えそうな増幅器が！」

「……………上野に？ 美術館の増幅器？」

真奥の言うことが分からない様子の千穂の声。

鈴乃はなんとか冷静さを取り戻して、眉根を寄せる。

「い、言っておくが……………うっ…………」

「鈴乃さん！」

「だ、大丈夫だ……魔王、『天の階』は、民衆の信仰を長年集め、聖典の伝承を元に神祕彫刻としても可能な限り、法術的な意味付けを行った、法術増幅器としては最大規模のものだ。言つては悪いが、日本の、しかもそんな近所にそこまで高度な術式や信仰の意味合いを持ったものがあるとは……」

「あるんだ、あるんだよ！ しかも金払わないで入れる場所にも！」  
 妙なところを強調してから、真奥は言った。

「『地獄の門』だ！」

「地獄の……門？」

こんなときなのに、珍しく魔王らしい物言いをする真奥に、鈴乃と千穂は目を見合わせた。そこに、真奥は確信を込めて重ねる。

「ちーちゃん見たことねえか？ 上野の西洋美術館の玄関の外でっかいブロンズ彫刻！」  
 千穂は濡れタオルを絞りながら、記憶を探る。

「……なんか、校外学習とかで見たことあるような……あれですか、もしかして、門の上にいる人が、有名な『考える人』だっていうあの……」

「そう、それ!!」

真奥は得たり、と手を打つ。

「神曲」地獄篇

作者で神曲の主人公でもあるダンテが、古代の詩人に導かれ、地獄を旅する叙事詩である。その地獄とは吾人が生前の業の果てに行き着く苦界ではなく、聖なる神の創造した世界とされている。

上野の西洋美術館の「地獄の門」は、近代彫刻の祖とも呼ばれるオーギュスト・ロダンの作である。

「地獄の門」は国立西洋美術館の他に、世界に七つ同様の彫刻があり、人々の思いと信仰と歴史に伝わる物語をその身に蓄積し続けている。

「世界中に知られてる古い叙事詩『神曲』に語られる異界の入り口。それを表したのが「地獄の門」なんだ！」

「じゃ、じゃあ」

「試す価値は……あるかもしれんな」

「ああ、あれならきつと、ゲートを開けるー おい鈴乃、津原、さっさと傷治せよ！」

真美は無茶なことを言うと、頭から布をはぎ取って立ち上がった。

「西屋とノルドとアラス・ラムスと……恵美を助けに行くぞー」

## 続章 勇者、泣く

この貴賓室という名の牢獄に連れられて、今日で二週間が過ぎようとしている。恵美は窓から見える広大な海原を眺めながら、小さく嘆息した。

危険は無いはずだったのに、どうしてこんなことになってしまったのだろうか。

「まー」

「……アラス・ラムス、遊んでるとまたベッドから落ちるわよ」

恵美は、豪奢な構えのベッドを、トランポリンのようにして遊んでいるアラス・ラムスを睨める。

決して、手足の自由を奪われているわけでも、自分の身柄やアラス・ラムスを傷つけられているわけでもない。

もっと言えばこの窓は単なるガラス窓（それでも硝子の存在自体、ここでは貴重なものなのだが）で、聖剣を振るうまでもなく、部屋に設えられている書庫物机でも叩きつけば簡単に砕くことができるし、そもそもこの部屋のドアの鍵は、恵美が持っているのだ。

「……皆、心配してゐるわよね」

東美が見下ろしているのは、ファイガンという名の軍港だった。

東大陸北西端の海軍基地で、一部産業港としても機能しており、基地の背後にはそれなりの規模の街が広がっている。

エフサハーン首都「空の城」に最も近い港であり、元は単なる漁村だったのが、エフサハーンの支配者である統一皇帝の始祖が生まれた場所として、幾世代にも渡って発展してきた街でもあった。

東美も、かつて魔王討伐の途で一度訪れたことがあり、街の地理はそれなりに頭に入っている。

魔王軍四天王最後の支配地であった東大陸は、元のエフサハーンの支配が強権的であったこともあり、西大陸の大都市や北大陸の多民族都市に比べて規模の割に活気が無かった。

ここから見える街の様子は、気分の良いものもあってか、あのころよりさらに陰気に見える。

「千穂ちゃん、ベル……約束破って……ごめんね」

東美はこの二週間で幾度となく眩いた独り言を、エンテ・イスラの空に向かって呟いた。

それを、直接伝えられればどんなに良かったろう。

エンテ・イスラに帰還した初日から、もう自分の中に満ちる聖法氣の力が日本にいたときとは桁違いであることは分かっていた。

今なら千穂がやったように、一切の増幅器も無しに、例えば概念送受を送ることだってでき

たかもしれない。

だが。

「……」

惠美は思ひしように耳を塞ぎ、アラス・ラムスもその音を聞いて、不快そうに顔を歪める。  
「英勇たるエフサハーンの勇士達よ！ 昨夜の北西沖諸島の海戦における成果をここに発表する……」

これは、このファイガン軍港を活用した海戦が起こった際に流れる、軍の士気を上げるための放送と思われた。

もちろん地球のように電氣的な放送設備があるわけではなく、相応の法術的な仕組みが出来る上になっているわけだが、結局スピーカーのような増幅器があることに変わりはない。

法術を大規模に運用した設備があり、そもそも軍事施設なので、軍港内の魔法気使用量を計測しているソナー部署が設置されているはずだ。

惠美が、異世界に向けた増幅器無しの数値送受などを行えば、今ある最低限の自由すら制限されてしまうかもしれない。

自分だけならいいが、アラス・ラムスが例えば地下牢などに閉じ込められるなどということはない、あつてはならないのだ。

もちろんそれ以前の問題として、惠美の携帯電話は没収されていた。

それもある、恵美は、汗に動けないでいる。

ファイガンに来ることになった出来事を思い出して、歯を噛み締める恵美だが、この人間に聞して言えば、とても武器には見えない恵美のスリムフォンを没収する意味が無い。

恵美も本職は法術士ではないので、増幅器たる携帯電話無しに正確に日本の特定の人間に概念送受を飛ばす自信が無かった。

たった一人を、除いては。

「……梨香……大丈夫かしら」

恵美は、この状況にあつて唯一、交信できた日本の友人の顔を思い出す。

千穂は、自分が何も持っていないくても、相手の携帯電話の番号で概念送受の受信先を絞ることができていた。

そのことに目を付けた恵美は、日本でたった一人、携帯電話の番号を暗記していた梨香の携帯電話にだけ、概念送受をピンポイントで送信することができたのだ。

梨香の携帯番号を暗記している理由は、かつて初めて携帯電話を持ったとき、電話転機能の使い方が分からずに、毎回動機先の連絡名簿を見て番号を手打ちしていたからだだった。

送信できるのは、聖法気のソナー計測を警戒して、軍港の放送が流れるときに限定された。

軍港の放送はなかなかどうして情報量に富んでおり、海戦の結果の他にも、海の日候や首都の貴人の動向などを、かなり長い時間に渡って放送するため、会話もその分余裕を持ってでき

たのだが、

「……梨香……」

恵美は、今では梨香に連絡を取ったことを後悔していた。

梨香は、自分達のことなど何も知らないのだ。

真奥達に最後に連絡した日と梨香へ連絡した日にズレがあれば、双方がコンタクトを取り合ったときに真奥が鈴乃あたりが異常に気づくかもしれないと考えた。

しかし、場合によってはそのことで梨香がエンテ・イスラの事情に巻き込まれるかもしれない、と気づいたのは、二度目の電話をした後だった。

もしそれで梨香が危険な目に遭ってしまったら恵美はどんな言葉で詫言ければいいのだろうか。

「ずっと嘘つき続けてた、バチが当たってるのよね……」

「ま………だいじょぶ？」

いつの間にか、アラス・ラムスが足元に寄ってきていて、心配そうに恵美を見上げている。

「アラス・ラムス」

「あい」

「……あなたは、お友達に嘘なんかついちゃだめよ？」

「うそ？」

嘘をつく、という概念は、まだアラス・ラムスの中には無いらしい。

知らない言葉に首を傾けるが、恵美はそれ以上何も言わずに遠くのうねる海に目を戻した。

「……大体、もし榮香が魔王達と連絡取ったからって……どうだっていうのよ」

漆原はまるで興味を示さないだろうし、首屈あたりは万歳三唱でもしような気がする。

真奥はアラス・ラムスのことがあるから少しは焦るだろうが、基本的には恵美の心配などしないだろう。

心配なんか、されてたまるものか。

「心配なんか……」

じゃあ、何を期待して、榮香に概念選受を逃った？

「つ」

恵美は両手で頬を覆うと、歯を食いしばって顔を伏せる。

そうでもしないと、自分でも信じられないような思いが、形になって溢れてきてしまっただったから。

冗談じゃない。そんなこと、あつてたまるものか。

「助けてほしいなんて……思っでない……」

魔王になんて、助けに來られてたまるものか。

大体、今まで真奥に窮地を救われているのも、基本的には真奥が別の目的のために動いた副次的な結果にすぎない。

「まあ、だいじょうぶだよ」

「アラス・ラムス……」

「ばば、くるよ」

「……」

アラス・ラムスに、今の自分の状況をきちんと説明したことはなかった。

理解できるとは思えなかったし、事実アラス・ラムスはどちらかというとどこかにお泊りでもしているみたいに明るくはしゃいでいたと思う。

それでも、アラス・ラムスは、恵美の心の最も弱いところを的確に指摘した。

「……あのねアラス・ラムス。ばばは……お仕事で忙しいの。だから、ままは、自分のことは自分でしなきゃいけないのよ。勇者なんですから」

「ゆーしや」

「そう、だから……」

「そーしなきゃめって、いわれたの？」

「……」  
子供とは、ときに本当に恐ろしい。

「そう……ね、でも、……うん」

恵美は、自分を母と慕う少女の、無垢で真摯な問いかけから逃げた。

「でももし来てもらうなら、鈴乃お姉ちゃんか、エメラダお姉ちゃんの方がいいかな」  
「すずねーちゃ、あいたい。あと、ちーねーちゃも。あるしえーるとるしふえるも」

「……うん、そうだね……会いたい、ね」

「わぶっ」

恵美はアラス・ラムスを抱き上げると、アラス・ラムスがもぐくほどにその小さい体を抱きしめた。

あんなに帰りたいと思っていたはずのエンテ・イスラの清風が、恵美の心を軋ませる。

その瞬間、部屋のドアがノックされる音がして、恵美は驚いてアラス・ラムスを床に下ろし、

「ちよっとだけ、ごめんね」

アラス・ラムスの具現化を解除し融合状態に戻る。

部屋に入ってくる人物と相対する自分の姿を、アラス・ラムスに見られたくなかった。

聖剣の勇者にあるまじき、真っ黒な感情に侵された自分など。

目の縁を拭うと大きく息を吐いて、ドアの向こうの相手を射殺せるほど鋭い視線を飛ばす。

「どうぞ」

「失礼するよ」

それは、懐かしい声だった。

かつてそれは、安心の象徴だった。

今は、憎悪しかない。

「……なんの用、オルバ」

現れたのは、大法神教会六人の大神官の一人にして、惠美のかつての魔王討伐の仲間、オルバ・メイヤーだった。

日本の戦場で諜原を使って凶行に及んだ末に悪魔型を取り戻した真奥に倒されたが、如何なる手段を用いてか、少し前にエンテ・イスラに戻っていることを、惠美も鏡子に訪れた悪魔カミーオの口から聞いて知っていた。

だが、ファイガンにやってきて実際にその顔を見たときに、自分の中にこれほどの黒々とした怒りの感情が潜んでいたのかと驚くほど、かつての仲間に対して憎しみが燃え上がった。

「今日は君に届け物があつてやってきた。すぐに失礼するから、そう怒るな」

「あなたからもらったものなんて、後で世話役のメイドの子に突っ返させるわよ」

「ははは、まあ、私を憎む気持ちとは分かるがな、これはそうはいかないだろう。言うなれば、君がここに来る原因にもなったものだ」

オルバの剃髪された頭には、笹塚の穢いでついたと思われる傷が痼になつて残っていた。法衣の懐からオルバが取り出したのは、一見なんの変哲もない小さい麻の袋だった。

「我々が約束を守っていることを、君にも分かつてもらいたいと思つてね、現物を見た方が君も安心するだろうと思つてサンプルを持つてこさせた」

オルバの老いた手に、それなりにずっしりとした重量感を感じさせる麻の袋。

恵美は、その袋の口を結んでいる草を編んだような紐と、袋の角の小さなポケットに詰め込まれている葉を見て、目を見開く。

紐も、葉も、特殊な加工を施し、穀物を保管する際の湿気対策に用いられる乾燥剤の役割を果たすものだった。

「どうやら、その顔は分かつたようだな。この中身が何なのか」

オルバはにやりと笑つて紐の封を解こうとするが、恵美は叫ぶ。

「待つて！ ここでそれを開けたら……!!」

恵美の目は、袋と外の景色を往復していた。

「悪いが、これをこのまま渡して大切に保管されたら、意味が無いのでな」

オルバは止める間もなく袋を開くと、扉の前の卓に置かれていた水差しの中に中身を流し込んだ。

「やめてっ!!」

恵美の叫びもひなしく、麻袋からざらざらと流れ出したそれは、海辺特有の塩分含有量の多い水に束の間浮かんで、すぐに水を吸って水差しの底に沈んでゆく。

それは、麦の種もみだった。

恵美は、水底に沈んでしまったそれを絶望的な気持ちで見る。

「安心しろ。サンプルだと言っただろう。まだまだストックは大量にある。これで、私達が約束を守っていることは理解できただろう？」

オルバは麻袋を無造作に水差しの上に放り出すと、言葉の出ない恵美に言った。

「先ほども言ったが、エミリア、君が言うことを聞いてくれれば『人質』はきちんと西大陸出身の専門家達に世話をする。だが、少しでもおかしい真似をすれば、全てがこうなる」

オルバは、水差しの中に沈んでしまった種もみを一瞥した。

「間もなく舞台が整う。それまで、じっくり英気を養っておいてくれ」

呆然としている恵美の返事を聞かずに、オルバは部屋を去った。

その足音が聞こえなくなった頃、恵美は力なく床に膝をつく。

水底に沈んだ麦の種もみ。

異なる土地の、飲用水とはいえ塩分濃度の高い水に浸された種もみは、もう使い物にならない。

い。

それが、恵美が囚人の相手に屈辱し、こんなところに見えない鎖で囚われている最大の理由

だった。

「まよ……」

頭の中で、アラス・ラムスの心配そうな声が響く。

だが、惠美はそれにすら答える余裕が無かった。

何が勇者だ。

自分は、これだけされても剣を振るうことのできない、無力な人間だ。

「……たす……けて……誰か……」

涙の流れる静かな音は、港に押し寄せる海岸の波の音に消え、惠美白身と、アラス・ラムス以外に届くことは決してなかった。





# 作者、あとがく — AND YOU —

昔から、業務用車というものにロマンを感じずにはいられません。

日本の産業や物流や消費活動に多大な影響を及ぼす業務車両と、日々それらを駆って仕事をされている方々には畏敬の念を感じずにはいられません。

工事車両とか空港の特殊車両なんかはもちろん、街中をごく普通に走っているトラックや輸送用ワゴンなんかにもシビれてしまいます。

初めて軽トラを運転したとき、あの小さい車体に詰められた物凄いパワーに感動しました。

初めてハイエースを運転したとき、友人の引越越し荷物一式が乗っているにも関わらず、まるで機動性が損なわれないことに感動しました。

そんな和ヶ原<sup>わがはら</sup>ですから、ビザデリバリーなどでよく使用されているカーゴ付のデリバリー用スクーターに幼い頃から憧れていました。

屋根がついて後輪が二つあるってだけで他のバイクと全然違って見えて、本当に格好いいと思っています。賛同してくれる人は今のところ身近にはいません。

本書執筆にあたり、便利なものだし車より手軽だし、この際だから購入してしまおうか、と夢想したのですが、いざ調べてみるとさすが機動性特化の業務向けスクーター。

正価がなまじのスクーターの三倍近く、中古の軽自動車くらい買えてしまう値段でした。

他にも和々原はやたら頭がデカく、着用可能なヘルメントがXXXL（64cm以上サイズ）しかなさそうなのです。バイクなんて保険とかもありますし、購入に必要なお金の総額を考えると、もうしばらく検討しなければならなそうです。

エンジン付きの乗り物というのは、やはり行動の多様性や半徑を大きく広げます。

もちろんそれに伴い果たさなければならぬ社会的責任もあるわけですが（運転免許を持つ者には安全運転と道交法を遵守する義務と責任がありますので）、それでも広がる世界の魅力には抗い難いものがあります。

本書が皆様のお手元に届くのは二〇一三年の四月一〇日以降。

そのときに本書をお手に取っている読者の方はご存知のこととは思いますが、四月はTVAニメ「はたらく魔王さま!」の本放送が開始される月でもあります。

小説、コミックスに続き、アニメにまで広がった「はたらく魔王さま!」の世界ですが、新たな切り口の魅力を発見する楽しみを持つと共に、広がったそれぞれの世界で作品がより良いものになるよう心を砕くのが、原作者としての責任かと思えます。

林 曉生さんの原作コミカライズ「はたらく魔王さま!」。

三嶋くろねさんのスピンオフ「はたらく魔王さま! ハイスクール!」。

そして四月より始まる福田直人監督によるアニメ「はたらく魔王さま!」が読者の皆様にと

って真栗貞夫や道佐恵美の暮らす世界をお楽しみいただく一助となれば、原作者としてこれほど嬉しいことはありません。

それに伴って、というわけではありませんが、本書「はたらく魔王さま! 8」の作中においても、かつてない激動の末に読者の方にお見せする世界が広がりを見せつつあります。

広がりはじめたが故に「はたらく魔王さま! 8」の物語はこのような形になっております。急展開必至の次巻も是非お楽しみにお待ちいたただければと思います。

今頃のお話は、二つの世界を股にかけて激動の物語が動き出しそうなのに、やってみることは相変わらず所帯じみている魔王や勇者たちが、積極的に自分から動き出すお話です。

自分を変えたければ、自分で動くしかありません。

魔王も勇者も女子高生も、悪魔も聖職者も天使も、そう思っていることでしょう。

ですがどんな立派な目的があろうと、聞けなき愚言が許されるわけではないので、今頃はチヤライ大天使が軽い気持ちで放った愚言を、作者が変わりまして日本全国のタロウ様に深くお詫び申し上げて、あとがきを締めくくらせていただきたいと思えます。

また次巻でお会いできることを願って。

それではっ!!

8巻発売おめでとうございます！

電撃大王版コミック作画の柊暁生と申します。

いよいよアニメ放映ですね！今から

いち視聴者として楽しみにしています！ (๑)

新商品  
試食

ソース  
ついてきた...

コミックス最新③巻も  
よろしくおねがいします…！

2013.4.10  
柊暁生 (๑)

SPECIAL  
GUEST

●和ヶ原聡司著作リスト

「はたらく魔王さま！」  
(宝島文庫)

「はたらく魔王さま! 2」  
(四)

「はたらく魔王さま! 3」  
(四)

「はたらく魔王さま! 4」  
(四)

「はたらく魔王さま! 5」  
(四)

「はたらく魔王さま! 6」  
(四)

「はたらく魔王さま! 7」  
(四)

「はたらく魔王さま! 8」  
(四)

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

電撃文庫公式ホームページ 読者アンケートフォーム

<http://dangokubunko.dangoku.com/>

※メニューの「読者アンケート」よりお進みください。

ファンレターあて先

〒102-8584 東京都千代田区宣土町1-8-19

アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部

「和×園野間先生」係

「OGP先生」係

\*\*\*\*\*

本書は書き下ろしです。



電撃文庫

# はたらく魔王さま! 8

あがはらさとし  
和ヶ原聡司

発行 二〇一三年四月十日 初版発行

発行所 塚田正晃

株式会社アスキー・メディアワークス

〒一〇二八五八四東京都千代田区墨田一八十九

電話〇三三五二一六八三九（編集）

〇三三五二一六八四〇（営業）

発売元

株式会社角川タカラブホール・メディア

〒一〇二八一七七東京都千代田区墨田一十二二

電話〇三二三三八一八五二二（営業）

印刷

株式会社印刷

製本

株式会社印刷

印刷

印刷

印刷

印刷

印刷

## 電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで“小さな巨人”としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の思い出として、語りついできたのである。

その道を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、(Changqing Times/Changqing Publishing)時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日  
角川歴彦

# はたらく魔王さま！

和ヶ原隆司

イラスト／OZ

ISBN 978-4-04-870270-6

世界は無限に広がった魔王が、勇者に敗れて逃げ続けた先は、異世界「東京」だった。六畳一間のアパートを家とする魔王は、フリーターとして働く魔王の明日はどうか。

わ-6-1 2078

# はたらく魔王さま！2

和ヶ原隆司

イラスト／OZ

ISBN 978-4-04-870547-9

店長代理に昇進し、ますます張り切る魔王。そんなある日、魔王城。築60年の六畳一間の間に、女の子が引っ越してきた。心細くやがていられない千鶴と魔王だったが、

わ-6-2 2141

# はたらく魔王さま！3

和ヶ原隆司

イラスト／OZ

ISBN 978-4-04-870815-9

東京・都心の六畳一間の魔王城に、異世界からのゲートが開く。そこから現れた謎い少女は、魔王をパパ、勇者をママと呼んで――。

わ-6-3 2213

# はたらく魔王さま！4

和ヶ原隆司

イラスト／OZ

ISBN 978-4-04-870744-5

バイト先の休日により暇を失った魔王。しかもアパートも修理のため一時退去となる。魔王と魔王城を一夜に失い失業者の魔王は、なぜか「猫の家」ではたらくことになる。

わ-6-4 2281

# はたらく魔王さま！5

和ヶ原隆司

イラスト／OZ

ISBN 978-4-04-880644-1

異世界と銀行中の魔王が、世界の運命を手にしに異人を探し、異世界の監視者、彼らもそれに従事すること。そんな中、魔王の女子高生・千鶴に危機が迫っていた。

わ-6-5 2348

# はたらく魔王さま！ 6

和ヶ原監督

イラスト／D&B

ISBN978-4-04-066990-4

マダロナルドに復帰した魔王は、心機一新して事業を再開することに。そんな中、千穂が彼女と再会したいと言い出す。她らが旅行の場に誘ったのはなぜか謎で？

6-6-6 2423

# はたらく魔王さま！ 7

和ヶ原監督

イラスト／D&B

ISBN978-4-04-061406-2

真美と真美がアラス・ラムスのお礼を買いに3人でお出かけ。千穂が真美と初めて出会った頃のエピソードなど、第7巻は他2巻を加えた特別編でお届け！

6-6-7 2480

# はたらく魔王さま！ 8

和ヶ原監督

イラスト／D&B

ISBN978-4-04-061580-9

真美がエミナ・イスラに推薦することになり、羽を伸ばす真美。心配する千穂。一方真美はマンダの新事業のために免許試験を受けるが、試験場であわぬ出合いが？

6-6-8 2519

# 完璧なレベル99など存在しない

岡崎ツカサ

イラスト／明葉いづへ

ISBN978-4-04-091129-9

ゲーム少年・牧野の自覚のたふとは、自分が今までにプレイしたゲームの登場人物たちが集う謎の異世界だった！ しかも世界は開放なレベル99の「無尽蔵世界」状態……

7-8-16 2437

# 完璧なレベル99など存在しない II

岡崎ツカサ

イラスト／明葉いづへ

ISBN978-4-04-091420-8

ゲームの登場人物たちと謎の異世界の真相を解ける牧野。砂漠の街で仲間になった気さくな少女は、原作のゲームでシナリオ進行上（敵となる）キャラクタ？！で？

7-8-17 2518